

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第9集

秋葉林遺跡Ⅲ

第二東名No.25地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-9

2012

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第9集

秋葉林遺跡Ⅲ

第二東名No.25地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-9

2012

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

第二東名高速道路の建設に伴い、静岡県内では数多くの埋蔵文化財発掘調査が行われてきました。特に県東部の愛鷹山南麓では、旧石器時代から古墳時代までの遺跡が数多く発見されています。

その一つである秋葉林遺跡は調査面積が約65,000m²と広大で、平成10年度から平成18年度にかけて実施した発掘調査により多くの貴重な遺構や遺物が出土しています。その成果は既に『秋葉林遺跡Ⅰ』・『秋葉林遺跡Ⅱ』の2冊の報告書にまとめられています。

なかでも、日本最古級の石器群のひとつとされる第VII黒色帶から出土した旧石器時代の石核と剥片石器や、畿内王権との関係を推測させる装飾性の高い圭頭大刀を出土した古墳時代後期の1号墳は注目される成果です。

今回の報告書は平成22年度に実施した遺跡南部の谷部の調査結果を報告するものです。多くの溝や土坑（穴）が検出され、中には生業の一部を担っていたと考えられる陥穴状遺構もあり、過去の状況を含め秋葉林遺跡の全体像を考える上で貴重な成果を上げることができました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例　　言

1 本書は静岡県沼津市青野字秋葉林831他に所在する秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）の発掘調査報告書Ⅲである。これまで秋葉林遺跡に関する報告書として、平成21年度に『秋葉林遺跡Ⅰ』、『秋葉林遺跡Ⅱ』を刊行している。

2 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化財課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。平成23年4月から静岡県埋蔵文化財センターが調査業務を引き継いだ。

3 秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査　その4　平成22年9月～10月　　実掘面積　185m²

本調査　V期　平成22年11月～平成23年3月　　実掘面積　1874m²

資料整理　平成23年4月～平成24年3月

4 調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平成22年度

所長兼常務理事 石田 彰 次長兼総務課長 松村 享 専門監兼事業係長 稲葉 保幸

総務係長 瀧 みやこ 調査課長 中鉢 賢治 調査第二係長 岩本 貴

調査研究員 木崎 道昭

静岡県埋蔵文化財センター

平成23年度（資料整理）

所長 勝田 順也 次長兼総務課長 八木 利眞 主幹兼事業係長 村松 弘文

総務係長 瀧 みやこ 調査課長 中鉢 賢治 主幹兼調査第一係長 富樫 孝志

主査 岩本 貴 常勤嘱託員 柳澤 利枝

5 本書の執筆は柳澤利枝が行った。

6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7 以下の業務について、外部委託によって実施した。

現地掘削業務 株式会社植松建設

現地測量業務 株式会社シン技術コンサル静岡営業所

整理作業・保存処理業務 株式会社パソナ

8 整理作業では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

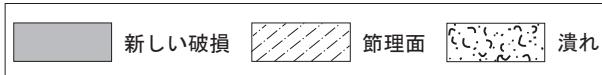
池谷信之 小崎 晋（五十音順・敬称略）。

9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を示す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
No.25地点 (X = -94500.0, Y = 28680.0) = (A, 0)
- 3 出土遺物は5桁の通し番号（遺物番号）を付して取り上げた。土器P、石器S、礫R、炭化物Cの略号を付した。報告書の図版番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構1/40、土器1/2、剥片石器1/2を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 本文中の遺構・遺物に関する表記は以下のとおりである。
S F : 土坑 S D : 溝 S Y : 集石 P : 柱穴・小穴 F P : 焼土 S B : 積穴住居
- 7 磚の赤化状態については以下のように分類を行っている。
A : 完形で、焼けていない。
B : 完形でなく、焼けていない。
C : 完形で、全面もしくは部分的に焼けている。
D : 完形でなく、割口も焼けている。
E : 完形でなく、割口以外が焼けている。
- 8 石器実測は第三角投影図法に拠った。
実測中に用いた指示記号は、以下のとおりである。



- 9 石器計測にあたっては、基軸を長さとした。幅と厚さはそれぞれ長さに対して直交する部位の最大値とした。
- 10 本書で用いる石材の略号は下記のとおりである。

石材一覧

和　名	英　名	略号	和　名	英　名	略号
黒曜石	obsidian	Ob	火山礫凝灰岩	lapilli tuff	LT
ホルンフェルス	hornfels	Hor	輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)
頁岩	shale	Sh	多孔質安山岩	vesicular andesite	VAn
細粒砂岩	fine-grained sandstone	FSS	玄武岩	basalt	Ba
中粒砂岩	medium-grained sandstone	MSS	スコリア質玄武岩	basalt(scoria)	Ba(Scr)
粗粒砂岩	coarse-grained sandstone	CSS			

- 11 土層名は第3章第3節の基本土層図（第4図）および土層堆積状況（第5図）に表示した名称を用いる。
- 12 第3章第1節の周辺の主要遺跡図（第2図）は国土地理院発行1:25,000地形図「沼津」を複写して加工・加筆した。

目 次

第1章 調査の経緯 1

第2章 調査の方法

第1節 調査の方法 2
第2節 調査の経過 2

第3章 遺跡の環境

第1節 地理的環境 4
第2節 歴史的環境 4
第3節 基本層序 8

第4章 検出遺構

第1節 栗色土層～休場層上面の遺構 10
第2節 暗褐色土層面の遺構 14
第3節 新期スコリア層の遺構 20

第5章 出土遺物

第1節 旧石器時代の遺物 36
第2節 繩文時代の遺物 38
第3節 弥生時代～古墳時代初頭の遺物 47

第6章 まとめ

第1節 今回の調査のまとめ 50
第2節 過年度調査との関連性 52

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査範囲とグリット配置図	3
第2図 周辺の主要遺跡	5
第3図 周辺地形と 平成22年度調査対象範囲	6
第4図 基本土層図	8
第5図 土層堆積状況	9
第6図 栗色土層～休場層上面遺構 全体図	11
第7図 栗色土層～休場層上面 土坑1	12
第8図 栗色土層～休場層上面 土坑2	13
第9図 暗褐色土層遺構全体図	15
第10図 竪穴住居・柱穴・焼土	16
第11図 小穴	17
第12図 焼土	19
第13図 集石	19
第14図 新期スコリア層遺構全体図	21
第15図 新期スコリア層中 土坑	22
第16図 新期スコリア層上面 土坑1	24
第17図 新期スコリア層上面 土坑2	25
第18図 新期スコリア層上面 土坑3	26
第19図 新期スコリア層上面 土坑4	27
第20図 新期スコリア層上面 土坑5	28
第21図 溝1・2・4	32
第22図 溝3（1）	33
第23図 溝3（2）	34
第24図 溝3（3）	35
第25図 旧石器時代遺物分布	37
第26図 縄文時代遺物分布	38
第27図 縄文時代 土器分布	39
第28図 縄文時代 土器	40
第29図 縄文時代 石器石材別分布	43
第30図 縄文時代 石器1 (石鎌・スクレイパー)	44
第31図 縄文時代 石器2(打製石斧)	45
第32図 縄文時代 石器3(打製石斧)	46
第33図 弥生時代～古墳時代初頭 遺物分布	48
第34図 弥生時代～古墳時代初頭 土器	49
第35図 第VI黒色帯～ 第IIIスコリア帯スコリア2 礫分布	53
第36図 休場層 磴群・礫分布	53
第37図 縄文時代 土坑分布	54
第38図 縄文時代 集石・礫分布	54
第39図 縄文時代 出土石器数	55
第40図 新期スコリア層 溝と土坑	57

挿表目次

第1表 栗色土層～休場層上面 土坑計測表	13
第2表 暗褐色土層 柱穴・小穴計測表	18
第3表 暗褐色土層 焼土計測表	19
第4表 暗褐色土層 集石計測表	19
第5表 集石19 磴観察表	19
第6表 新期スコリア層 土坑計測表	29
第7表 新期スコリア層 溝計測表	35
第8表 旧石器時代 磴出土状況	36
第9表 旧石器時代 磴組成表(層位別)	36
第10表 旧石器時代 磴観察表	36
第11表 縄文時代 土器出土状況	39
第12表 縄文時代 土器観察表	41
第13表 縄文時代 石器出土状況	42
第14表 縄文時代 石器観察表	46
第15表 弥生時代～古墳時代初頭 土器出土状況	47
第16表 弥生時代～古墳時代初頭 土器観察表	49

写真図版目次

- | | | |
|------|-----------------------------|--|
| 図版 1 | 秋葉林遺跡遠景 | 柱穴 5 |
| | 本調査区完掘状況 | 小穴11 |
| 図版 2 | テストピット 01 | 図版 4 新期スコリア層完掘状況（北より） |
| | テストピット 05' | 溝SD16 |
| | テストピット 01~04調査終了状況
(南より) | 溝3 (SD17) |
| | 土坑267 | 溝3 (SD24) |
| | 土坑268 | 溝1 (SD22) |
| | 土坑269 | 溝2 (SD19) |
| | 土坑271 | 溝4 (SD27) |
| 図版 3 | 土坑270 | 土坑241 |
| | 集石19 | 土坑246 |
| | 焼土4・5検出状況 | 土坑251 |
| | 焼土4・5完掘状況 | 図版 5 繩文土器
弥生後期～古墳前期土器 |
| | 竪穴住居完掘状況 | 図版 6 繩文石器 石鏃
繩文石器 スクレイパー
繩文石器 打製石斧 |
| | 小穴2・3断面図 | |
| | 柱穴 1 | |

第1章 調査の経緯

混雑する東名・名神高速道路の抜本的な対策として昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議され、平成元年1月に第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において基本計画が策定された。平成3年9月24日には静岡県長泉町～引佐町（現浜松市、以下同じ）の都市計画決定通知がなされた。

平成4年8月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務局長から静岡県教育委員会教育長に対し「第二東名自動車道の埋蔵文化財包含地の所在の有無について」の照会がなされた。これを受け静岡県教育委員会は平成4年9月29日に関係市町村教育委員会に第二東名路線内における埋蔵文化財の所在について照会を行った。踏査結果は静岡県教育委員会が取りまとめ、平成5年3月18日付けで静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長に回答がなされている。

その後、平成5年11月19日付けで日本道路公団に長泉町～引佐町間の施工命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で埋蔵文化財調査の進め方についての協議がなされ、発掘調査については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、当財団）へ委託することが確認された。

平成6年度には、静岡県教育委員会文化課職員が調査対象箇所について具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年に示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告と取りまとめがなされた。

平成7年度には日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と静岡県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」を設置し、第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いを協議する場とした。

平成8年度には、第二東名建設にかかる埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、翌日付けで調査実施機関である当財団を加えた3者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくことになった。

なお、第二東名にかかる埋蔵文化財の調査は関係者協議の結果、基本的には本線およびサービスエリア・パーキングエリア、排出土処理については当財団が調査を実施、工事用道路および取り付け道路部分については当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に当財団の体制が追いつかないため、本線部分の一部についても沼津市や静岡市、浜北市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応を依頼するとともに、特に東部地域を中心に民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

このような経緯の中、沼津市域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）の調査が行われた。この調査は平成10年度から12年度に確認調査その1・その2・その3と本調査I期・II期・III期が実施されている。さらに平成18年度には本調査IV期が実施され、膨大な量の資料が検出された。平成19年度からの資料整理を経た後、平成21年度に報告書として『秋葉林遺跡I』・『秋葉林遺跡II』が刊行されている。

平成22年6月22日には中日本高速道路株式会社沼津工事事務所、静岡県教育委員会文化財保護課および当財団の3者により、調査済み地域の南側に当たる工事用道路等の建設箇所における埋蔵文化財の取り扱いについて協議された。ここで、工事施工範囲について確認調査を実施し、遺構・遺物が確認された場合は本調査等記録保存の対応をすることが確認された。

第2章 調査の方法

第1節 調査の方法

秋葉林遺跡全体の統一を図るため、既に刊行されている報告書『秋葉林遺跡I』・『秋葉林遺跡II』と同様の座標を用いる。日本測地系の平面直角座標VIII系の旧基準(X, Y) = (-94500.0, 28680.0)を原点(A, 0)として、Y軸に対して南北方向にアルファベット、X軸に対して東西方向にアラビア数字を付した10m四方のグリッドを設定した(第1図)。調査対象面積は6,759m²である。

座標の管理には株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を用いた。

遺構や遺物の写真撮影は6×7判白黒フィルムを主に用い、35mm判カラーフィルム・同スライドフィルムを併用した。さらに、遺跡全体を記録する写真として、6×7判白黒フィルム・同スライドフィルムを用いラジコンヘリにより空中撮影を行った。

第2節 調査の経過

1 確認調査(第1図)

平成22年8月19日、中日本高速道路株式会社と静岡県埋蔵文化財調査研究所の2者で確認調査の実施について協議し、4m×4mのテストピット7箇所の設定を行った。

平成22年9月9日から調査を開始した。バックホウによる表土除去の後、人力による掘削を進めた。調査の結果、尾根部ではTP01の搅乱層から土器19点、石器1点が出土した。TP01の休場層から礫が出土したため拡張調査を行ったが、礫の広がりは確認されなかった。なお、この拡張調査で土器が1点出土した。谷底部ではTP05～07の新期スコリア上面で溝状遺構・円形土坑が確認されたため、本調査を実施することとした。遺物は土器2点、石器1点であった。

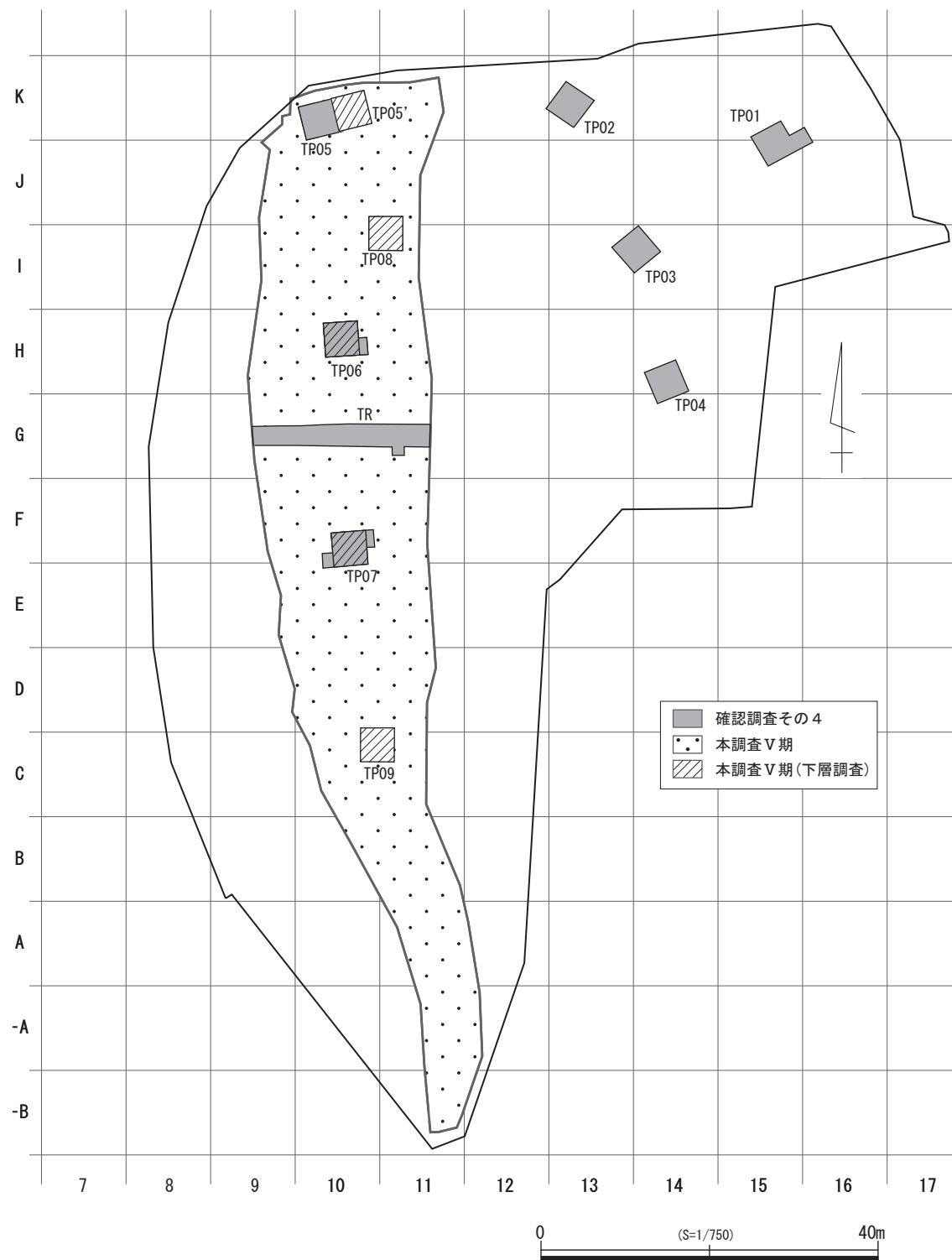
また、本調査の対象範囲を確定するため、TP06とTP07の間に谷部に直交するトレーナーを設定し掘削した。

2 本調査(第1図)

平成22年11月18日から調査を開始した。確認調査の結果を踏まえ、県教委文化財保護課の判断により、調査範囲を谷部の約2,000m²と定めた。バックホウによる表土除去後、ベルトコンベアを設置して新期スコリア上面の人力掘削調査に入った。確認調査で検出されていた遺構の全体像が明らかになり、土坑29基と溝13条が検出された。遺物は土器16点、石器5点であった。平成23年1月27日、ラジコンヘリにより新期スコリア層上面の完掘状況を撮影した。

引き続き、確認調査TP06・TP07と新たに設定したTP05'・TP08・TP09の5箇所で下層調査を行った。約1mの無遺物層を経て休場層上面で土坑が確認されたため、遺構検出範囲である800m²を本調査の対象とした。なお、遺物は土器2点、石器9点が出土している。

休場層上面までの無遺物層をバックホウで除去した後、人力掘削を行った。調査の結果、土坑5基が確認された。本調査区北端の谷頭部では、等間隔で並ぶ小穴や焼土が検出されるとともに、周囲から石器が出土していることなどから竪穴住居と判断した。遺物は土器が1点、石器が7点確認された。平成23年3月11日、ラジコンヘリにより休場層上面の全景を空中撮影し、3月18日に調査を終了した。



第1図 調査範囲とグリット配置図

第3章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）は、JR原駅から北へ約3.6km離れた愛鷹山南麓の標高120～150m、沼津市青野字秋葉林831他に位置する（第2図）。秋葉林遺跡は愛鷹山南麓の丘陵地に集中する遺跡のひとつで、尾根と深い谷にまたがる広範囲の遺跡である。西隣には谷を挟んで的場古墳群・的場遺跡（No.26地点）がある（第3図）。また、愛鷹山南麓から海岸沿いの千本砂丘との間は浮島沼と呼ばれる低湿地が広がる。北には富士山、南には駿河湾を望んでいる。

愛鷹山は約40万年前から10万年前に活動していた成層火山であり、火口を中心に放出された火山碎屑物や流出した溶岩が幾重にも積み重なって形成されている。この火山活動により愛鷹山麓の南東側になだらかな丘陵地が広がった。その後、浸食作用により放射状の尾根と谷を形成していく。特に頂部は失われ、4つの峰が火口壁を作っている。

この基盤の上に主に箱根火山・古富士火山・新富士火山により多量の火山灰が積もり、最大10mにも及ぶ愛鷹ローム層を形成していく。愛鷹ローム層は上部・中部・下部の3層に分類されている。このうち上部愛鷹ローム層で遺構・遺物が確認されている。このローム層は、火山灰の降下が休止した時期に植物が繁茂してできた腐食土壌の黒色帯と、激しい噴火で短期間に積もったスコリア層が交互に堆積している。関東地方の立川ローム層に対比されており、地質学的・考古学的編年の有用な指標となっている。

新富士火山が約1万4千年前から約1万年前に活発化し、現在の富士山に近い状態を形成する。その際、何度も多量の溶岩が流出したが、愛鷹山が障壁となり山の南側への影響は少なかった。

山腹斜面底に多くの沢を刻み緩やかな傾斜を持つ丘陵地は、見晴らしのよい良好な居住地であり、旧石器時代から人々の生活していた証が数多く残されている。

参考文献

富士市教育委員会 1991『富士市の自然—ガイドブック—改訂版』

第2節 歴史的環境

旧石器時代

愛鷹山麓は各地層の年代が比較的明瞭で全国屈指の旧石器時代研究フィールドである。沼津市足高の休場遺跡は日本の考古学史上記念碑的な遺跡として昭和54年に国指定史跡とされている。その後の調査でも多くの遺跡が確認され貴重な資料が検出されている。

後期旧石器時代の遺跡は上部愛鷹ローム層から多数確認されている。約2万年間に相当するこの層中では、石器の形や種類の変遷が認められる。

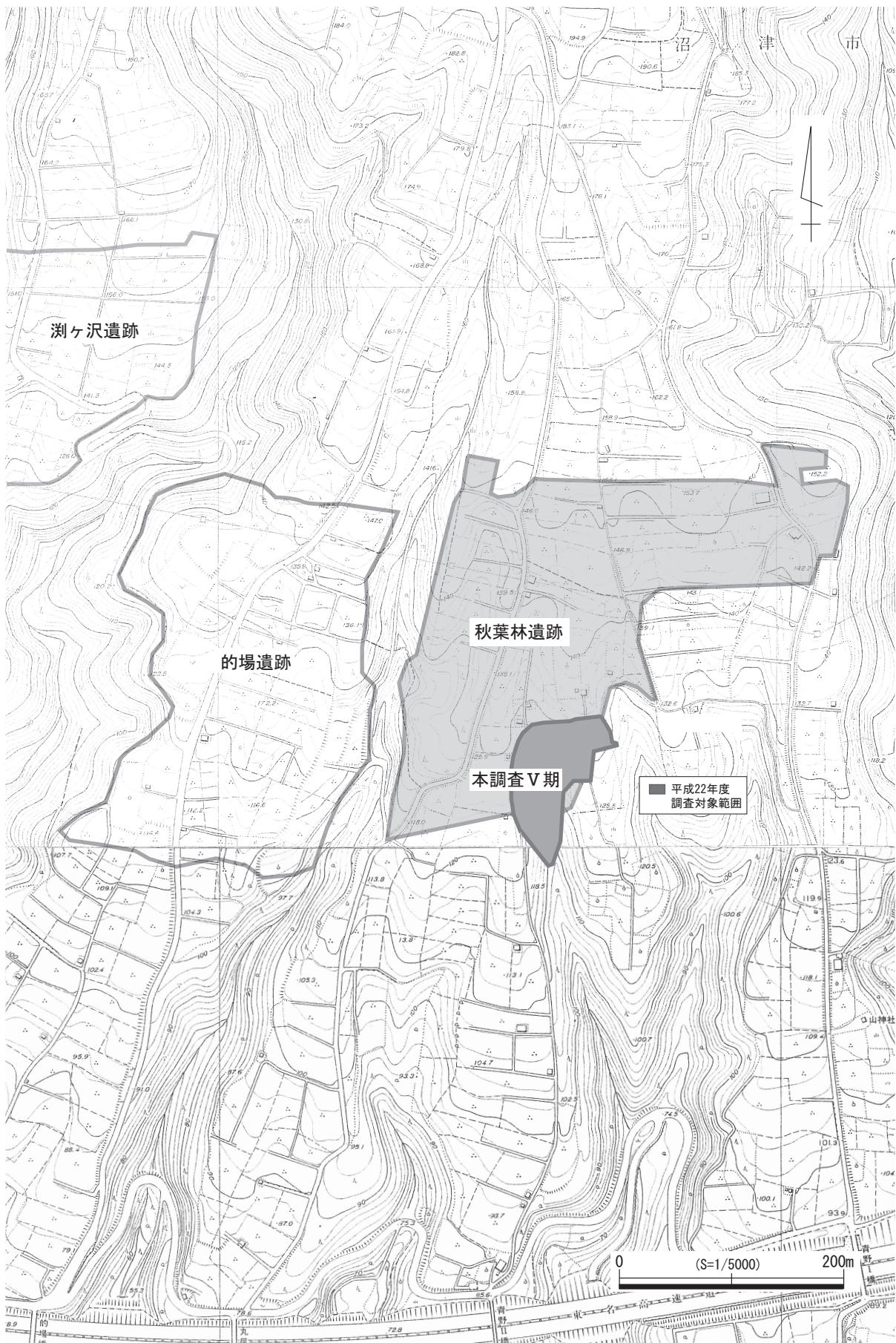
第二東名建設に伴う発掘調査では元野遺跡の第VII黒色帯から、意図的な剥離痕のある石器が出土した。この石器は後期旧石器時代初頭の日本最古級とされる重要な資料である。その後、的場遺跡、渕ヶ沢遺跡、本遺跡でも第VII黒色帯に相当する層から石器が確認されている。第VI黒色帯では台形様石器が中見代第I遺跡で出土し、第V黒色帯では石器の環状ブロックが土手上遺跡や中見代第I遺跡で検出されている。第IIIスコリア帯では定型的なナイフ形石器が清水柳北遺跡や中見代第I遺跡などで検出された。



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	秋葉林遺跡	11	元野2号墳	21	トヤ坂遺跡	31	中アラク遺跡	41	土橋遺跡
2	的場遺跡	12	伊良宇祢遺跡	22	東原遺跡	32	興國寺城跡	42	猫山遺跡
3	渕ヶ沢遺跡	13	古宮遺跡	23	東原中アラク遺跡	33	古城遺跡	43	葱川遺跡
4	鎌沢遺跡	14	大芝原遺跡	24	ヲカメ遺跡	34	ヌタバ遺跡	44	松木遺跡
5	錢神遺跡	15	大廊遺跡	25	荒井遺跡	35	丸山橋遺跡	45	神田遺跡
6	茗荷沢遺跡	16	丸尾遺跡	26	東原金山神社遺跡	36	堀込遺跡	46	北畠遺跡
7	藤ボサ遺跡	17	光嚴寺沢遺跡	27	東久保遺跡	37	段崎遺跡	47	馬場地下遺跡
8	石川遺跡	18	青野中荒工遺跡	28	下岡遺跡	38	焼畑遺跡	48	阿野氏館遺跡
9	井戸川西遺跡	19	藤ヶ久保遺跡	29	根古屋清水遺跡	39	井出丸山遺跡	49	雌鹿塚遺跡
10	赤野遺跡	20	鳥谷アラク遺跡	30	根古屋丸尾遺跡	40	川上遺跡	50	六軒町遺跡
								51	御殿場遺跡

※1~8は第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

第2図 周辺の主要遺跡



第3図 周辺地形と平成22年度調査対象範囲

休場層ではナイフ形石器および尖頭器から細石刃へと狩猟具が移行する。休場遺跡では細石刃が大量に出土し、本遺跡や愛鷹山麓に位置する多くの遺跡でも確認されている。

縄文時代

縄文時代になると気候が温暖になり、定住傾向が進み、土器の使用も始まる。生活は安定に向かい遺跡数が増加する。草創期では葛原沢IV遺跡、中見代第I遺跡、尾上イラウネ遺跡、拓南東遺跡で隆帯文土器が発見された。早期になると、押型文土器が広合遺跡、西洞遺跡などで、それに続く条痕文土器が尾上イラウネ遺跡や清水柳北遺跡などで検出される。

前期では遺跡が減少するが、中期に再び増加する。中期では丸尾北遺跡や大谷津遺跡で加曾利E式土器や曾利V式土器が出土している。また、装飾性の高い勝坂式土器が現れ、西洞遺跡では一定量認められる。縄文時代後期からは寒冷化も要因となり遺跡数が減少する。

弥生時代

愛鷹山麓の丘陵地で確認される弥生時代の遺跡は、前期～中期に属する遺跡は少なく後期以降のものが大半である。同様に沼津市域でも前期～中期の遺跡は少ない。

平野部の遺跡では、浮島沼周辺部の西通北遺跡で中期中葉以前に掘削された可能性を持つ環濠が検出されており、県内最古級と評価できる。弥生時代後期になると遺跡数が増加し、浮島沼の微高地に立地する雌鹿塚遺跡で40軒以上の竪穴住居や多量の木製品が確認されている。

静岡県東部運転免許センター及びその周辺には弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡が多数確認されている。中でも植出遺跡では竪穴住居300軒以上という大規模な集落が発見されている。また、北西に約1km離れた西洞遺跡では竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。

古墳時代

愛鷹山南麓は県内有数の古墳集中域である。近年調査された辻畠古墳は愛鷹山麓の末端に立地する全長約62mの前方後方墳である。周濠から3世紀前半と判断される土器が出土しており、国内最古級の前方後方墳である可能性がある。これに後続する神明塚古墳は全長54mの市内最大級の前方後円墳であり、早い段階から大型古墳が築かれた地域として全国的にも注目される。

古墳時代後期には長塚古墳をはじめ前方後円墳がつくられ、畿内王権との結びつきを強めていたと考えられる。後期から終末期になると、群集墳が作られるようになり、古墳の数は激増する。荒久城山古墳からは金銅製の馬具が出土しており、二ツ塚古墳からは单鳳環頭大刀が出土している。なお、本遺跡の1号墳では圭頭大刀が出土した。ほぼ完全な形で残っているのは希で非常に貴重な資料といえる。

古代

白鳳時代に創建された日吉廃寺は、最盛期に東西1町（約108m）、南北2町の境内に大伽藍が配置されていたと推定されている。この寺は駿河国最古の寺院であり、駿河郡の政治と深い関わりを持っていたと考えられている。山田式瓦や川原寺式瓦が出土している。

清水柳北I号墳は全国的にも数少ない上円下方墳である。上円部頭頂に凝灰岩製の石櫃が納められており、当時の中央政権とのつながりを予見させる。

中世

室町時代、静岡県東部は今川氏の勢力が強かったが、戦国時代には今川氏、後北条氏、武田氏の戦いの舞台となった。愛鷹山南麓の裾野に当たる根方街道には中世城館や中世以来の寺院が存在する。伊勢新九郎（後の北条早雲）が旗揚げをしたことで知られる興国寺城は、愛鷹山の尾根先端部を利用して築かれており、堀と堅固な土塁を巡らせている。

第3節 基本層序

1 基本層序

調査区の基本層序は、尾根部のTP01北壁の土層堆積状況を基準とした(第4図)。ほぼ愛鷹山麓の標準的な土層といえる。

平成18年以前の本調査で確認された本遺跡の基本層序と比較してみると、休場層下層の堆積はやや薄く、休場層上・中層の半分程度であることが多いが、今回の調査区では上・中層および下層とも同程度の厚み(約15cm)があり、同層の堆積状況に違いが認められる。

一方、谷部の土層堆積状況は次頁のとおり標準的な層序を示さないところがあり、複数土層の混土が二次堆積するなど、複雑な堆積を示している。

層序名 (層位コード)	[色調記号]	[粘性・しまり]	[含有物]
1 表土			
2 栗色土層～富士黒土層(KU～FB)	にぶい黄褐色土 10YR3/1	粘性、締まりなし	0.5～1.0mmの赤褐色・黒色スコリアを極微量含む。
3 休場層上層(YLU)	にぶい黄褐色土 10YR5/4	粘性、締まり弱い	0.5～1.0mmの赤褐色・黒色スコリアを極微量含む。
4 休場層中層(YLM)	褐色土 10YR4/4	粘性あり 締まり弱い	1mmの赤褐色スコリア・0.5～1mmの黒色スコリアを微量含む。
5 休場層下層(YLL)	褐色土 10YR4/6	粘性、締まりあり	1～2mmの赤褐色・黒褐色スコリアを少量含む。
6 休場層直下黒色帯(BBO)	黒褐色土 7.5YR3/2	粘性、締まりあり	1～2mmの赤褐色・黒褐色スコリアを多量に含む。
7 第Iスコリア層(SC I)	暗褐色土 7.5YR3/3	粘性なし 締まり弱い	1～2mmの発泡性の黒褐色スコリア・0.5～1mmの赤褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの黄褐色スコリアを少量含む。
8 第I黒色帯(BB I)	黒褐色土 10YR3/2	粘性、締まりあり	0.5～1mmの赤褐色スコリアを多量に含む。1～3mmの発泡性の褐色スコリアを少量含む。0.5～1mmの黒色スコリアを微量含む。
9 ニセローム(NL)	黄褐色土 10YR5/6	粘性、締まりあり	0.5～1mmの赤褐色スコリアを多量に含む。1～3mmの発泡性の褐色スコリアを少量含む。ATパッチは中ほどに見られる。
10 第II黒色帯(BB II)	暗褐色土 10YR3/4	粘性、締まりあり	1～5mmの発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの黒褐色スコリアを微量含む。
11 第IIスコリア層(SC II)	暗赤褐色土 5YR3/6	粘性弱い 締まりあり	2～5mmの発泡性の赤色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの褐色スコリアを少量含む。褐色土ブロックを少量含む。
12 第III黒色帯(BB III)	黒褐色土 7.5YR2/2	粘性、締まりあり	2～3mmの赤色スコリアを多量に含む。1～2mmの黒色スコリアを少量含む。褐色土ブロックを少量含む。
13 第IIIスコリア帯スコリア1(SC III s1)	にぶい赤褐色 5YR4/4	粘性弱い 締まり強い	1～3mmの発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。1～2mmの黒色スコリアを微量含む。
14 第IIIスコリア帯黒色帯1(SC III 1)	黒褐色土 10YR2/3	粘性、締まりあり	0.5～3mmの発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの黒色スコリアを微量含む。
15 第IIIスコリア帯スコリア2(SC III s2)	暗赤褐色土 5YR3/4	粘性なし 締まりあり	1～3mmの発泡性赤色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの褐色スコリアを多量に含む。1～2mmの黒褐色スコリアを微量含む。
16 第IIIスコリア帯黒色帯2(SC III 2)	黒褐色土 7.5YR3/1	粘性なし 締まりあり	1～3mmの赤褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの褐色スコリアを多量に含む。1～3mmの黒褐色スコリアを微量含む。
17 第IIIスコリア帯スコリア3(SC III s3)	暗赤褐色土 5YR3/4	粘性なし 締まり強い	1～2mmの黒褐色スコリアを少量含む。1～5mmの発泡性の赤褐色スコリアを少量含む。1～2mmの黒色スコリアを微量含む。
18 第IIIスコリア帯スコリア4(SC III s4)	暗褐色土 7.5YR3/4	粘性なし 締まり強い	2～5mmの発泡性の明赤褐色スコリアを微量含む。1～5mmの暗褐色スコリアを多量に含む。2～3mmの赤褐色スコリアを少量含む。
19 第IIIスコリア帯スコリア5(SC III s5)	暗赤褐色土 5YR3/2	粘性なし 締まり強い	0.5～1mmの褐色スコリア・黄褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの発泡性の赤色・黒色スコリアを微量含む。
20 第IV黒色帯(BB IV)	黒色土 10YR2/1	粘性、締まり強い	1～2mmの赤褐色スコリアを多量に含む。1～2mmの褐色スコリアを少量含む。
21 スコリア	暗褐色土 7.5YR3/4	粘性弱い 締まり強い	0.5～1mmの発泡性の黄褐色スコリアを少量含む。0.5～1mmの赤色スコリアを含む。3～10mmの黒褐色スコリアを少量含む。
22 第V黒色帯(BB V)	黒褐色土 10YR3/1	粘性あり締まり強い	1～5mmの発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。1～5mmの褐色スコリアを少量含む。
23 スコリア	褐色土 7.5YR4/4	粘性弱い 締まり強い	2～3mmの発泡性の赤褐色スコリア・褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの黒色スコリアを含む。
24 第VI黒色帯(BB VI)	黒褐色土 10YR3/2	粘性、締まり強い	1～3mmの赤褐色スコリアを多量に含む。褐色土ブロックを少量含む。炭化物を微量含む。
25 スコリア	暗褐色土 7.5YR3/4	粘性弱い 締まり強い	0.5～2mmの発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。0.5～1mmの黄褐色スコリアを微量含む。
26 第VII黒色帯(BB VII)	黒褐色土 7.5YR3/1	粘性、締まり強い	1～3mmの発泡性の赤褐色スコリアを少量含む。0.5～1mmの褐色スコリアを多く含む。明褐色土ブロックを少量含む。
27 第IVスコリア層(SC IV)	にぶい黄褐色土 10YR4/3	粘性あり 締まり強い	1mmの黒褐色スコリアを少量含む。0.5～1mmの赤褐色スコリアを微量含む。
28 中部ローム1a	にぶい黄褐色土 10YR5/4	粘性強い 締まり弱い	0.5～1mmの赤褐色スコリアを少量含む。ソフトローム層。
29 中部ローム1b	にぶい黄褐色土 10YR5/4	粘性強い 締まり弱い	0.5～2mmの赤褐色スコリアを少量含む。1～5mmの褐色スコリアを少量含む。ソフトローム層。

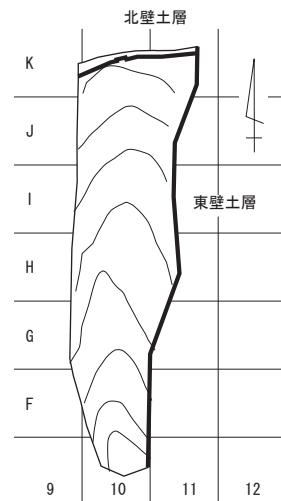
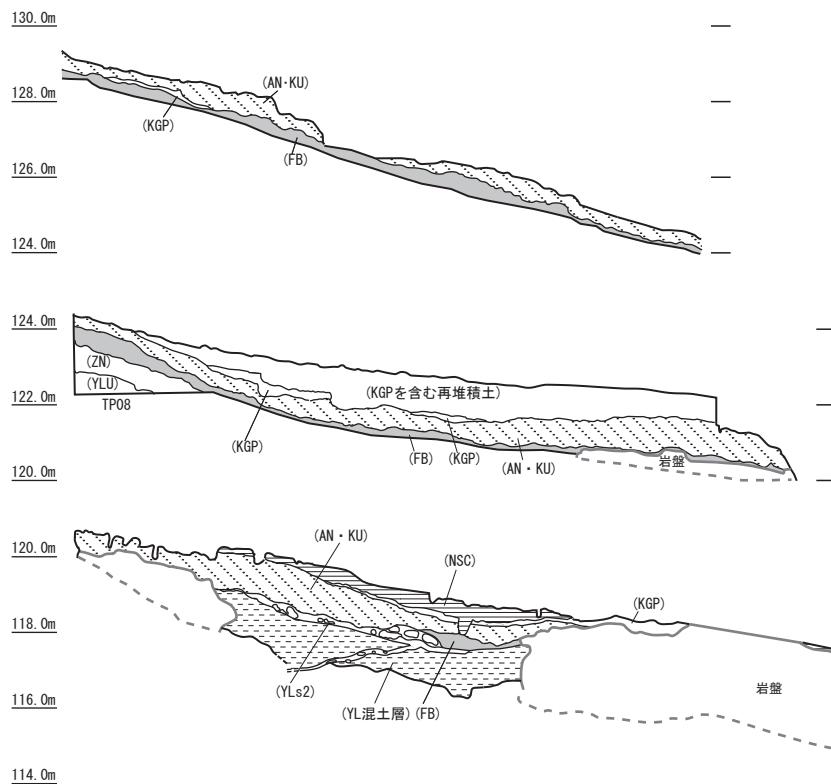
*TP1柱状図

第4図 基本土層図

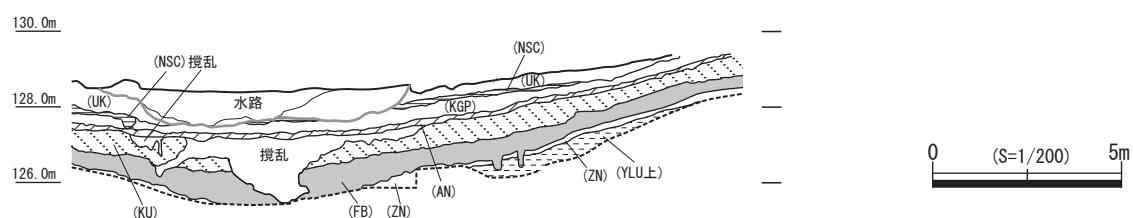
2 本調査区の土層

以前の調査でも明らかなように、秋葉林遺跡の土層堆積状況は概して尾根部で良好であるが、谷部では時間の経過とともに浸食や二次堆積が繰り返され、標準的な層序を示さないところがある。ここでは、本調査区北壁および東壁の土層を本書の記述に関わる層序として示す(第5図)。平成18年以前の本調査で確認された基本層序と比較すると暗褐色土層の上の黒色土層が現れていないが、南に下がったTP05'の壁面では確認されており、黒色土層の堆積状況は一様ではないといえる。

東壁土層断面図



北壁土層断面図



[土層注記]

黒色土層	UK	10YR2/1 黒色土	締まりやや有り、粘性弱い。
新期スコリア層	NSC	10YR4/3 にぶい黄褐色土	締まり無し、粘性弱い。谷の下部で見られる。
黒色土層 (含 KGP)	KGP	10YR2/1 黒色土	締まり無し、粘性弱い。バミスは谷部より少ない。
暗褐色土層	AN	10YR4/2 にぶい黄褐色土	締まりやや有り、粘性弱い。
栗色土層	KU	10YR4/4 褐色土	締まりやや有り、粘性弱い。
富士黒土層	FB	10YR3/3 暗褐色土	締まりやや有り、粘性やや強い。
漸移層	ZN	10YR5/3 にぶい黄褐色土	硬く締まる、粘性弱い。 赤褐色スコリアを多量に含む。

第5図 土層堆積状況

第4章 検出遺構

第1節 栗色土層～休場層上面の遺構

径1m前後の隅丸方形および橢円形の土坑が6～12m間隔に4基検出された。本調査区北半分の谷底部付近に位置し、東西は急斜面であるという立地状況から陥穴と判断した（第6図）。そのうち2基の底面に小ピットがあり逆茂木痕と考えられる。いずれの土坑にも出土遺物はない。また、S F 268とS F 269の覆土は、遺構検出面との時間的前後関係に矛盾が生じていることから、二次堆積土を含むと判断した。

1 土坑（S F）

S F 267（第7図）

K-10グリッドで検出された。隅丸方形を呈し、長径1.57m、短径0.88m、深さ1.07mを計る。断面は逆台形状である。検出面は富士黒土層である。覆土は最下層に暗褐色土層と栗色土層の小ブロックを含む。底面中央に2基の小ピットが認められる。なお、土坑南東隅に小ピット（P 03・P 04）が重複して検出されており、切り合い関係からP 04、P 03、S F 267の順に掘削されている。

S F 268（第7図）

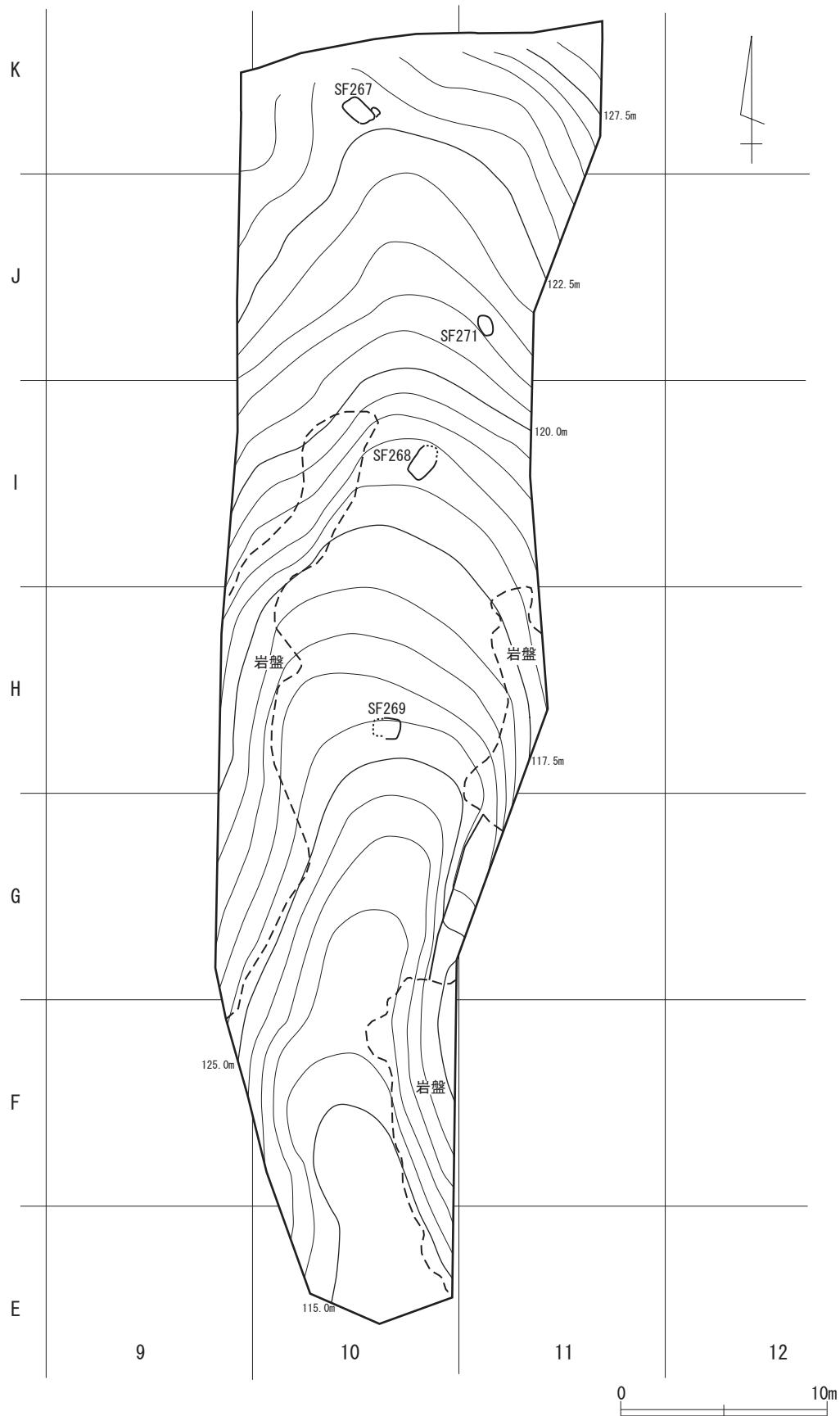
I-10グリッドで検出された。隅丸方形を呈し、長径1.60m、短径1.00m、深さ0.87mを計る。断面は逆台形状である。検出面は富士黒土層である。覆土の最下層は休場層（二次堆積土）が主体である。

S F 269（第7図）

H-10グリッドで検出された。隅丸方形を呈し、長径1.30m、短径1.00m、深さ0.62mを計る。断面は逆台形状である。検出面は栗色土層上面である。覆土の最下層は富士黒土層（二次堆積土）が主体である。

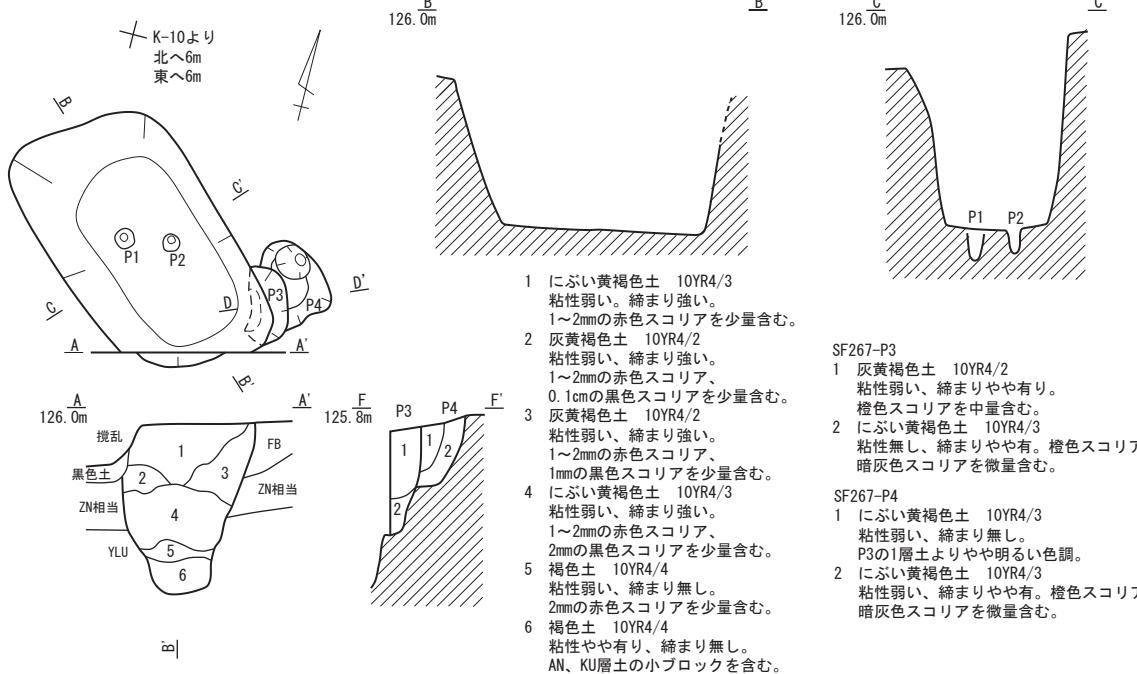
S F 271（第8図）

J-11グリッドで検出された。橢円形を呈し、長径1.05m、短径0.66m、深さ0.30mを計る。断面は皿状である。検出面は漸移層であるが、覆土の堆積状況から判断すると掘り込み面は漸移層より上であると考えられる。覆土は暗褐色土層～栗色土層の土で、北側に腐食土混じりのやや粘性の土がある。西側の壁際に小ピットが1基みられ、逆茂木痕と判断した。

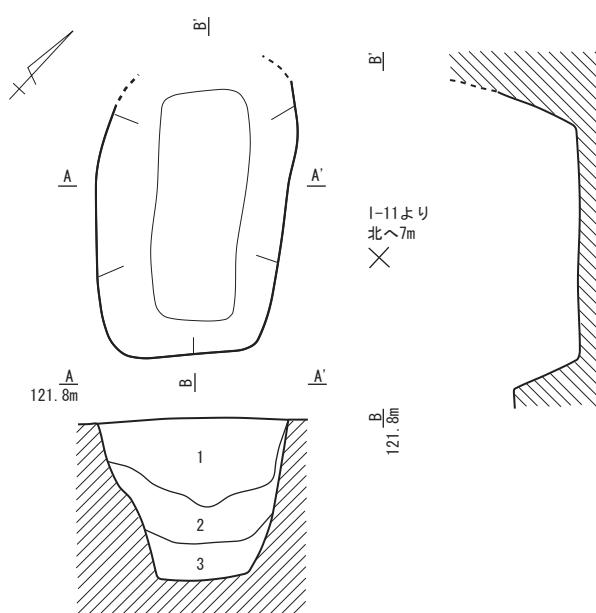


第6図 栗色土層～休場層上面遺構全体図

土坑267 (SF267)

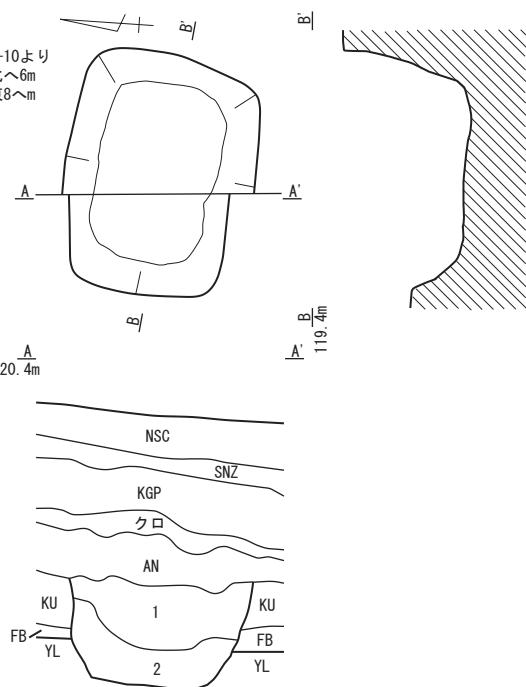


土坑268 (SF268)



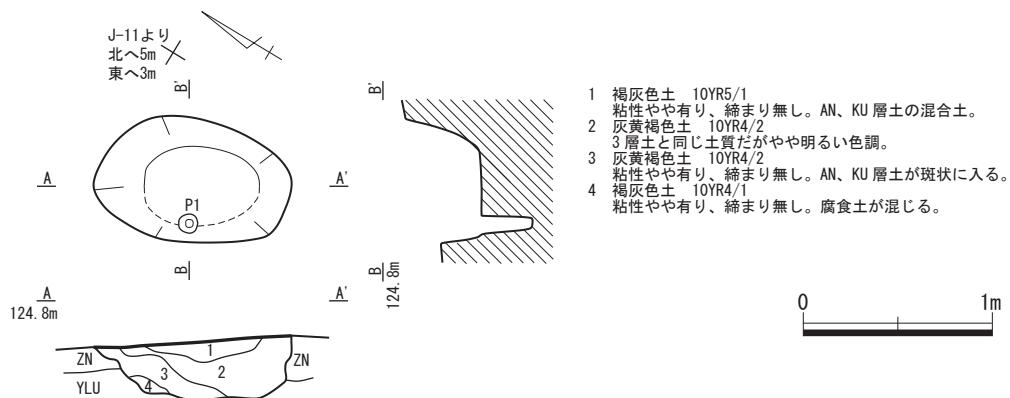
- 1 灰黄褐色 10YR4/2
粘性やや強い、締まり無し。YL層土のプロックを少量含む。
- 2 灰黄褐色土 10YR5/2
粘性弱い、締まりやや有り。
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3
粘性やや強い、締まり無し。YL層土が主体でFB層土が斑に混じる。

土坑269 (SF269)



第7図 栗色土層～休場層上面 土坑1

土坑271(SF271)



第8図 栗色土層～休場層上面 土坑2

第1表 栗色土層～休場層上面 土坑計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	平面形態	主軸方位	新旧関係	主体となる覆土	長軸(m)	短軸(m)	最大深(m)	備考 (長軸×短軸×深さ(m))
SF267	K-10	FB	縄文	隅丸方形	N46°W	なし	AN～KU	1.57	0.88	1.07	P1 0.11×0.09×0.23 P2 0.09×0.09×0.14 P3 0.43×(0.22)×0.56 P4 0.65×(0.30)×0.36
SF268	I-10	FB	縄文	隅丸方形	N40°E	なし	FB、YL	1.60	1.00	0.87	
SF269	H-10	KU	縄文	隅丸方形	N80°W	なし	KU～FB	1.30	1.00	0.62	
SF271	J-11	ZN	縄文	楕円形	N30°W	なし	AN～KU FB	1.05	0.66	0.30	P1 0.12×0.10×0.26

()は残存値

第2節 暗褐色土層面の遺構

本調査区北部の谷頭部で柱穴4基、小穴9基、焼土2基、中央部谷底付近で集石1基が検出された（第9図）。柱穴・小穴は谷頭部の東側に集中しており、一部は竪穴住居と認定した。

1 竪穴住居（S B 01）（第10図）

調査区の北端部（K-10・11グリッド）で谷頭部東側に位置する。暗褐色土層に約2m間隔で方形に並ぶ柱穴が4基見出せたことから、竪穴住居と判断した。P01とP09の間に焼土（F P 05）が確認され、地床炉の痕跡である可能性がある。住居の壁面及び平面形態は土質の判別が困難で、明確にすることはできなかった。遺物は出土していない。

（1）柱穴（P）

P 01（第10図）

楕円形を呈し、長径0.60m、短径0.46m、深さ0.60mを計る。断面は深い漏斗状である。柱穴中位で径を減じる。覆土はレンズ状堆積を示している。

P 04（第10図）

楕円形を呈し、長径0.72m、短径0.52m、深さ0.66mを計る。断面は深い漏斗状である。F P 04を切っている。覆土には焼土と炭化物の落ち込みが見られる。

P 05（第10図）

円形を呈し、長径0.46m、短径0.46m、深さ0.42mを計る。断面は逆台形状である。下位で階段状の落ち込みがある。

P 10（第10図）

円形を呈し、長径0.26m、短径0.24m、深さ0.41mを計る。断面は深い漏斗状である。

（2）焼土（F P）

F P 05（第10図）

長径1.12m、短径0.40m、深さ0.12mの範囲で広がり、P09に切られている。楕円形の焼土の広がりと炭化物の堆積が見られた。炭化物は粒状のものと固形状のものがある。焼土は硬くしまる。

2 小穴（P）

小穴について報告する。P07、P11、P12は柱穴の要素があり、他にも竪穴住居が存在した可能性はあるが、対応関係は不明である。

P 02（第11図）

K-10グリッドで検出された。長径0.32m（残存長）、短径0.36m、深さ0.50mを計る。断面は深い筒状である。西側は試掘坑により失われているが、平面形は円形と推測される。P03と並んで検出されている。

P 03（第11図）

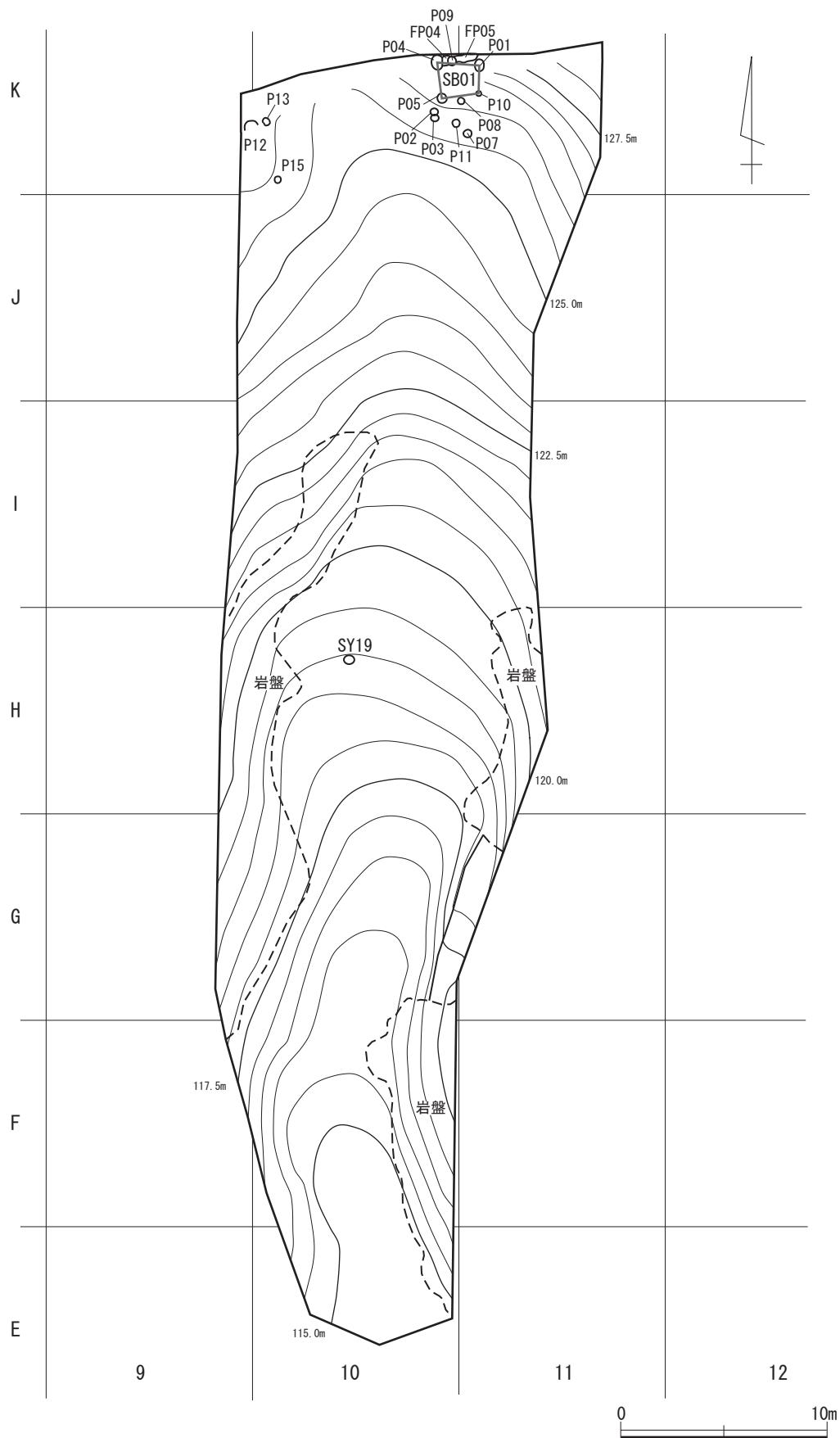
K-10グリッドで検出された。長径0.32m（残存長）、短径0.33m、深さ0.74mを計る。断面は深い漏斗状である。西側は試掘坑により失われているが、平面形は円形と推測される。

P 07（第11図）

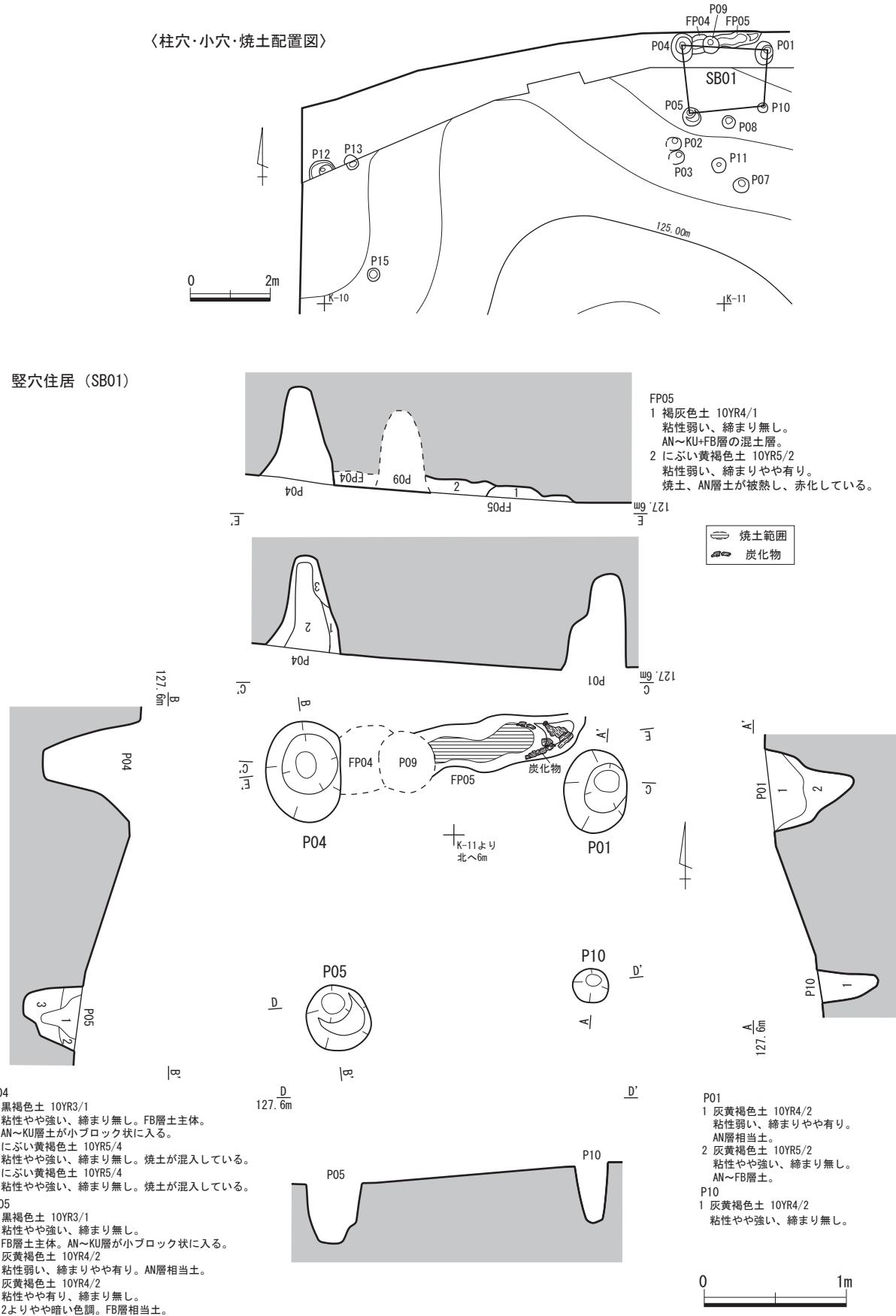
K-11グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.40m、短径0.38m、深さ0.64mを計る。断面は深い漏斗状である。覆土は3層に分かれる。

P 08（第11図）

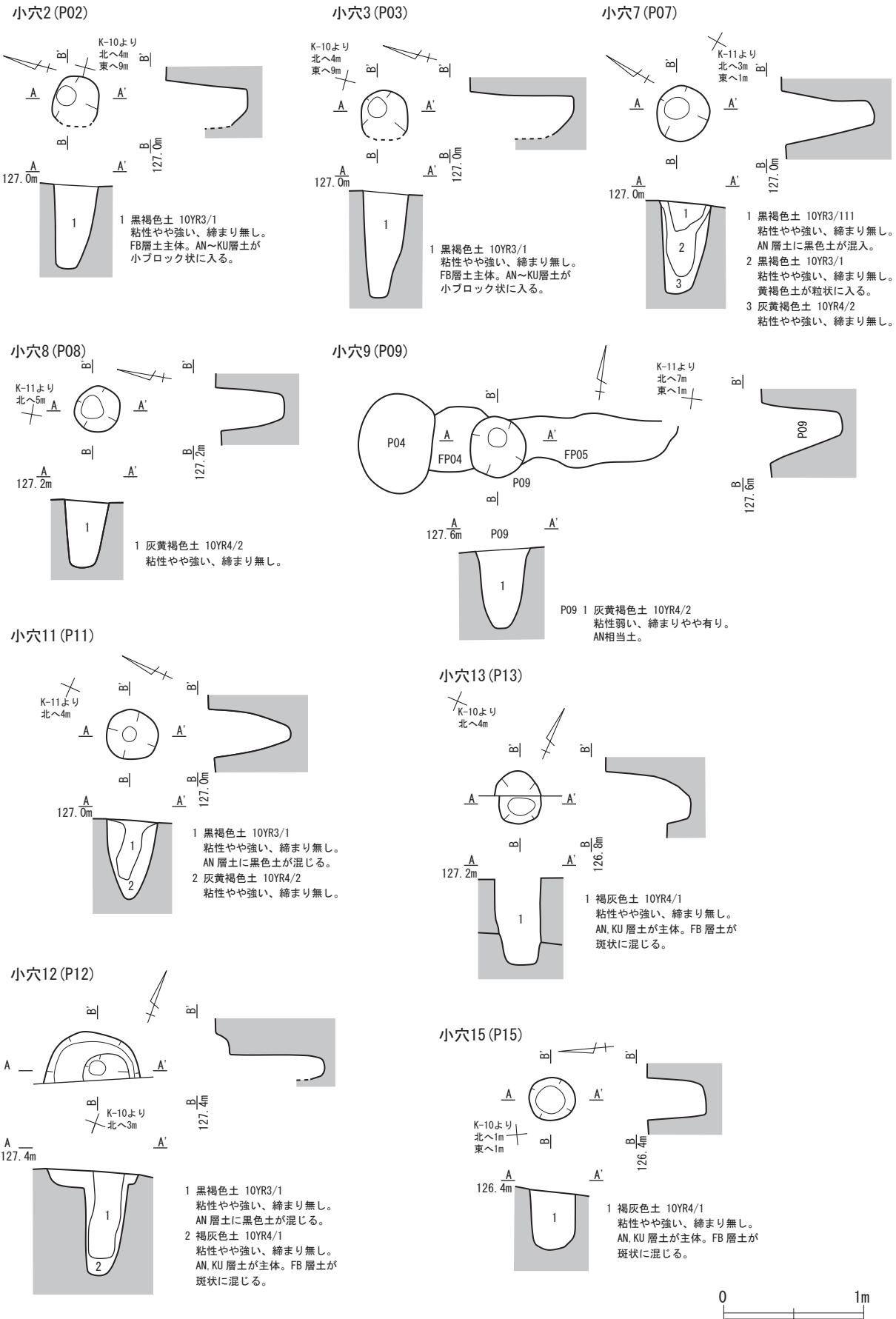
P05とP10の中程（K-10・11グリッド）で検出された。円形を呈し、長径0.33m、短径0.32m、深さ0.46mを計る。断面は縦長の逆台形状である。



第9図 暗褐色土層遺構全体図



第10図 竪穴住居・柱穴・焼土



第11図 小穴

P 09 (第11図)

K-10グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.42m、短径0.40m、深さ0.55mを計る。断面は深いU字状である。F P 04・05を切っている。

P 11 (第11図)

K-10・11グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.37m、短径0.36m、深さ0.55mを計る。断面は先端が尖る漏斗状である。

P 12 (第11図)

北壁のセクション（K-09・10グリッド）で検出された。長径0.70m、短径0.39m（残存長）、深さ0.74mを計る。断面は深いU字状である。平面形はセクションの壁により半分失われているが、おそらく円形であると推測される。覆土は2層に分かれる。

P 13 (第11図)

T P 05の北壁隅（K-10グリッド）で確認された。円形を呈し、長径0.38m、短径0.35m、深さ0.62mを計る。断面は筒状である。ピットの上面は試掘時に土層確認のため設定されたトレンチにより失われている。P 12と並列して検出されている。

P 15 (第11図)

K-10グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.33m、短径0.30m、深さ0.42mを計る。断面はU字形である。

第2表 暗褐色土層 柱穴・小穴計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	平面形態	覆土	長軸（m）	短軸（m）	最大深（m）	備考
P01	K-11	AN	縄文	楕円形	AN～FB土	0.60	0.46	0.60	豎穴住居
P02	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	(0.32)	0.36	0.50	
P03	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	(0.32)	0.33	0.74	
P04	K-10	AN	縄文	楕円形	AN～FB土	0.72	0.52	0.66	豎穴住居
P05	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.46	0.46	0.42	豎穴住居
P07	K-11	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.40	0.38	0.64	
P08	K-10・11	AN	縄文	円形	AN～KU土	0.33	0.32	0.46	
P09	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.42	0.40	0.55	
P10	K-11	AN	縄文	円形	AN～KU土	0.26	0.24	0.41	豎穴住居
P11	K-10・11	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.37	0.36	0.55	
P12	K-9・10	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.70	(0.39)	0.74	
P13	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.38	0.35	0.62	
P15	K-10	AN	縄文	円形	AN～FB土	0.33	0.30	0.42	

()は残存値

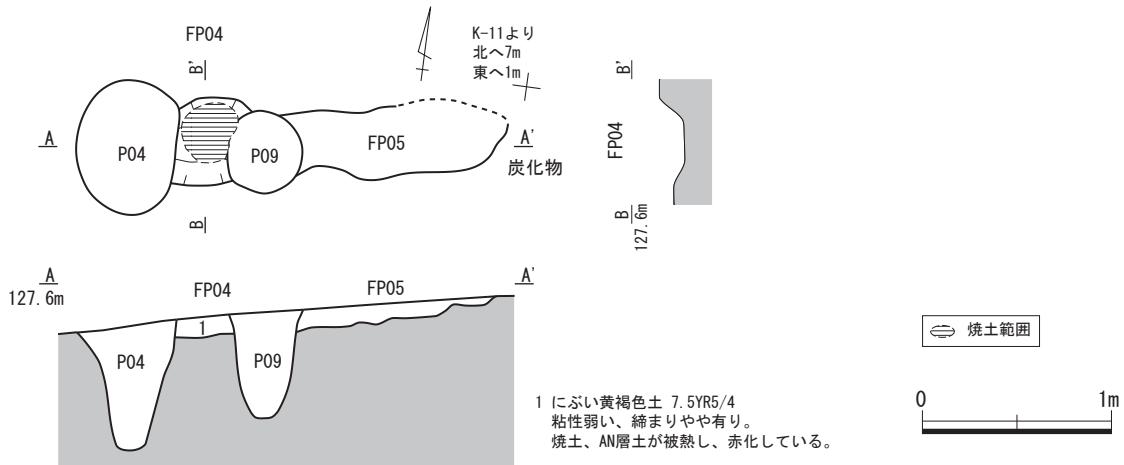
3 他の焼土 (F P)**F P 04 (第12図)**

K-10グリッドの暗褐色土層で検出された。長径0.48m、短径0.28m、深さ0.12mの範囲で広がり、P 04・09に切られている。焼土の範囲にわずかに炭化物の範囲が広がっていた。焼土は硬くしまっている。F P 05検出面より下部の暗褐色土層中で確認された。また、P 04に切られていることから前述の豎穴住居以前の遺構であると判断される。

4 集石 (S Y)**S Y 19 (第13図)**

H-10グリッドの暗褐色土層上面で検出された。規模は長軸0.47m、短軸0.31mである。礫4個が集中し、大きさは違うが高さをそろえたように検出された。礫には被熱により赤化した部分が認められ、1の礫には亀裂が顕著である。隣接（H-10グリッド）して石斧が出土している。

焼土4(FP04)

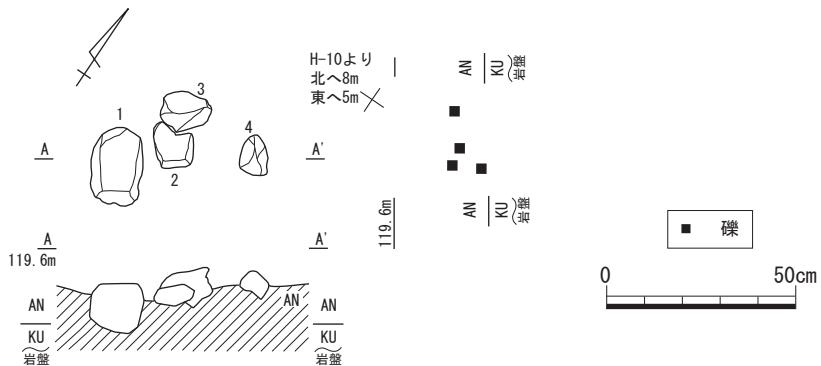


第12図 焼土

第3表 暗褐色土層 焼土計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	平面形状	新旧関係	覆土	長軸(m)	短軸(m)	最大深(m)
FP04	K-10	AN	縄文	不整橢円形	P4、P9より古い	AN	0.48	0.28	0.12
FP05	K-10・11	AN	縄文	橢円	P9より古い	AN	1.12	0.40	0.12

集石19(SY19)



第13図 集石

第4表 暗褐色土層 集石計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	総重量(g)	平均重量(g)	構成礫(個)	長軸(m)	短軸(m)
SY19	H-10	AN	縄文	7216.7	1804.18	4	0.47	0.31

第5表 集石19 矶観察表

番号	層位	石材	重量(g)	赤化	X座標(m)	Y座標(m)	Z座標(m)
1	AN	An(Py)	4850.5	D	-94422.53	28784.53	119.37
2	AN	An(Py)	553.2	E	-94422.39	28784.64	119.43
3	AN	An(Py)	1269.5	E	-94422.30	28784.60	119.44
4	AN	An(Py)	543.5	D	-94422.30	28784.85	119.45

第3節 新期スコリア層の遺構

大型の土坑1基、円形土坑29基、溝13条が検出された（第14図）。大型土坑は新期スコリア層中で確認されている。円形土坑は愛鷹山麓で多数検出される遺構であり、溝とともに新期スコリア層上面で確認された。円形土坑と溝の覆土は黒色土層を主体とすることから、新期スコリア層上面の遺構の時期は中世以降と判断した。

なお、調査区における遺構の位置を把握しやすくするため、本調査区を北部、中央部、南部に分ける。尾根から急斜面を下るI～K列グリッドを北部、遺構が集中するD～H列グリッドを中央部、溝だけが確認される-B～C列グリッドを南部とする。

1 土坑（S F）

（1）新期スコリア層中の土坑

S F 270（第15図）

E・F-10グリッドで検出された。隅丸方形を呈し、長径1.68m、短径1.31m、深さ1.62mを計る。大型の土坑で、断面は逆台形状である。覆土はレンズ状の自然堆積を示し、最下層に暗褐色土層と栗色土層相当の二次堆積土が、最上層には新期スコリア層が認められる。北壁の下部に炭化材が張り付くように出土した。

（2）新期スコリア層上面の土坑

遺物を全く伴わず、用途は不明である。S F 238とS F 244・S F 245を除き壁はほぼ直立し、底面は平坦となる。覆土は黒色土を主体とする。検出状況には配置に規則性があると判断される土坑があるが、これについては「第6章 まとめ」でふれることとする。

S F 238（第16図）

北部谷底のI-10グリッドで検出された。S D17の南端部に位置し、最も北側で確認された。楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.73m、深さ0.18mを計る。断面は不整形な窪みを持つ皿状である。

S F 239（第16図）

北部東側斜面のH・I-11グリッドで検出された。ほぼ円形を呈し、長径0.90m、短径0.81m、深さ0.15mを計る。断面は皿状である。

S F 240（第16図）

中央部東側斜面のH-10・11グリッドで検出された。S F 249・240・241と約2mの等間隔で並ぶ土坑の真ん中に位置する。ほぼ円形を呈し、長径0.79m、短径0.68m、深さ0.25mを計る。断面は箱形である。

S F 241（第16図）

中央部東側斜面のH-10・11グリッドで検出された。S F 249・240・241と約2mの等間隔で並ぶ土坑の南端に位置する。円形を呈し、長径0.84m、短径0.79m、深さ0.18mを計る。断面は皿状である。

S F 242（第16図）

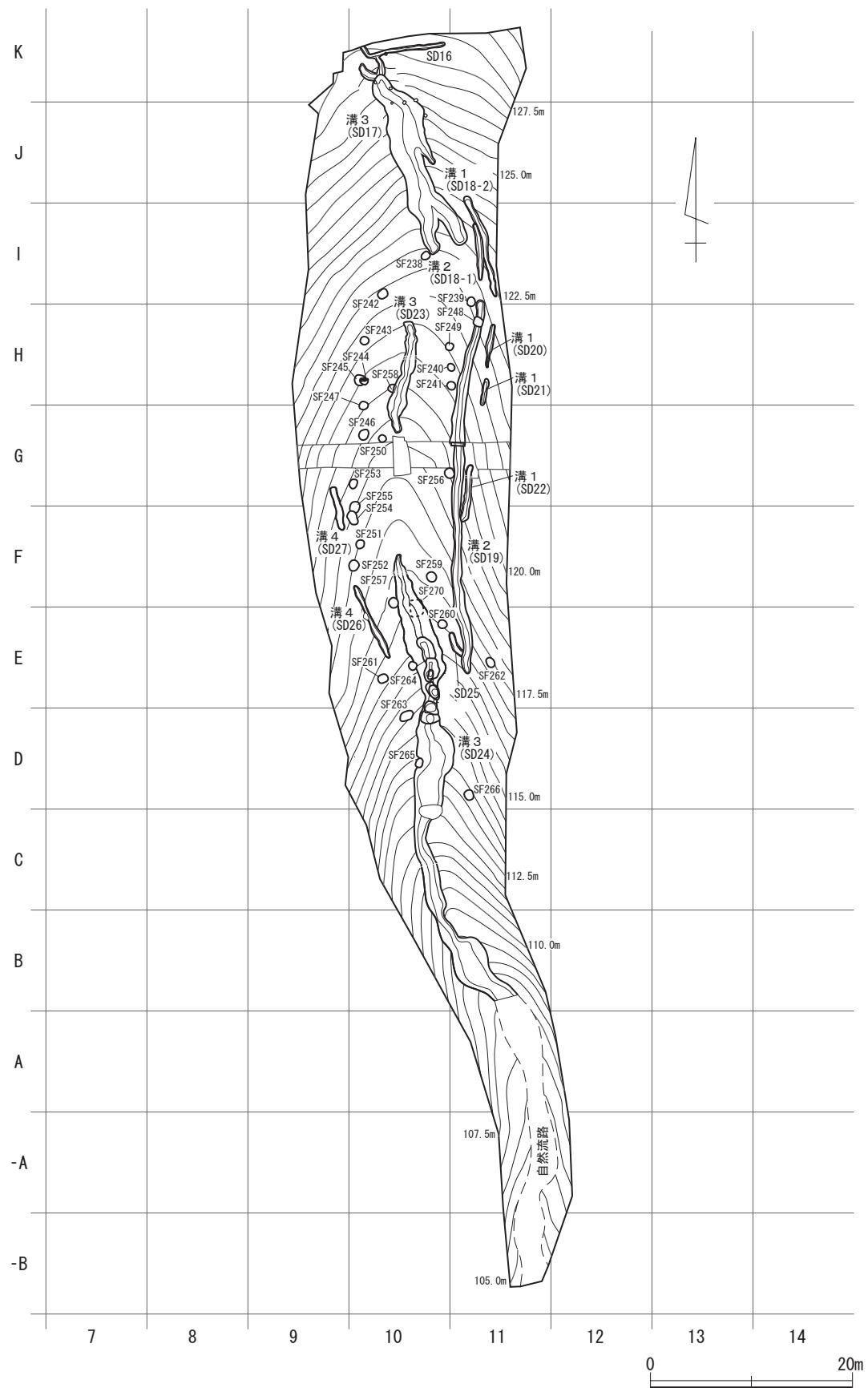
北部西側斜面のI-10グリッドで検出された。楕円形を呈し、長径1.04m、短径0.85m、深さ0.16mを計る。断面は浅い皿状である。

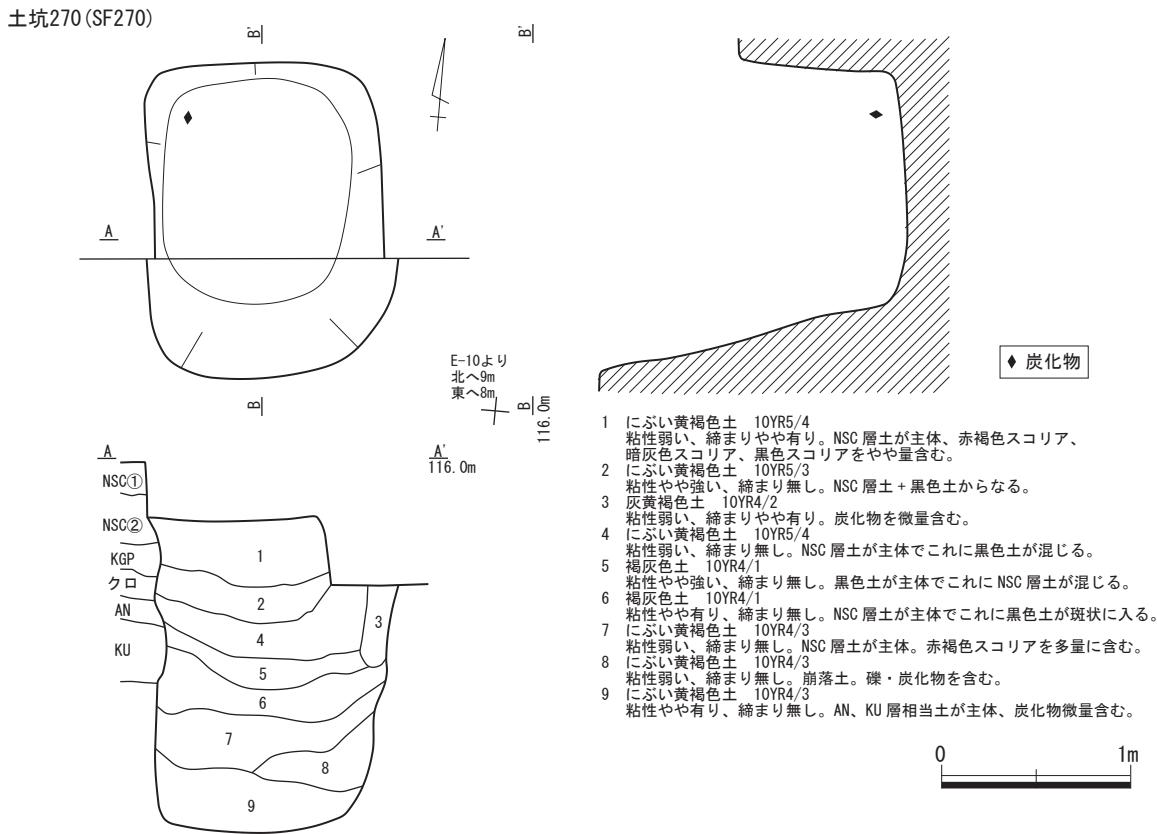
S F 243（第16図）

中央部西側斜面のH-10グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.83m、短径0.80m、深さ0.20mを計る。断面は皿状である。

S F 244（第17図）

中央部西側斜面のH-10グリッドで検出された。楕円形を呈し、長径0.81m、短径0.63m、深さ0.40





第15図 新期スコリア層中 土坑

mを計る。断面は逆台形状と推測されるが、斜面地で検出されたため東から南半部壁面は後世の削平等により失われている。S F 245と重複し、これを切っている。底面に3基の小穴がある。小穴は浅く一番深いもので23cmである。

S F 245 (第17図)

中央部西側斜面のH-10グリッドで検出された。S F 245・247・246と約2.8mの等間隔で並ぶ土坑の北端に位置する。S F 244に切られている。円形を呈し、長径1.03m、短径1.00m、深さ0.28mを計る。断面は皿状である。

S F 246 (第17図)

中央部西側斜面のG-10グリッドで検出された。S F 245・247・246と約2.8mの等間隔で並ぶ土坑の南端に位置する。楕円形を呈し、長径1.13m、短径0.91m、深さ0.30mを計る。断面は箱形である。

S F 247 (第17図)

中央部西側斜面のG・H-10グリッドで検出された。S F 245・247・246と約2.8mの等間隔で並ぶ土坑の真ん中に位置する。ほぼ円形を呈し、長径0.86m、短径0.81m、深さ0.24mを計る。断面は箱形である。

S F 248 (第17図)

中央部東側斜面のH-11グリッドで検出された。S D19と重複し、これを切る。楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.88m、深さ0.30mを計る。断面は箱形である。

S F 249 (第17図)

中央部東側斜面のH-10・11グリッドで検出された。S F 249・240・241と約2mの等間隔で並ぶ土坑の北端に位置する。3基の中では最も小規模である。円形を呈し、長径0.78m、短径0.75m、深さ0.13mを計る。断面は皿状である。

S F 250（第17図）

中央部谷底付近のG-10グリッドで検出された。円形を呈し、長径0.74m、短径0.72m、深さ0.18mを計る。断面は皿状である。

S F 251（第18図）

中央部西側斜面のF-10グリッドで検出された。S F 253・255・251と並ぶ土坑の南端に位置する。円形を呈し、長径0.85m、短径0.81m、深さ0.20mを計る。断面は箱形である。

S F 252（第18図）

中央部西側斜面のF-10グリッドで検出された。ほぼ円形を呈し、長径1.34m、短径1.23m、深さ0.38mを計る。断面は箱形である。

S F 253（第18図）

中央部西側斜面のG-10グリッドで検出された。S F 253・255・251と並ぶ土坑の北端に位置する。楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.93m、深さ0.16mを計る。断面は浅い皿状である。

S F 254（第18図）

中央部西側斜面のF-09・10グリッドで検出された。円形土坑2基が切り合っている可能性を検討したが、覆土に差がなく床面も一致することから1基の土坑と判断した。S F 255と重複し、これを切っている。平面は楕円形を呈し、長径1.45m、短径0.94m、深さ0.39mを計る。断面は箱状である。

S F 255（第18図）

中央部西側斜面のF・G-10グリッドで検出された。S F 254に切られ底面はS F 254より深い。S F 253・255・251と並ぶ土坑の真ん中に位置する。楕円形を呈し、長径1.10m、短径0.95m、深さ0.13mを計る。断面は浅い皿状である。

S F 256（第18図）

中央部東側斜面のG-10・11グリッドで検出された。ほぼ円形を呈し、長径1.00m、短径0.93m、深さ0.27mを計る。断面は箱形である。

S F 257（第19図）

中央部谷底付近のE・F-10グリッドで検出された。S D24の西側で溝と重複し、この溝を切る。円形を呈し、長径1.02m、短径0.95m、深さ0.37mを計る。断面は逆台形状である。

S F 258（第19図）

中央部谷底のH-10グリッドで検出された。土坑東半をS D23に切られているが、平面形はほぼ円形と推定される。長径0.84m、短径0.70m（残存長）、深さ0.16mを計る。断面は浅い皿状である。

S F 259（第19図）

中央部谷底付近のF-10グリッドで検出された。S D19とS D24に挟まれた位置にある。S F 260と列を成す可能性もある。円形を呈し、長径1.02m、短径0.91m、深さ0.14mを計る。断面は浅い皿状である。

S F 260（第19図）

中央部谷底付近のE-10グリッドで検出された。S F 259と列を成すともいえる。円形を呈し、長径0.89m、短径0.83m、深さ0.25mを計る。断面は皿状である。

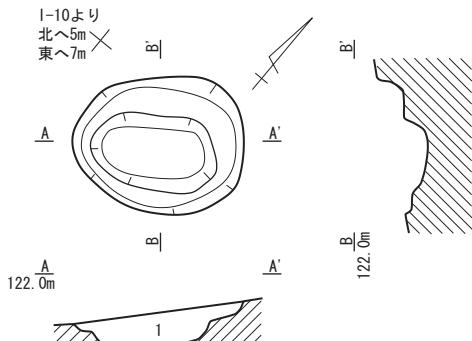
S F 261（第19図）

中央部西側斜面のE-10グリッドで検出された。楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.83m、深さ0.15mを計る。断面は皿状である。

S F 262（第19図）

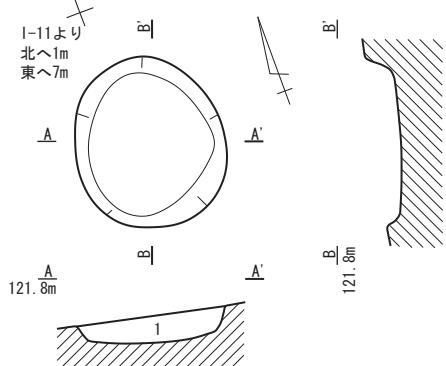
中央部東側斜面のE-11グリッドで検出された。S D19の東にあり、唯一溝の外側に位置する。楕円

土坑238 (SF238)



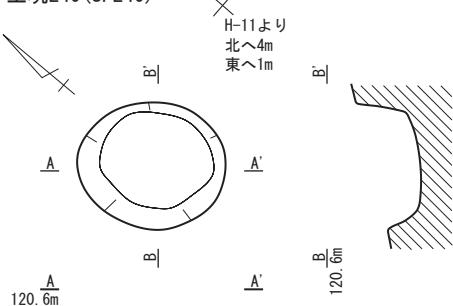
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~2mmの赤色スコリアを微量含む。

土坑239 (SF239)



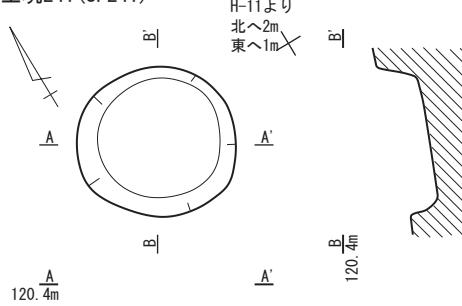
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~2mmの赤色スコリアを微量含む。

土坑240 (SF240)



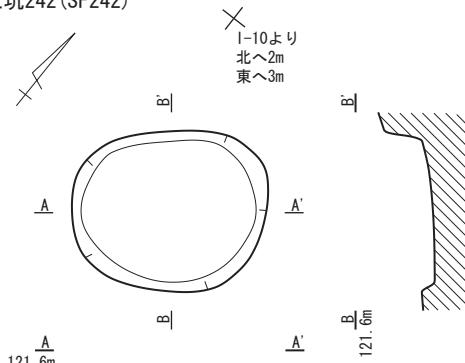
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~2mmの赤色スコリアを微量含む。

土坑241 (SF241)



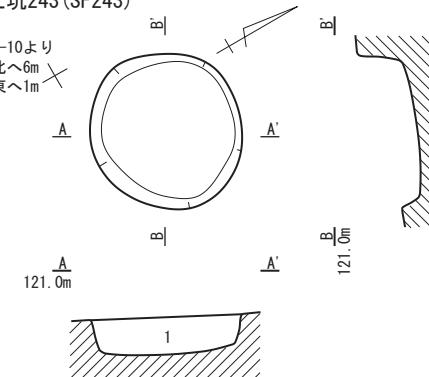
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~2mmの赤色スコリアを微量含む。

土坑242 (SF242)



1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、5mmの新期スコリアを微量含む。

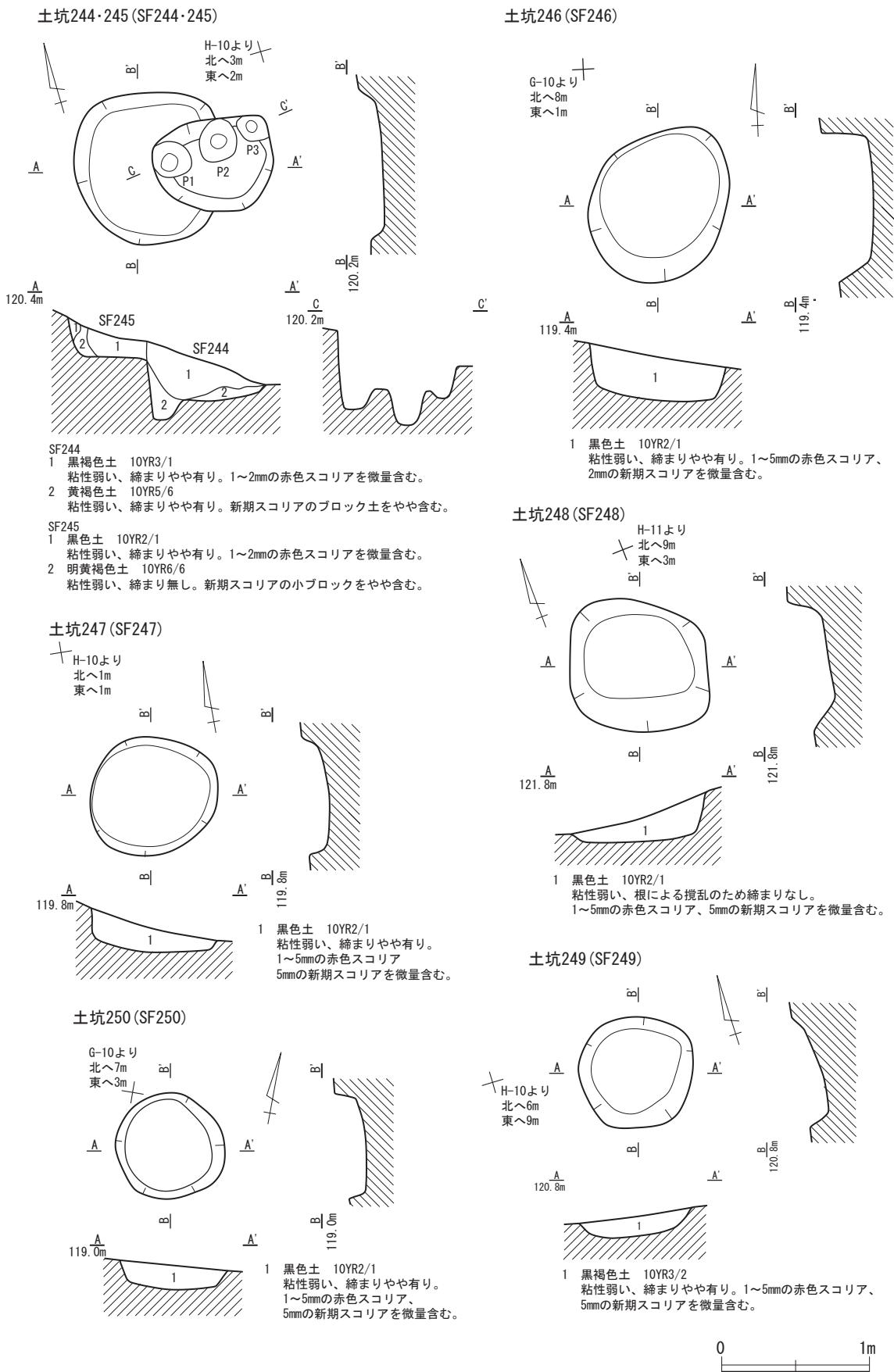
土坑243 (SF243)



1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、2mmの新期スコリアを微量含む。

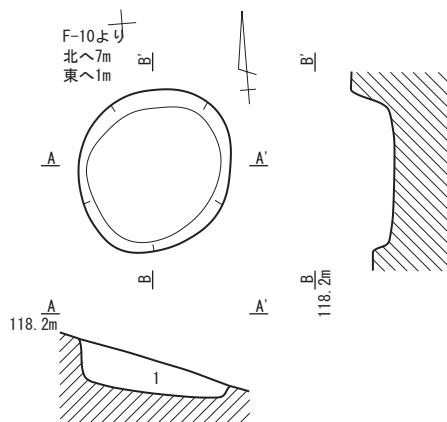


第16図 新期スコリア層上面 土坑 1



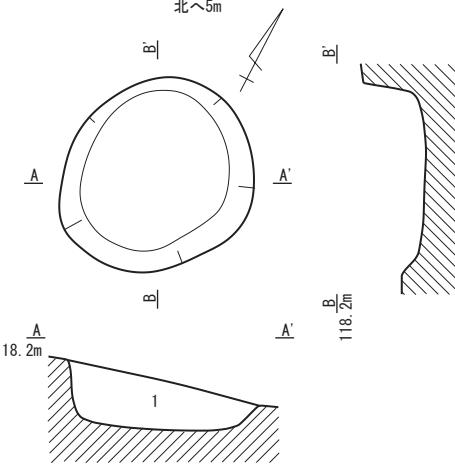
第17図 新期スコリア層上面 土坑2

土坑251(SF251)



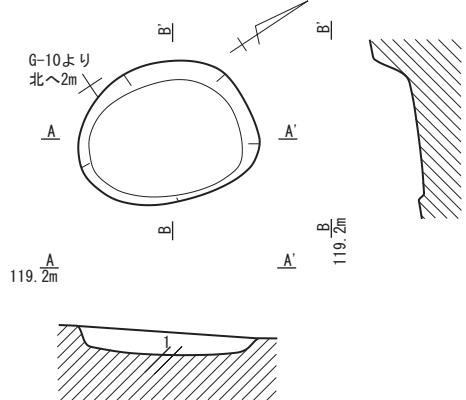
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まり無し。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

土坑252(SF252)



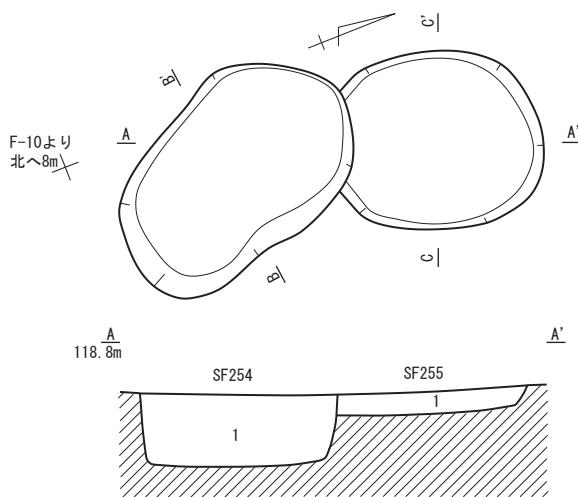
1 黑褐色土 10YR3/2
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

土坑253(SF253)



1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まり無し。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

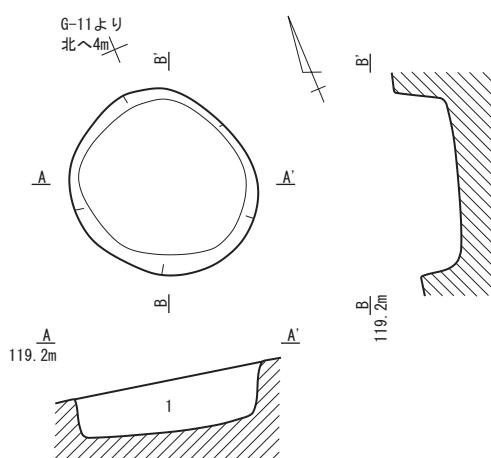
土坑254・255(SF254・255)



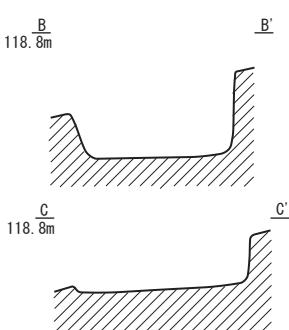
SF254
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

SF255
1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

土坑256(SF256)

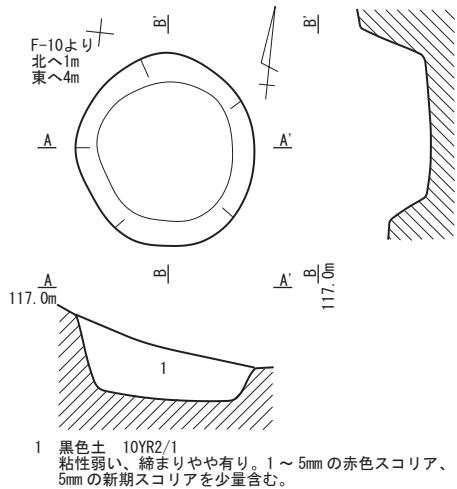


1 黒色土 10YR2/1
粘性弱い、締まりやや有り。1~5mmの赤色スコリア、
5mmの新期スコリアを微量含む。

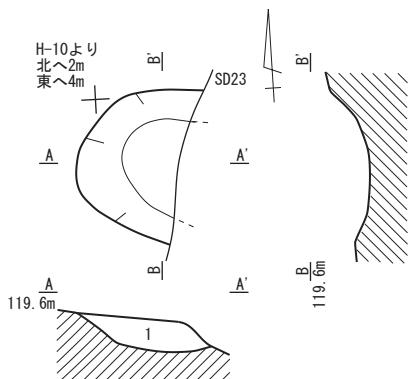


第18図 新期スコリア層上面 土坑3

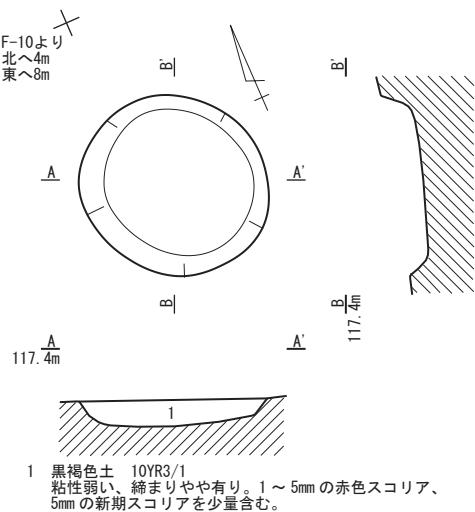
土坑257(SF257)



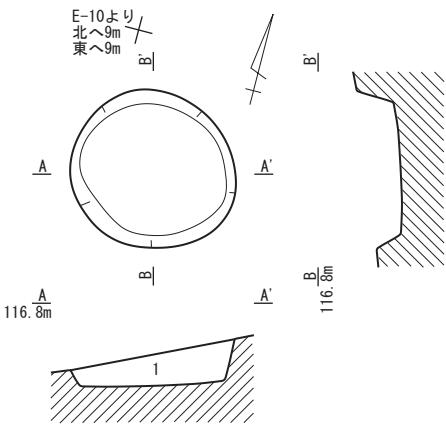
土坑258(SF258)



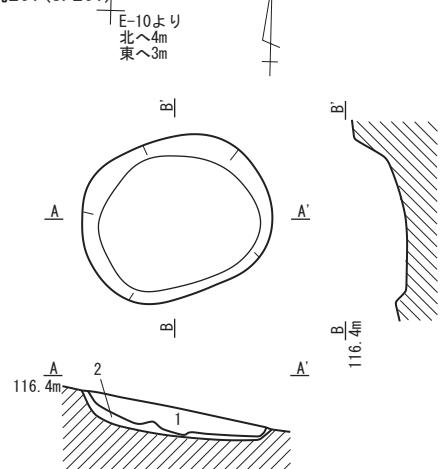
土坑259(SF259)



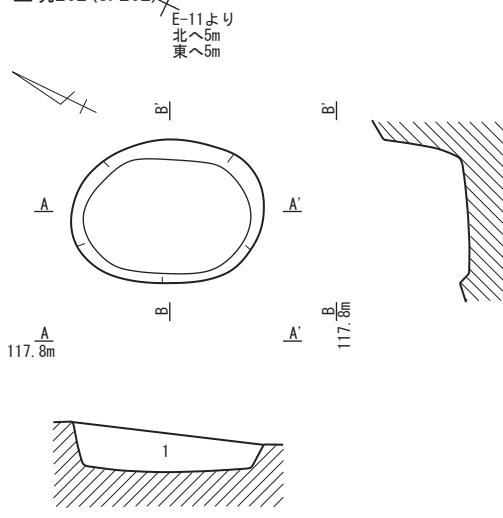
土坑260(SF260)



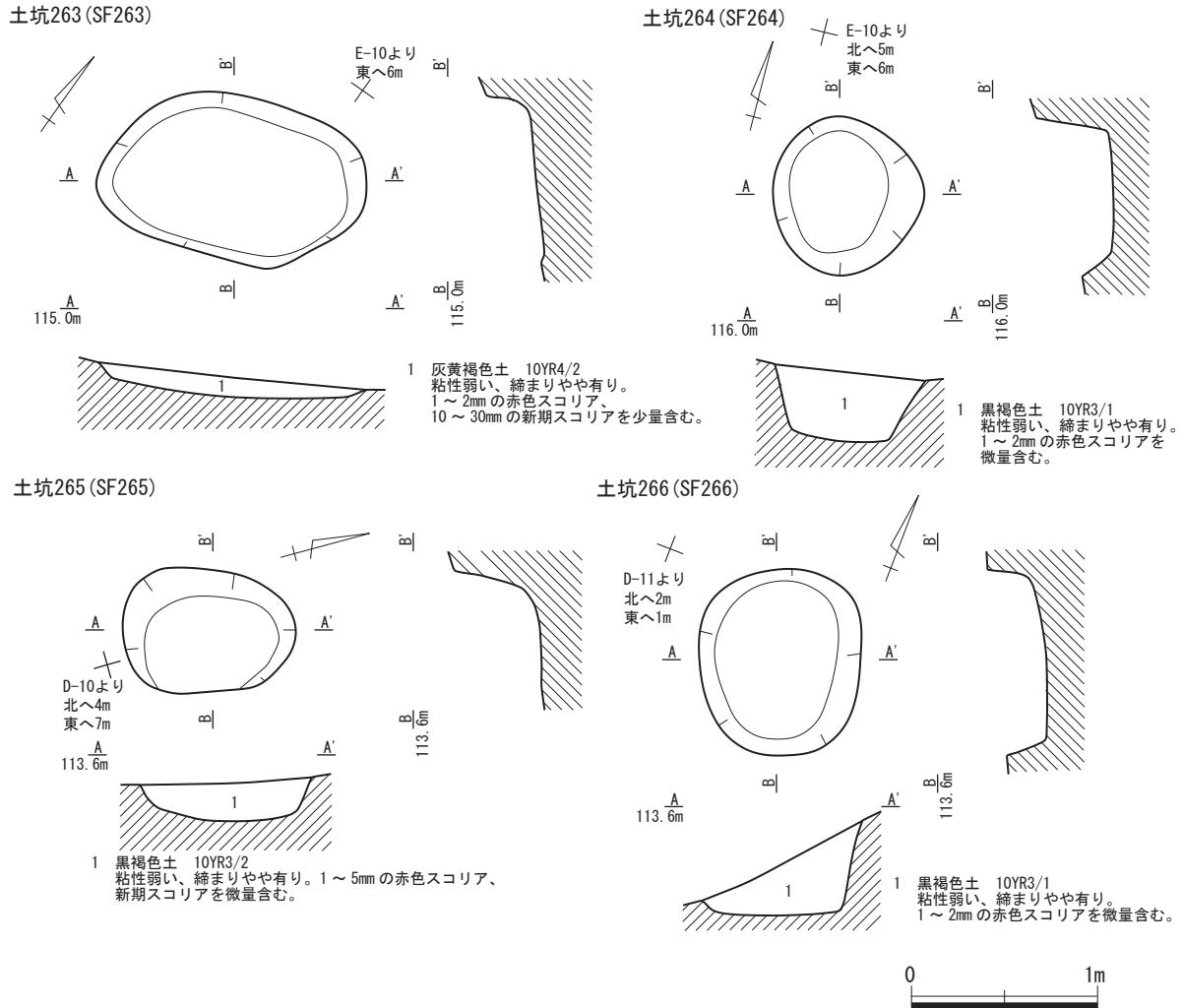
土坑261(SF261)



土坑262(SF262)



第19図 新期スコリア層上面 土坑4



第20図 新期スコリア層上面 土坑5

形を呈し、長径1.02m、短径0.75m、深さ0.24mを計る。断面は皿状である。

S F 263 (第20図)

中央部谷底付近のD-10グリッドで検出された。SD24の西に位置する大きい土坑である。楕円形を呈し、長径1.45m、短径0.87m、深さ0.12mを計る。断面は浅い皿状である。

S F 264 (第20図)

中央部谷底のE-10グリッドで検出された。SD24と重複しこれを切る。ほぼ円形を呈し、長径0.85m、短径0.82m、深さ0.38mを計る。断面は逆台形状である。

S F 265 (第20図)

中央部谷底のD-10グリッドで検出された。SD24と重複しこれを切る。楕円形を呈し、長径0.93m、短径0.67m、深さ0.20mを計る。断面は皿状である。

S F 266 (第20図)

中央部東側斜面のD-11グリッドで検出された。SD24の東側に位置し、確認された土坑の中では一番南側となる。ほぼ円形を呈し、長径1.00m、短径0.88m、深さ0.50mを計る。断面は逆台形状だが、西半は削平されている。

第6表 新期スコリア層 土坑計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	平面形態	主軸方位	新旧関係	覆土	長軸(m)	短軸(m)	最大深(m)	備考 (長軸×短軸×深さ(m))
SF238	I-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	0.91	0.73	0.18	0.68×0.40×0.10 の窪み底面にあり。
SF239	H・I-11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.90	0.81	0.15	
SF240	H-10・11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.79	0.68	0.25	
SF241	H-10・11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.84	0.79	0.18	
SF242	I-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.04	0.85	0.16	
SF243	H-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.83	0.80	0.20	
SF244	H-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	SF245より 新しい	黒色土	0.81	0.63	0.40	P10.25×0.24×0.13 P20.30×0.25×0.23 P30.22×0.19×0.05
SF245	H-10	NSC上	中~近	円形	なし	SF244より 古い	黒色土	1.03	1.00	0.28	
SF246	G-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.13	0.91	0.30	
SF247	G・H-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.86	0.81	0.24	
SF248	H-11	NSC上	中~近	楕円形	なし	SD19より 新しい	黒色土	0.94	0.88	0.30	
SF249	H-10・11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.78	0.75	0.13	
SF250	G-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.74	0.72	0.18	
SF251	F-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.85	0.81	0.20	
SF252	F-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	1.34	1.23	0.38	
SF253	G-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.18	0.93	0.16	
SF254	F-09・10	NSC上	中~近	楕円形	なし	SF255より 新しい	黒色土	1.45	0.94	0.39	
SF255	F・G-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	SF254より 古い	黒色土	1.10	0.95	0.13	
SF256	G-10・11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	1.00	0.93	0.27	
SF257	E・F-10	NSC上	中~近	円形	なし	SD24より 新しい	黒色土	1.02	0.95	0.37	
SF258	H-10	NSC上	中~近	(円形)	なし	SD23より 古い	黒色土	0.84	(0.70)	0.16	
SF259	F-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	1.02	0.91	0.14	
SF260	E-10	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	0.89	0.83	0.25	
SF261	E-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.02	0.83	0.15	
SF262	E-11	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.02	0.75	0.24	
SF263	D-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	なし	黒色土	1.45	0.87	0.12	
SF264	E-10	NSC上	中~近	円形	なし	SD24より 新しい	黒色土	0.85	0.82	0.38	
SF265	D-10	NSC上	中~近	楕円形	なし	SD24より 新しい	黒色土	0.93	0.67	0.20	
SF266	D-11	NSC上	中~近	円形	なし	なし	黒色土	1.00	0.88	0.50	
SF270	E・F-10	NSC	縄文	隅丸方形	N8°W	なし	NSC、AN～KU	1.68	1.31	1.62	

()は残存値

2 溝 (S D)

新期スコリア層上面では13条の溝が検出され、そのうち12条が本調査区内の谷部で確認されている。さらに11条は、調査時は単独の溝として扱ったが、配置や覆土から本来は同一の溝として4群にまとめられることが理解できる。覆土は黒色土を主体としている。

同一と認められる4群の溝をそれぞれ溝1～4とし、その内訳は次のようである。溝1はS D18-2・S D20・S D21・S D22、溝2はS D18-1・S D19、溝3はS D17・S D23・S D24、溝4はS D27・S D26により構成されている。

また、いずれの溝とも同一と認められないS D16は平成18年以前の本調査で明らかにされた検出状況と関連が推定されるが、これについては「第6章　まとめ」でふれることとする。

(1) 溝1 (S D18-2・S D20・S D21・S D22)

本調査区の北部から中央部にかかる東側斜面で検出された。いずれも断面は皿状である。S D18-2をS D18-1が、S D22をS D19が切っていることから、溝1の掘削後溝2が掘削されていると判断した。

S D18-2 (第21図)

I・J-11グリッドで検出された。緩やかな弧状を呈し、長さ10.35m、幅0.6m、最大深0.15mを計る。覆土から弥生後期後半～古墳前期初頭の土器1点が出土している。

S D20 (第21図)

H-11グリッドで検出された。ほぼ直線を呈し、長さ4.32m、幅0.68m、最大深0.2mを計る短い溝である。出土遺物はない。

S D21 (第21図)

H-11グリッドで検出された。直線を呈し、長さ2.71m、幅0.54m、最大深0.13mを計る小規模の溝である。出土遺物はない。

S D22 (第21図)

F・G-11グリッドで検出された。緩やかなS字状を呈し、長さ5.7m、幅0.7m、最大深0.15mを計る短い溝である。出土遺物はない。

(2) 溝2 (S D18-1・S D19)

本調査区の北部から中央部にかかる東側斜面で検出された。溝1に沿うように位置し一部重複するが、切り合い関係からこちらの方が新しいと判断した。断面はいずれも皿状である。

S D18-1 (第21図)

I-11グリッドで検出された。緩やかな弧を呈し、長さ5.62m、幅0.7m、最大深0.15mを計る短い溝である。出土遺物はない。

S D19 (第21図)

E～I-11グリッドで検出された。南北方向にほぼ直線的に長さ37mに及び、幅1.25m、最大深0.2mを計る長い溝である。出土遺物はない。

(3) 溝3 (S D17・S D23・S D24)

谷頭部から谷部のほぼ中央を掘削し、南部の自然流路に繋がる。検出された溝の中では最も谷底に掘削され、規模が大きい点で他の3本とは違う様子を示している。

S D17 (第22図)

I・J・K-10、I-11グリッドで検出された。尾根部から谷部に移行する急斜面に沿い、長さ20.2m、幅3m、最大深1mを計る太い溝である。底面は凹凸がある。平面は後に東に振れて掘り込んだようにも見えるが、明確な切り合い関係は確認できなかった。覆土から弥生後期後半～古墳前期初頭の土

器1点が出土した。溝の北半部に7基の方形のピットがあり、深さは0.3~1.1mほどである。

S D23 (第22図)

G・H-10グリッドの谷底部で検出された。S F 258と重複し、これを切っている。長さ11.05m、幅1.8m、最大深0.25mを計る溝である。谷底の地形を反映して南端が僅かに東側へ湾曲する。断面は浅い皿状である。出土遺物はない。

S D24 (第23・24図)

B~F-10、B・D-11グリッドで検出された。S F 257・264・265と重複し、これらに切られている。長さ45m、幅3.9m、最大深1.4mを計る長く大きい溝である。覆土から縄文土器1点、弥生後期後半~古墳前期初頭の土器3点が出土した。溝の中央部に土坑状の掘り込みが4基連なる。それぞれア~エとした。アは溝と平行した長軸を持ち、イは溝に対しやや西に振れる長軸を持ち、ウ・エは溝に対し直交する長軸を持つ。平面形は小判形で、規模は下へ行くほど大きくなり、溝は南側で自然流路に繋がっている。

(4) 溝4 (S D27・S D26)

中央部西側斜面で検出された。断面は浅い皿状である。

S D27 (第21図)

F・G-09グリッドで検出された。ほぼ直線を呈し、長さ4.35m、幅0.77m、最大深0.06mを計る短い溝である。出土遺物はない。

S D26 (第21図)

E・F-10グリッドでS D24と平行して検出された。直線を呈し、長さ7.9m、幅0.7m、最大深0.08mを計る短い溝である。出土遺物はない。

(5) 他の溝

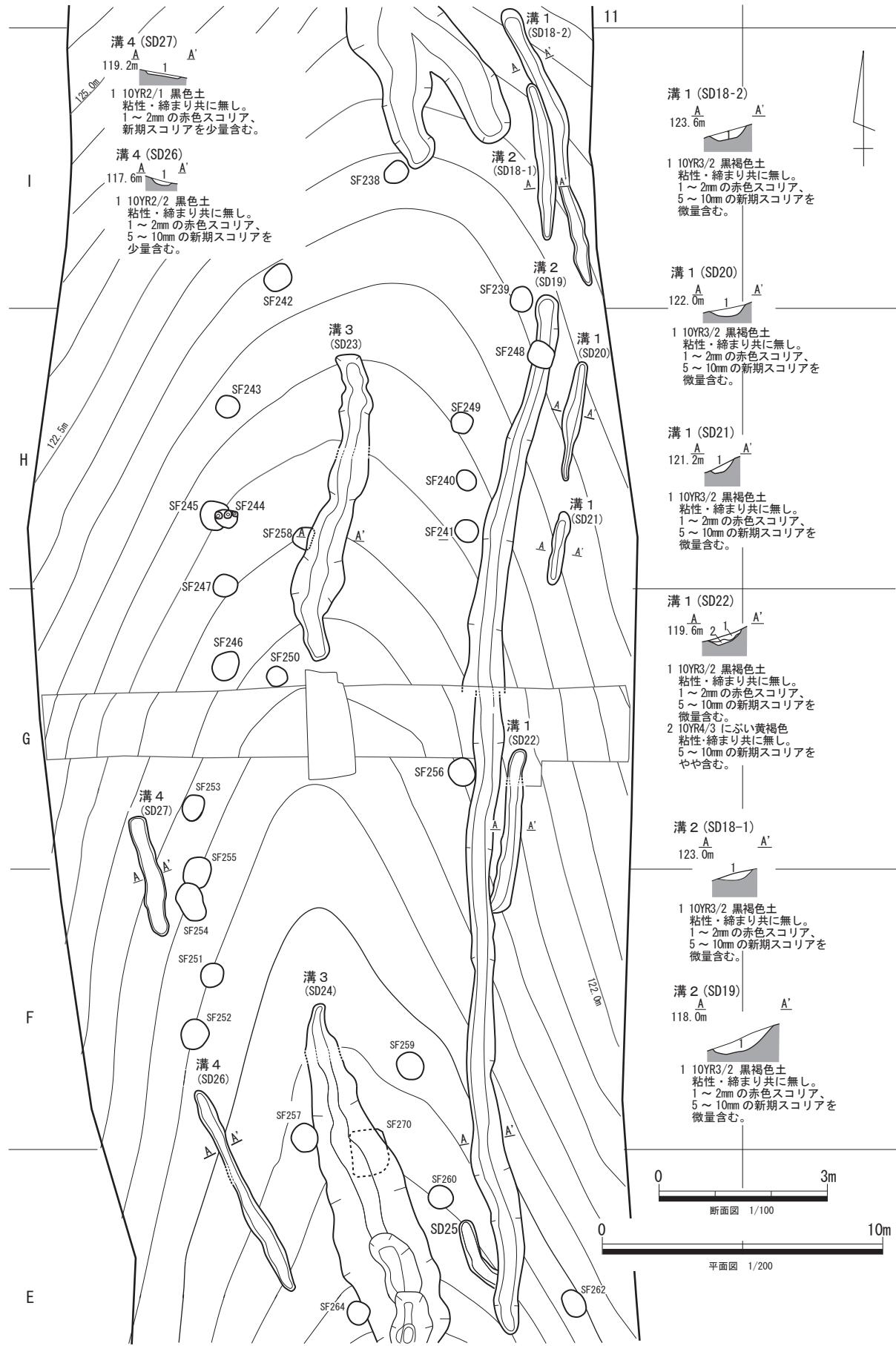
どの溝とも同一と認められない溝が2条検出された。

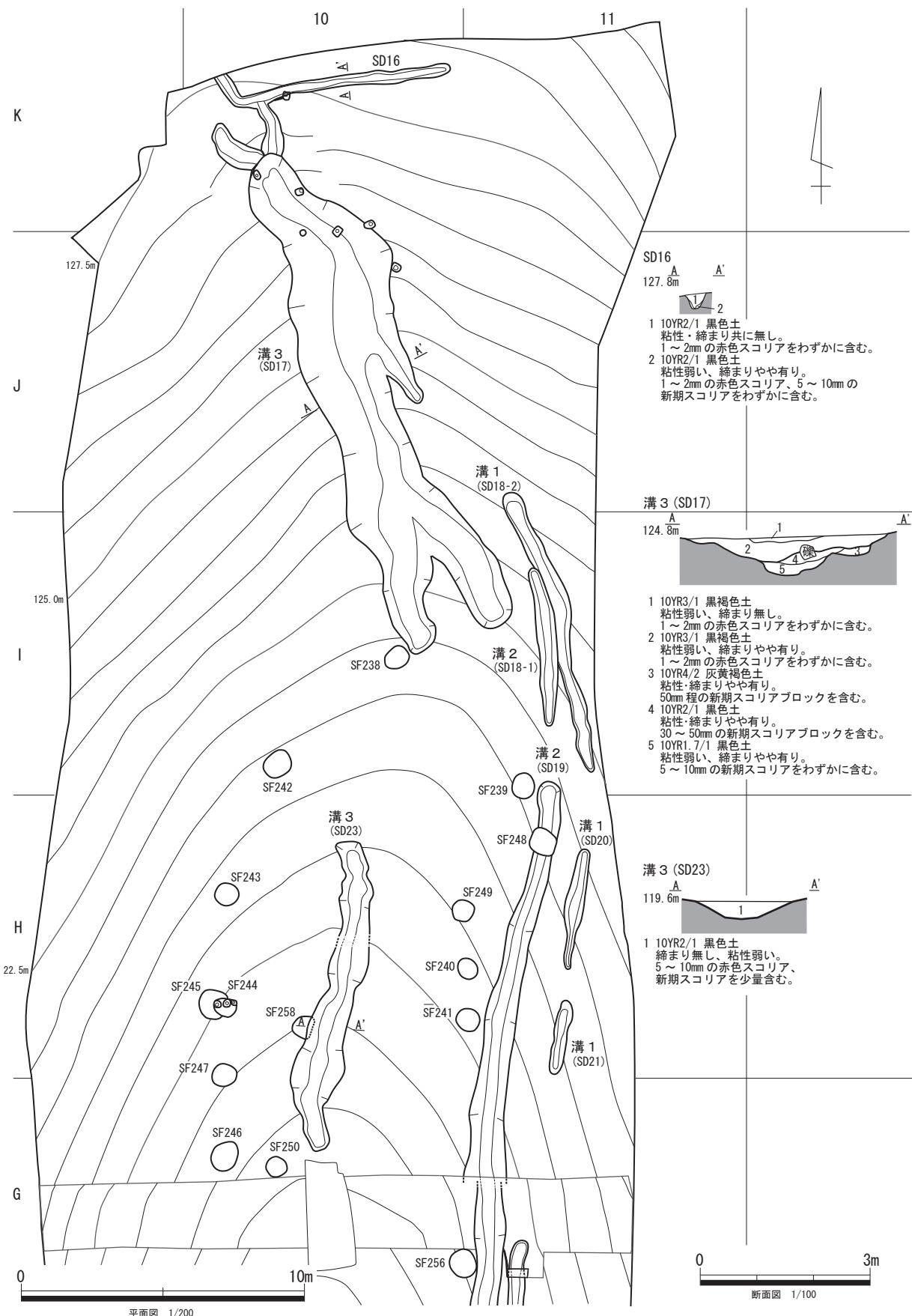
S D16 (第22図)

谷頭部のK-10グリッドで検出された。東西方向に直線を呈し西側でL字型に屈曲して北側へ延びる溝と、南に下りS D17と繋がる溝、及びその溝とV字状を成す溝をまとめてS D16とした。平面形状から本来は切り合い関係を持つ別々の溝であった可能性が高いが、現地調査では切り合いは認められず、一つの遺構として認識されていたため、これを尊重する。長さ8.4m、幅0.5m、最大深0.27mを計る溝である。溝の断面はV字状である。出土遺物はない。調査区最北端部の北壁の手前で確認されており、唯一東西に延びる点で他の溝とは異なる。

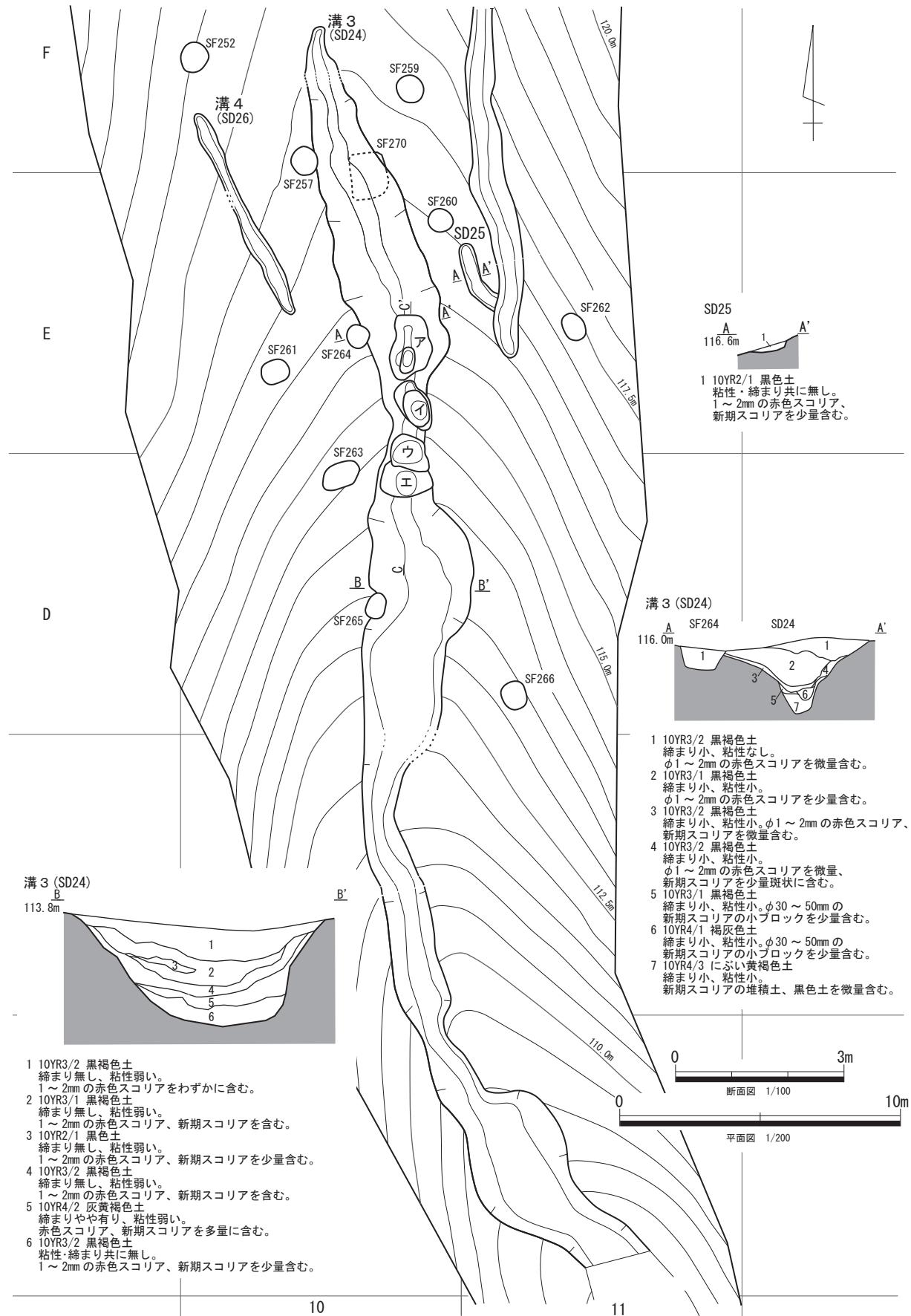
S D25 (第23図)

中央部東側斜面のE-10・11グリッドで検出された。S D19の南側端部に重複し、切られている。長さ2.5m、幅0.57m、最大深0.13mを計る短い溝である。いずれの溝とも方向性が一致しない。浅く立ち上がりも判然としないが断面は浅い皿状を呈する。出土遺物はない。

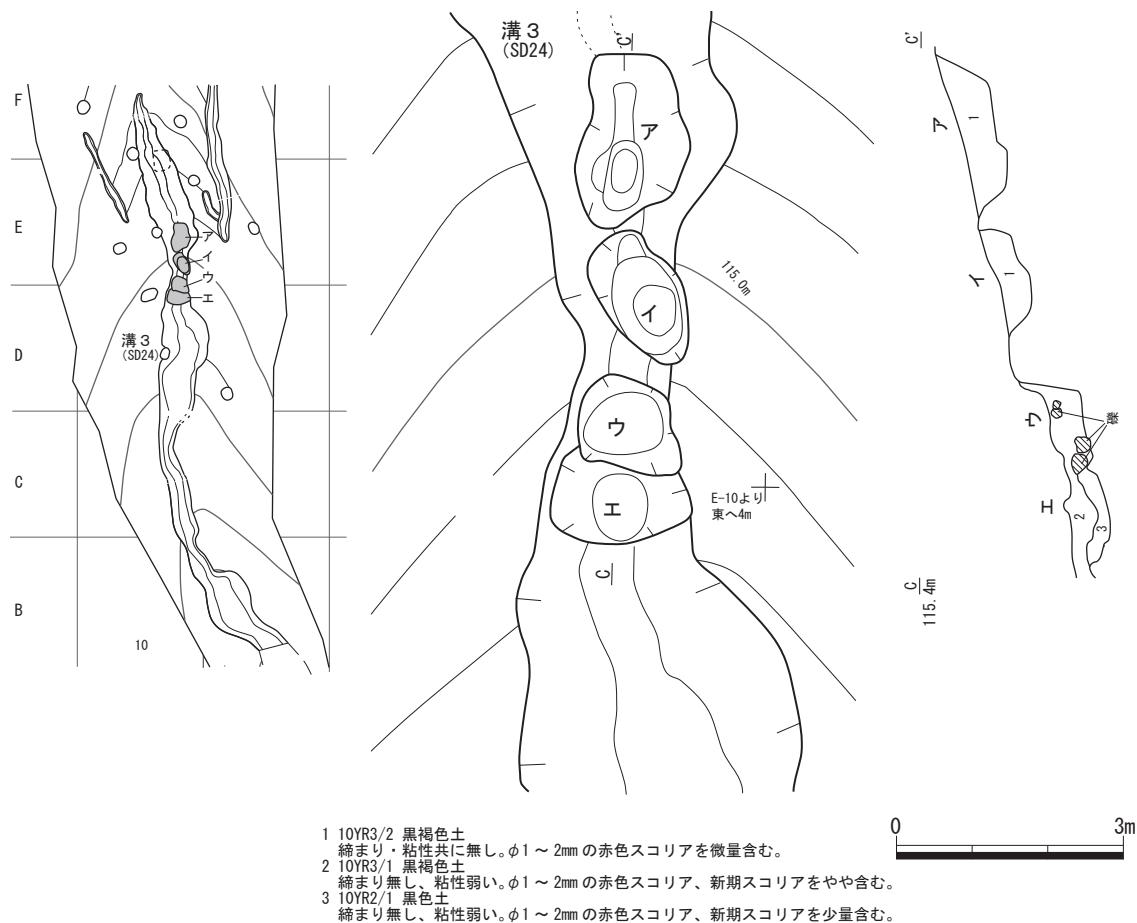




第22図 溝3 (1)



第23図 溝3（2）



第24図 溝3 (3)

第7表 新期スコリア層 溝計測表

遺構番号	グリッド	検出層位	帰属時期	主軸方位	新旧関係	覆土	長軸(m)	短軸(m)	最大深(m)	備考
SD16	K-10	NSC上	中～近世	N80°E	SD17と同時	黒色土	8.40	0.50	0.27	
SD17	I・J・K-10 I-11	NSC上	中～近世	N10°E	SD16と同時	黒色土	20.20	3.00	1.00	P1深さ0.26m P2深さ0.75m P3深さ0.90m P4深さ0.35m P5深さ0.55m P6深さ1.15m P7深さ0.35m
SD18-1	I-11	NSC上	中～近世	N-S	SD18-2より新しい	黒色土	5.62	0.70	0.15	
SD18-2	I・J-11	NSC上	中～近世	N30°W	SD18-1より古い	黒色土	10.35	0.60	0.15	
SD19	E～I-11	NSC上	中～近世	N7°W	SD22・25より新しい	黒色土	37.00	1.25	0.20	
SD20	H-11	NSC上	中～近世	N16°E	なし	黒色土	4.32	0.68	0.20	
SD21	H-11	NSC上	中～近世	N20°E	なし	黒色土	2.71	0.54	0.13	
SD22	F・G-11	NSC上	中～近世	N8°E	SD19より古い	黒色土	5.70	0.70	0.15	
SD23	G・H-10	NSC上	中～近世	N20°E	SF258より新しい	黒色土	11.05	1.80	0.25	
SD24	B～F-10 B・D-11	NSC上	中～近世	N20°W	SF257.264.265より古い	黒色土	45.00	3.90	1.40	土坑状の掘り込み4基
SD25	E-10・11	NSC上	中～近世	N25°W	SD19より古い	黒色土	2.50	0.57	0.13	
SD26	E・F-10	NSC上	中～近世	N30°W	なし	黒色土	7.90	0.70	0.08	
SD27	F・G-09	NSC上	中～近世	N15°W	なし	黒色土	4.35	0.77	0.06	

第5章 出土遺物

第1節 旧石器時代の遺物

旧石器時代相当層から礫9点が出土している。いずれもテストピット内で確認されており、尾根部と谷頭部に多く、谷部では1点である（第25図）。

1 磕

確認調査TP01で5点、下層調査TP05'で3点、下層調査TP06で1点検出された（第8表）。

出土層位から見ると休場層上位から休場層下位で8点、第IV黒色帯から1点出土している。礫群と認定されるものは確認されず、いずれもまとまった出土状況があるといえない。接合関係はなく、被熱痕のあるものは5点である（第9表）。

なお、下層調査TP05'で出土した3点の礫を礫群とするか検討したが、礫の配置や被熱の状況から認定に至らなかった。

第8表 旧石器時代 磕出土状況

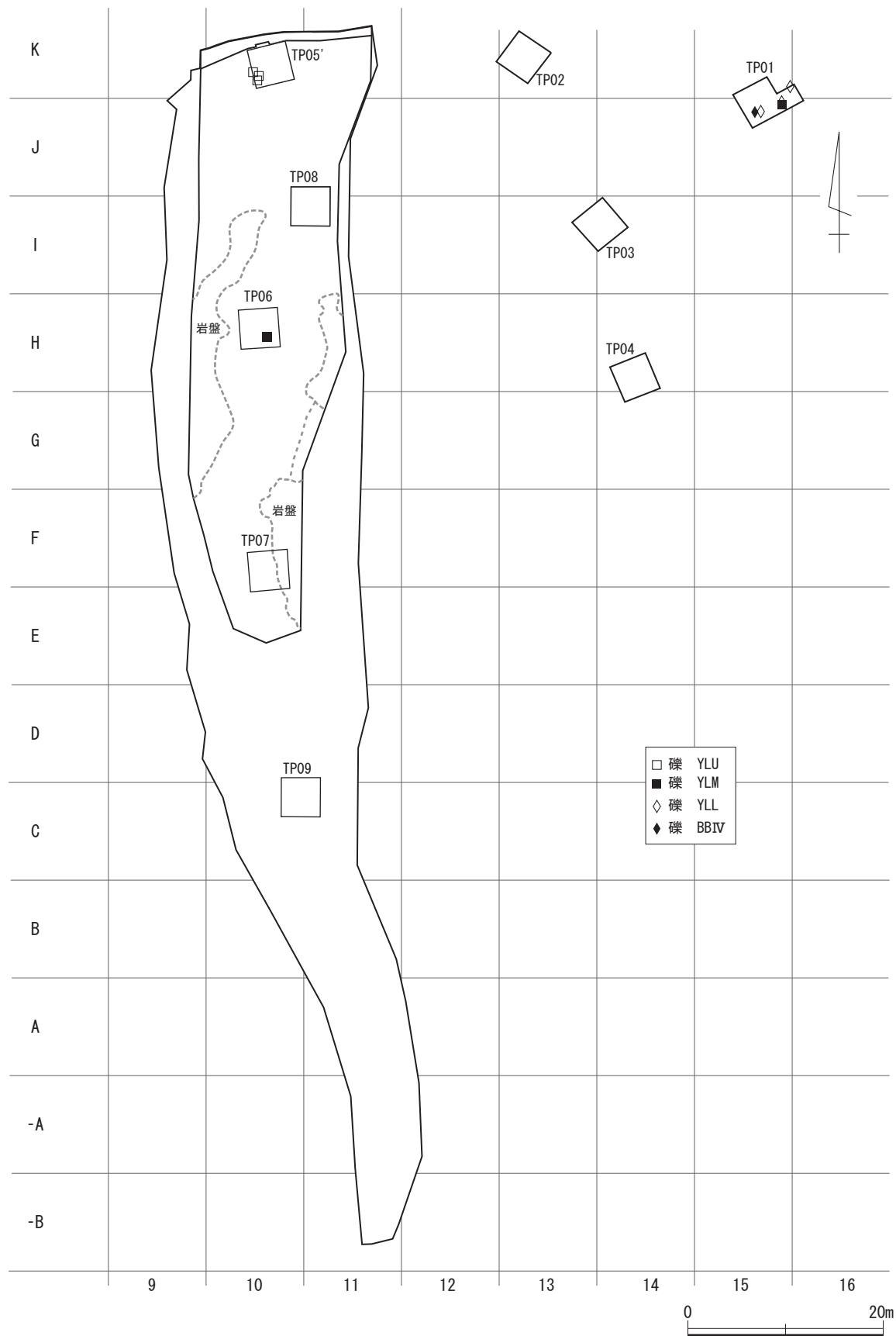
調査区分		確認調査	本調査(下層調査)		合計
出土場所		TP01	TP05'	TP06	
層位別 出土数	YLU		3		3
	YLM	1		1	2
	YLL	3			3
	BBIV	1			1
合計		5	3	1	9

第9表 旧石器時代 磕組成表（層位別）

層位	総重量 (g)	平均重量 (g)	総数	石材					赤化			礫形状		
				An(Py)	VAn	Ba	Ba(Scr)	LT	B	D	E	角礫	亜角礫	円錐形
YLU	1854.7	618.2	3	2		1			2	1			3	
YLM	602.4	301.2	2	1	1					1	1	1		1
YLL	314.0	104.7	3	2			1		1	2		1	2	
BBIV	130.8	130.8	1					1	1			1		

第10表 旧石器時代 磕観察表

遺物番号	TP	層位	石材	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	礫形状	赤化	グリッド	X座標(m)	Y座標(m)	Z座標(m)
50050	TP01	YLM	VAn	10.2	8.1	3.2	212.4	角礫	E	J-015	-94400.63	28838.94	132.471
50051	TP01	YLL	Ba(Scr)	5.5	5.0	4.8	169.4	亜角礫	Dスス	J-015	-94400.37	28838.92	132.367
50052	TP01	YLL	An(Py)	4.3	3.7	3.4	54.1	亜角礫	B	J-015	-94401.36	28836.78	132.355
50057	TP01	BBIV	LT	6.8	5.9	2.8	130.8	角礫	B	J-015	-94401.41	28836.18	130.628
50060	TP01	YLL	An(Py)	6.6	4.9	3.8	90.5	角礫	D	K-015	-94398.81	28839.79	132.480
50093	TP05'	YLU	Ba	7.6	7.5	1.8	105.7	亜角礫	B	K-010	-94398.17	28785.24	125.934
50094	TP05'	YLU	An(Py)	14.7	9.3	5.2	523.5	亜角礫	B	K-010	-94397.71	28785.40	126.032
50095	TP05'	YLU	An(Py)	12.3	11.8	8.8	1225.5	亜角礫	D	K-010	-94397.32	28784.81	126.051
50104	TP06	YLM	An(Py)	11.2	5.4	3.8	390.0	円錐形	D	H-010	-94424.43	28786.22	117.684

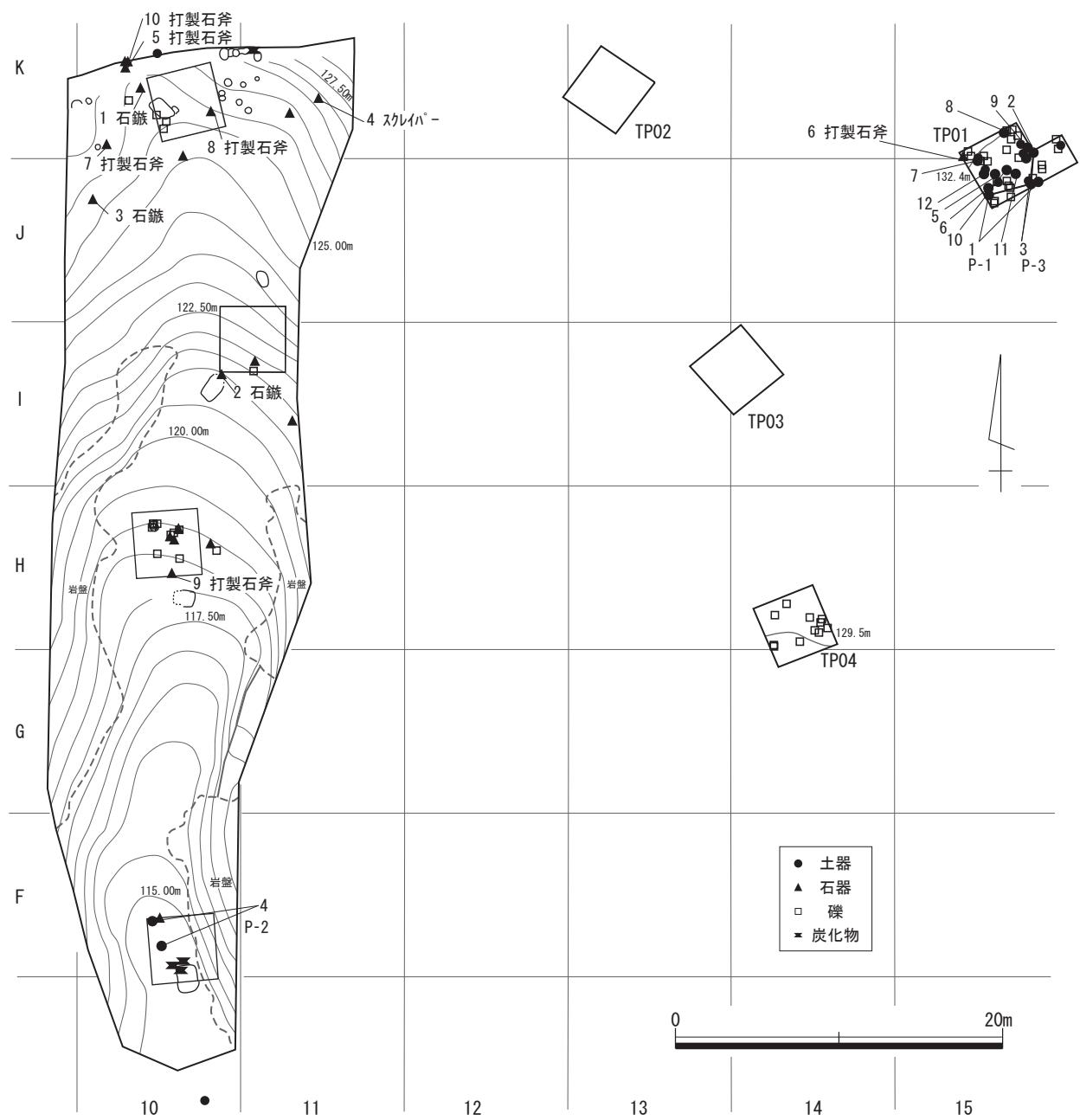


第25図 旧石器時代遺物分布

第2節 繩文時代の遺物

縄文土器は24点が出土し、内15点（接合を経て12点）を図化した。縄文時代の石器は23点が出土し、内10点を図化した。

土器は谷部（本調査区内）での出土は少なく、尾根部（確認調査TP01搅乱）に集中し、石器は谷頭部と北・中央部の谷に集中しており、土器と石器の出土傾向は異なっている（第26図）。この違いは尾根部と谷部における人々の活動形態に起因すると考えられる。尾根部は後世の耕作等による搅乱を受けた結果、本来集落の主体であった遺構が失われ、搅乱土中から土器が検出されたと推測される。また、谷部は陷穴が確認されているように、狩場や一時的な作業場として利用する活動範囲であったため、狩猟具である石鎌や土掘具である石斧を主体とし、土器の出土量が少なかったと推測される。



第26図 縄文時代遺物分布

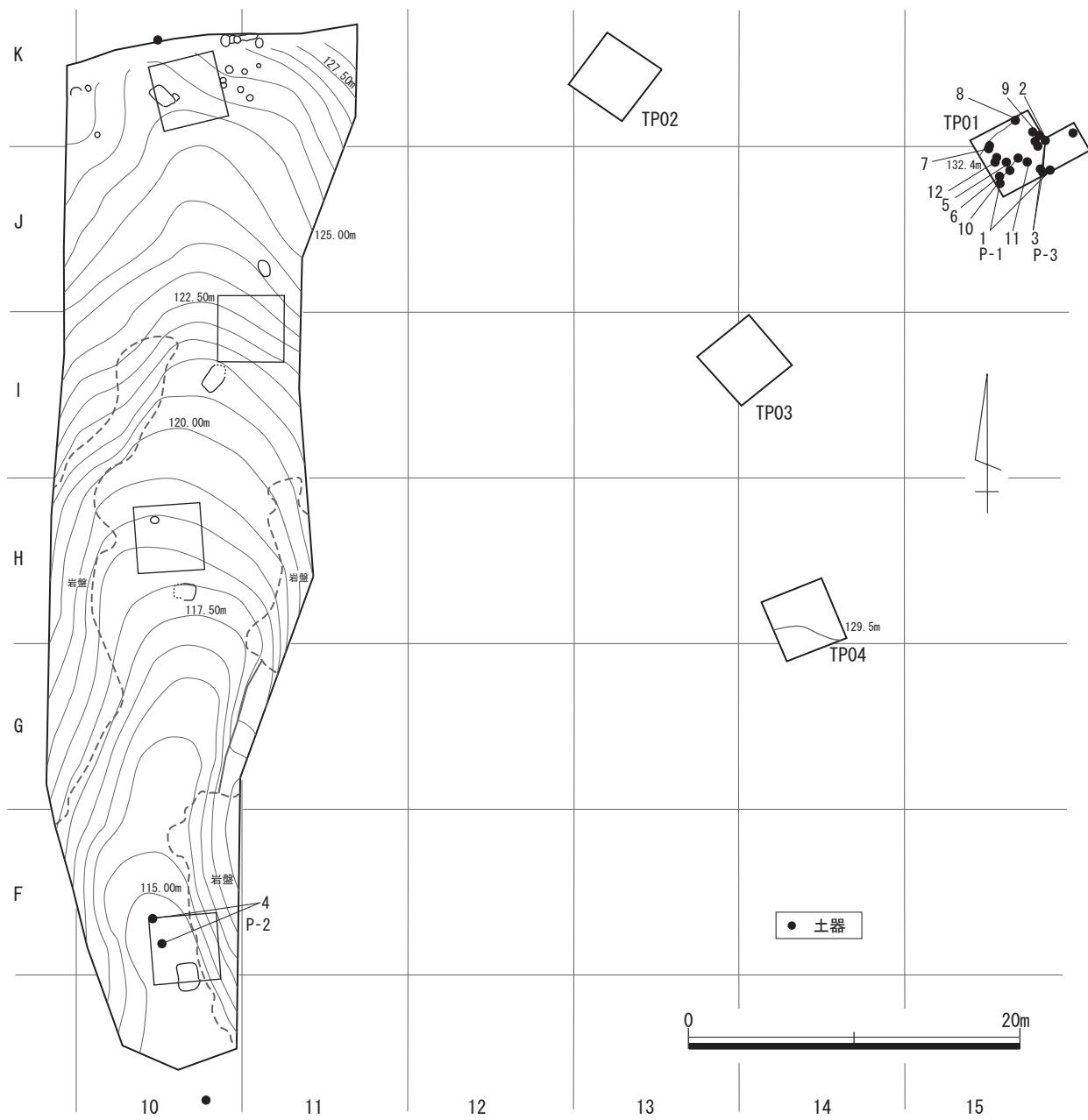
1 土器（第28図）

24点の内、本調査区で2点、下層調査TP07で2点（接合を経て1点）、確認調査TP01で20点が検出されている（第27図）。出土状況は、遺構覆土が1点、包含層が4点（接合を経て3点）、搅乱層が19点（接合を経て17点）であった。全て前期の諸磧b式に比定される。

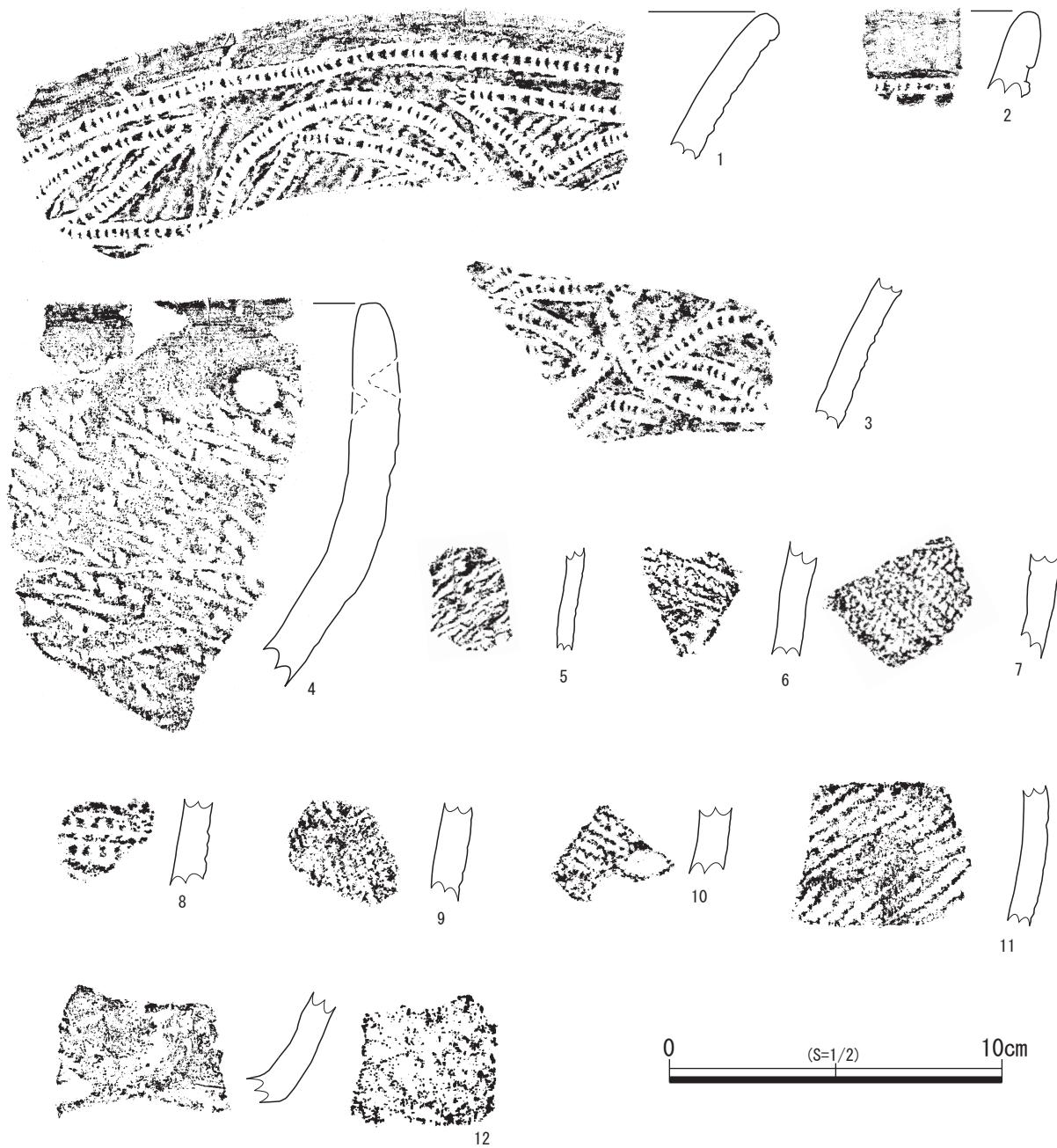
1は口縁部の破片である。左端上部の口縁は突起の欠損部が見られる。地文にはL Rによる縄文を施

第11表 縄文時代 土器出土状況

調査区分	本調査			確認調査		合計
	出土場所	SD24	K-10	TP07 (下層調査)	TP01	
出土層位	覆土	AN	AN～KU	KU～FB	搅乱	
出土数	1	1	2	1	19	24



第27図 縄文時代 土器分布



第28図 縄文時代 土器

し、半截竹管による押し引き文で三角形や木の葉状・弧状文を描いた後、部分的に磨り消しているが、不完全である。3は同一個体と考えられる。

2は口縁部破片である。口縁の内外面はナデ調整を施す。口縁直下に半截竹管文を施文するが、破片中央で工具の向きを変えている。破片の下部にも竹管文の一部が残っていることから、竹管文は少なくとも2列平行して施されていたことが分かる。2条の竹管文の間は6mm程度で、そこに細い棒状の工具で斜位に刻み目を入れている。口縁直下は、竹管文の施文後ナデ調整をしているため、粘土が竹管文側にかぶるようせり出している。

4は口縁部から胴部にかけてやや内湾する破片である。口唇部はナデ調整されており、表裏に指頭圧痕が残される。胴部外面にはLとRを合わせ右撲りにして施文している。施文原体の特性のため一部撲りが緩んでいるのが確認できる。胎土には纖維を含む。器壁は厚く、未貫通の孔が表裏に1カ所ずつあ

り、土器補修のための穿孔と考えられるが、表裏の穿孔の位置は上下にずれ貫通していない。

5は胴部の破片である。土器片（内・外）の下部に煤が付着している。RとLを合わせて左に撲った合撲の縄文が施されていると判断した。器壁は薄い。

6はやや外湾する胴部破片である。縄文RLを横位に施し、裏面はヘラ状の工具による調整痕が残されている。胎土には石英・輝石を多く含む。

7はやや内湾する胴部の破片である。細い縄により縄文RLが横位に施されている。裏面にはヘラ状の工具による調整の際にできた段差が確認できる。

8は横位の半截竹管文を上下に2条施文している。裏面はヘラ状の工具でナデ調整されている。

9は縄文RLを横位に施文しているが、表面は摩滅している。裏面はナデ調整が確認できる。

10は縄文RLを横位に施文している。裏面はナデ調整している。胎土には石英・輝石を多く含む。

11は内湾する胴部の破片である。表面は摩滅しているが、LRによる縄文が横位に施されている。裏面はヘラ状の工具でナデ調整している。内側に炭化物が付着している。

12は底部の破片である。底部は平坦で良く整えられているが、外面の調整は粗い。内面には成形時の輪積痕が残っており、指頭圧痕や爪痕も確認できる。

第12表 縄文時代 土器観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	接合	層位	グリッド	形式	胎土	焼成	色調	調整
28図	1	50008 50013	P-1	搅乱	J-15	諸磯b	1.0mm～1.5mmの雲母・石英・黒色粒子・赤色粒子を含む。0.5mm以下の白色粒子・石英・雲母を含む。	良	表:5YR6/6橙色 裏:5YR6/6橙色	突起のある口縁。半截竹管による押し引き文で、三角形、木の葉状、弧状に施文。地紋はLRの縄文、部分的に磨り消し。
28図	2	50048		搅乱	K-15	諸磯b	0.5mm～1.5mmの石英・長石を含む。0.5mm以下の雲母・石英・黒色粒子を含む。	良 スス付着	表:7.5YR5/3褐色 裏:10YR4/4褐色	半截竹管文を、途中施文具を逆方向に変更し横位に1条、さらにキザミを施す。下部にもう1条、半截竹管文。
28図	3	50033 50049	P-3	搅乱	J-15 K-15	諸磯b	1.0mm～1.5mmの雲母・石英・黒色粒子・赤色粒子を含む。0.5mm以下の白色粒子・石英・雲母を含む。	良	表:7.5YR6/6橙色 裏:10YR7/3 にぶい黄橙色	半截竹管による押し引き文を弧状に施文。地紋はLRの縄文、部分的に磨り消し。
28図	4	50100 50101	P-2	KU ～AN	F-10	諸磯b	繊維痕有り。2.0mm～4.0mmの砂礫を含む。0.5mm以下の石英・雲母を黒色粒子を含む。	良	表:5YR6/6橙色 裏:5YR6/6橙色	LとRを合わせてRに撲った合撲を横位、内外面に補修目的と推察される穿孔あり。
28図	5	50018		搅乱	J-15	諸磯b	1.0mmほどの石英・雲母を含む。0.5mm以下の石英・黒色粒子を多く含む。	良	表:10YR5/4 にぶい黄褐色 裏:10YR5/4 にぶい黄褐色	RとLを合わせてLに撲った合撲の縄文。
28図	6	50046		搅乱	J-15	諸磯b	1.5mm～2.5mmの石英を多く含む。0.5mm以下の石英・輝石・雲母を含む。	良	表:7.5YR4/4 にぶい褐色 裏:7.5YR4/4 にぶい褐色	RLの横位縄文。
28図	7	50005		搅乱	J-15	諸磯b	1.5mm～2.5mmの石英・長石を含む。0.5mm以下の雲母・石英・輝石を含む。	良	表:7.5YR4/4褐色 裏:7.5YR4/4褐色	RLの横位縄文。
28図	8	50001		搅乱	K-15	諸磯b	1.0mm～2.0mmの砂礫を多く含む。0.5mm～1.0mmの雲母・石英・黒色粒子を含む。	良	表:10YR4/4褐色 裏:10YR4/6赤褐色	半截竹管による押し引き文を横位に2条。
28図	9	50002		搅乱	K-15	諸磯b	1.0mm～2.0mmの石英・輝石を多く含む。1.0mm以下の雲母・黒色粒子を含む。	良	表:10YR4/4褐色 裏:7.5YR4/4褐色	RLの横位縄文、表面摩滅。
28図	10	50009		搅乱	J-15	諸磯b	1.5mm～2.5mmの石英・長石を含む。0.5mm以下の雲母・石英・輝石を多く含む。	良	表:7.5YR5/6明褐色 裏:7.5YR5/6明褐色	RLの横位縄文。
28図	11	50010		搅乱	J-15	諸磯b	1.0mm～1.5mmの砂礫を含む。0.5mm以下の石英・白色粒子を含む。	良 スス付着	表:7.5YR5/6明褐色 裏:10YR5/4 にぶい黄褐色	LRの横位縄文。
28図	12	50007		搅乱	J-15	諸磯b	繊維痕有り。1.0mm～1.5mmの石英・長石を含む。0.5mm以下の雲母・石英・輝石を含む。	良	表:5YR5/4赤褐色 裏:5YR5/4赤褐色	平底。

2 石器

23点の内、谷部で22点（本調査区：14点、下層調査TP05～08：7点、確認調査TP06：1点）、尾根部で1点（確認調査TP01）が出土している（第29図）。出土状況は、遺構覆土が1点、包含層が16点、攪乱層及びその他（表採）が各3点であった。

第13表 縄文時代 石器出土状況

調査区分	本調査							下層調査			確認調査		合計
	SD18	I-10	J-10	K-10	K-11	表採	TP05'	TP06	TP07	TP08	TP01	TP06	
層位別出土数	覆土	1											1
	黒色土(UK)		1			1							2
	AN			1	3	1			3				8
	AN～KU									1			1
	KU～FB				1			1			1		3
	FB				1								1
	ZN							1					1
	攪乱				1						1	1	3
	その他						3						3
合計		1	1	1	6	2	3	1	4	1	1	1	23

(1) 石鏃（第30図 1～3）

石材は全て黒曜石である。

1は無茎凹基尖脚の石鏃である。谷頭部西側のK-10グリッドで検出された。右脚部を折損している。両側縁は緩やかに外湾している。表裏ともに素材剥片の剥離面を残すが、両側縁にかけ丁寧な調整剥離が施されている。

2は無茎凹基尖脚の石鏃である。北部谷付近のI-10グリッドで検出された。右脚部が折損している。厚さ0.21cmと薄い。基部には浅い抉りがある。左縁辺には屈曲があるため左右非対称である。表裏ともに丁寧な調整が施されている。

3は先端部と左脚部を大きく折損しているが、無茎凹基尖脚の石鏃と推測される。北部西側斜面のJ-10グリッドで検出された。裏面には素材面が残る。右縁辺には鋸歯縁加工を試みたが、折れが生じたため製作をあきらめたと考えられる。

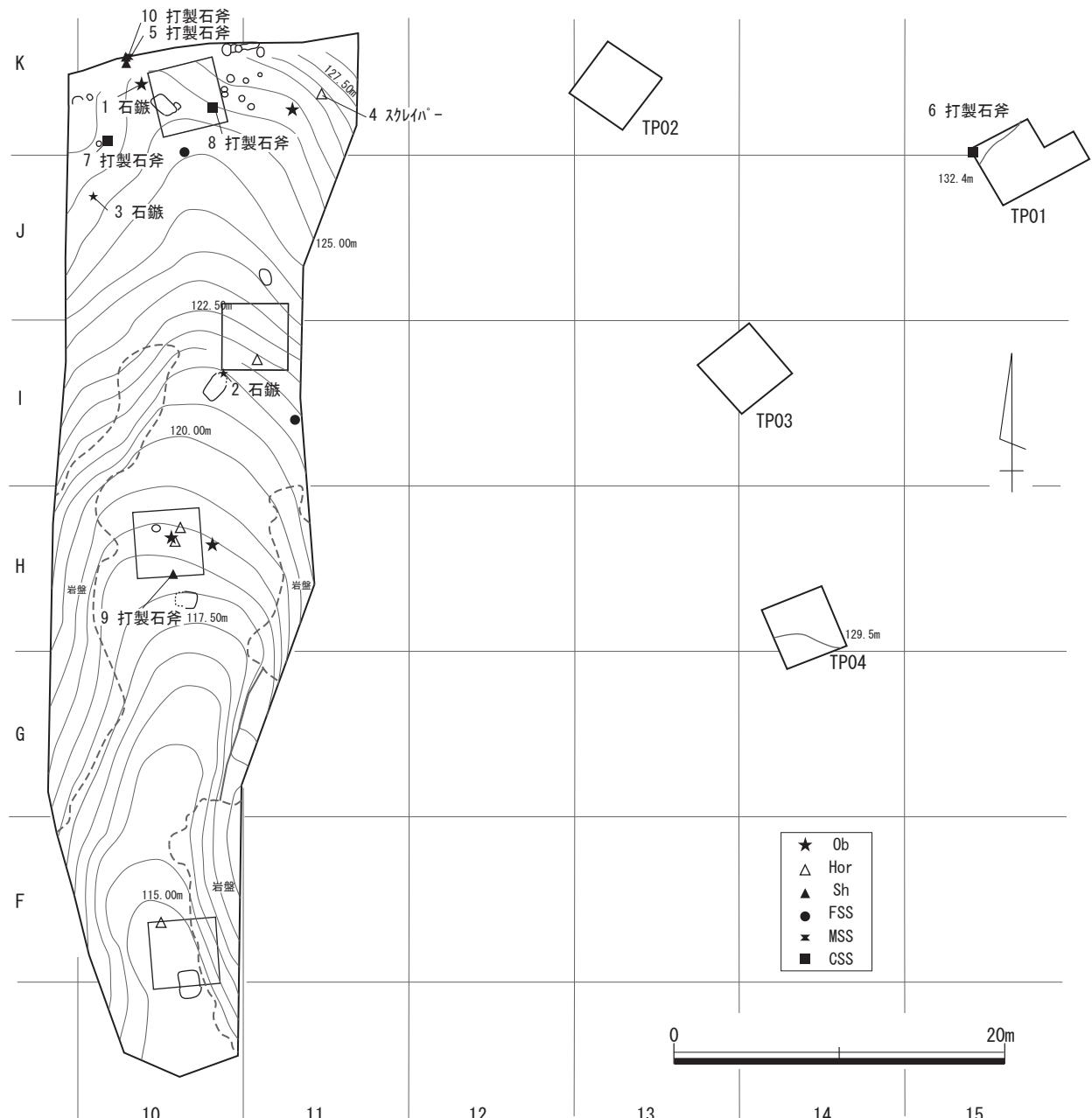
(2) スクレイパー（第30図 4）

4はホルンフェルスを石材とするスクレイパーである。谷頭部東側のK-11グリッドで検出された。円礫から得られた厚く縦長の剥片を素材とする。両側縁は主に裏面から調整を加え刃部としている。右側縁表面には自然面を残している。刃となる部分は角度が約50度である。

(3) 打製石斧（第31・32図）

5は頁岩を石材とする短冊形の打製石斧である。北壁西側付近のK-10グリッドで検出された。大型の礫から得られた縦長の剥片を素材としている。表面の大部分に自然面を残すが、両縁辺には平坦な調整剥離がなされている。裏面の縁辺はかなり調整が加えられているが器体中央までは加工が及んでいないため、素材の剥離面が残る。重さ370g、長さ18.20cm、幅6.42cm、厚さ2.89cmと今回出土した石斧の中で最も重く大きい。

6は砂岩を石材とする短冊形の打製石斧である。K-15グリッドの確認調査TP01で検出された。上端部を折損している。右側縁からの打撃により得られた横長の剥片を用いている。表面に平坦な自然面を残す。両面ともに器体の周囲に大まかな調整剥離を加えた後、縁辺にやや細かな平坦剥離を加えている。折損部付近の両側縁部分には抉りが見られる。

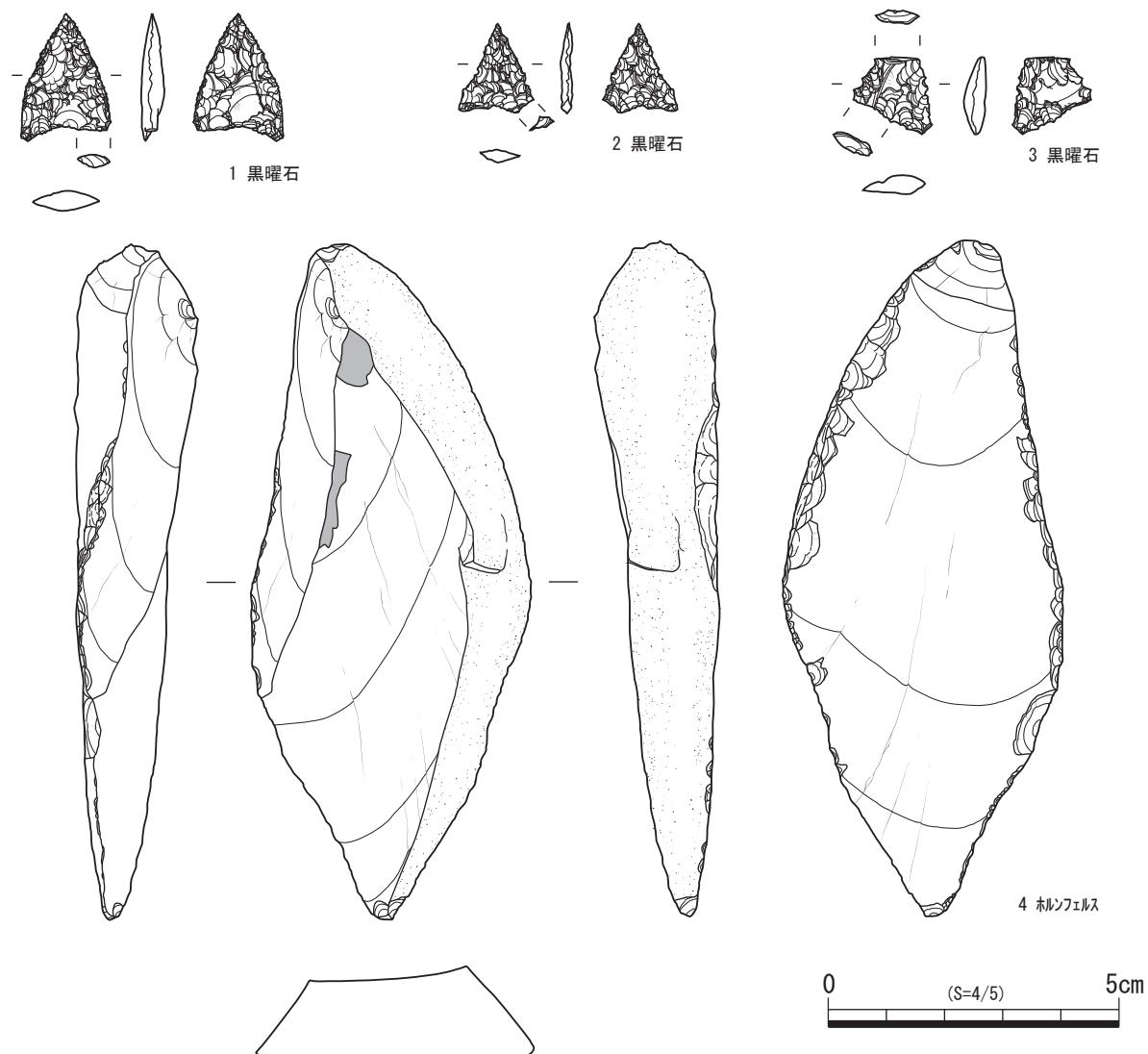


第29図 縄文時代 石器石材別分布

7は砂岩を石材とする短冊形の打製石斧である。谷頭部西側のK-10グリッドで検出された。礫から得られた剥片を素材とし、表面に自然面を残す。上端は折損している。刃部は調整剥離により方形に近く整えられ、両側縁も丁寧な調整が加えられている。

8は砂岩を石材とする短冊形の打製石斧である。谷頭部中央付近のK-10グリッドで検出された。刃部を折損する。左側縁からの打撃により得られた横長の剥片を用い、表面に自然面を残す。上端部左の大きな剥離は器体の厚みを調整したためと推測される。両側縁は表裏から調整が加えられている。

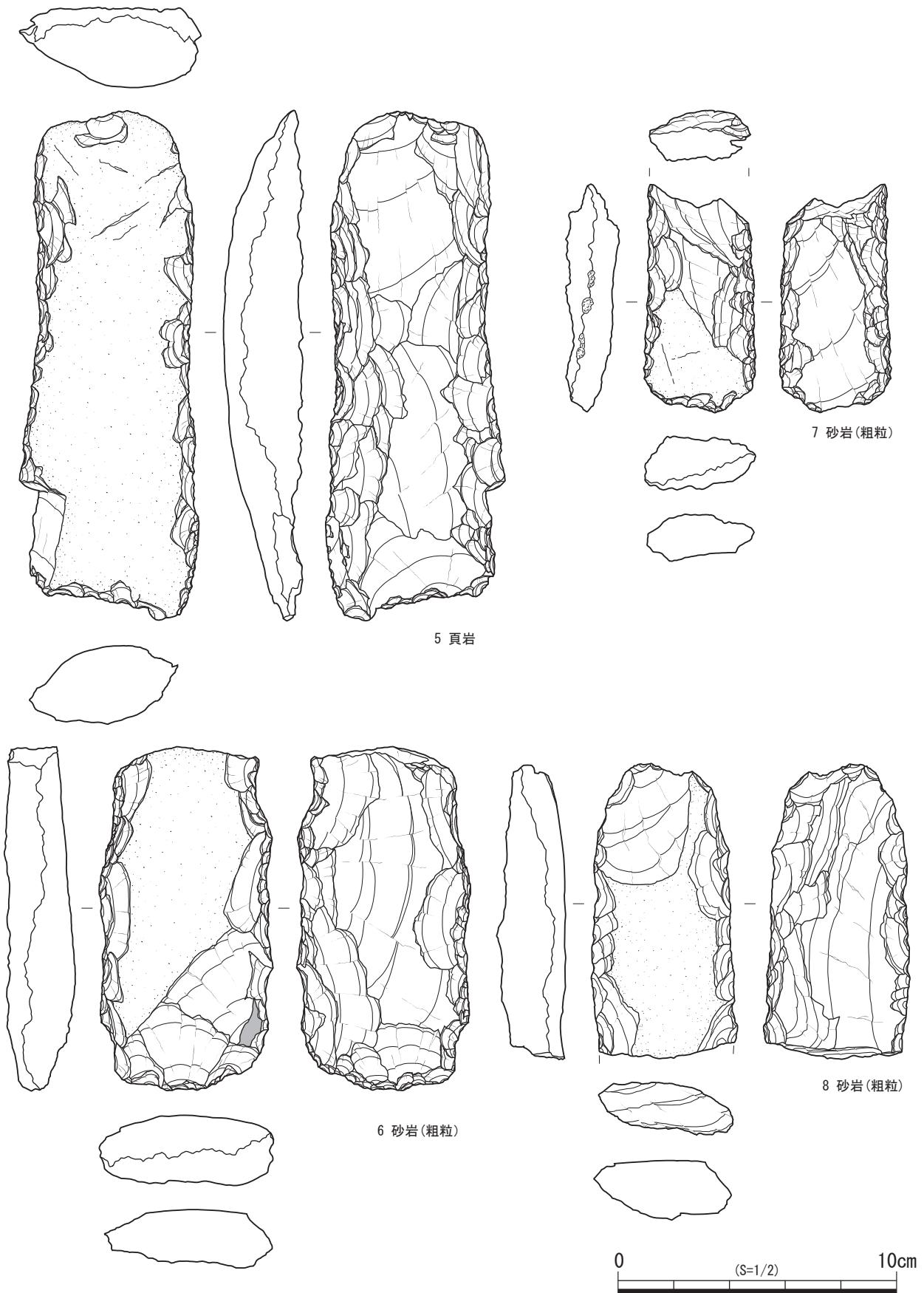
9は頁岩を石材とする短冊形の打製石斧である。中央部谷底のH-10グリッドで検出された。長さ14.46cm、幅7.75cmの幅広の石斧である。表面に自然面が多く残され、円礫から得られた剥片を使用したと考えられる。表面右半分に大きな剥離が認められることから、円礫から剥離した当初は右側に厚みがありそれを調整するために平坦剥離を行ったと考えられる。抉り部は縁辺部の薄いエッジを活かしながら



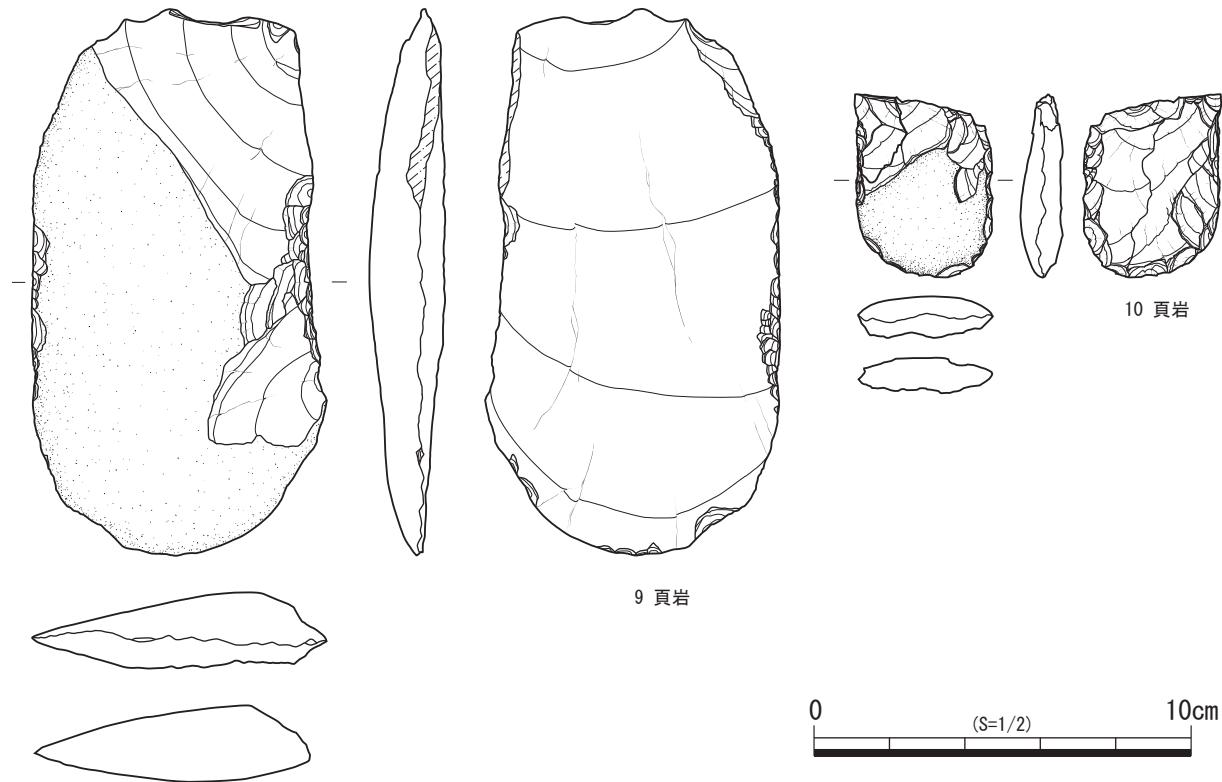
第30図 繩文時代 石器1（石鎌・スクレイパー）

ら丁寧に調整剥離されている。

10は頁岩を石材とする短冊形の打製石斧である。北壁西側付近のK-10グリッドで検出された。表面がほぼ自然面で円礫から得られた剥片を用いている。裏面からの剥離で、刃部は良く整えられている。基部を折損しており、折れた面を薄く剥離している。これは折れた石斧を再利用しようとする際、柄に括り付けやすくするために行った加工と推測される。



第31図 縄文時代 石器2（打製石斧）



第32図 繩文時代 石器3（打製石斧）

第14表 繩文時代 石器観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	層位	グリッド	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	X座標(m)	Y座標(m)	Z座標(m)
30図	1	50106	石鎌	搅乱	K-10	Ob	1.12	2.14	1.48	0.39	-94395.657	28783.829	127.023
30図	2	50102	石鎌	黒色土	I-10	Ob	0.25	1.54	1.26	0.21	-94413.165	28788.786	122.245
30図	3	50107	石鎌	AN	J-10	Ob	0.60	1.34	1.34	0.39	-94402.468	28780.914	126.371
30図	4	50113	スクレイパー	AN	K-11	Hor	98.32	11.62	4.74	1.89	-94396.286	28794.713	127.536
31図	5	50110	打製石斧	AN	K-10	Sh	370.00	18.20	6.42	2.89	-94394.042	28782.877	127.205
31図	6	50032	打製石斧	搅乱	K-15	CSS	260.55	12.30	6.18	2.55	-94399.840	28834.111	133.055
31図	7	50062	打製石斧	KU～FB	K-10	CSS	62.60	8.17	3.98	1.92	-94399.108	28781.755	126.813
31図	8	50080	打製石斧	KU～FB	K-10	CSS	168.33	10.48	5.19	2.36	-94397.098	28788.131	126.753
32図	9	50087	打製石斧	黒色土	H-10	Sh	228.14	14.46	7.75	1.87	-94425.318	28785.742	119.222
32図	10	50111	打製石斧	AN	K-10	Sh	25.21	4.78	3.67	1.13	-94394.426	28782.904	127.210
		50055	剥片	搅乱	H-10	Ob	1.38	1.71	1.70	0.65	-94423.508	28788.113	120.399
		50066	剥片	SD18覆土	I-11	FSS	43.20	7.37	5.52	0.90	-94416.001	28793.109	122.420
		50078	剥片	AN	K-11	Ob	0.11	0.95	0.74	0.17	-94397.196	28792.948	127.670
		50081	剥片	KU～FB	I-11	Hor	4.31	2.75	2.37	0.73	-94412.354	28790.822	121.970
		50083	剥片	AN	H-10	Hor	1.19	2.18	1.39	0.52	-94422.582	28786.150	119.525
		50086	剥片	AN	H-10	Hor	82.69	8.53	4.34	2.13	-94423.274	28785.886	119.465
		50090	剥片	ZN	H-10	Ob	0.56	1.77	1.20	0.30	-94423.078	28785.629	119.344
		50103	剥片	KU～AN	F-10	Hor	69.13	8.05	5.73	1.46	-94446.387	28785.008	115.672
		50109	剥片	AN	K-10	MSS	113.12	8.63	7.56	1.58	-94394.053	28783.053	127.225
		50114	剥片	FB	K-10	FSS	16.84	4.90	3.01	0.93	-94399.815	28786.426	124.537
		50116	剥片	表採	—	Ob	4.04	3.01	2.06	0.81	—	—	—
		50117	剥片	表採	—	Ob	1.30	2.27	1.21	0.58	—	—	—
		50118	剥片	表採	—	Ob	0.93	1.50	1.30	0.48	—	—	—

第3節 弥生時代～古墳時代初頭の遺物

弥生後期後半～古墳前期初頭の土器17点が出土し、内8点（接合を経て7点）を図化した。主に中央部谷底付近に集中している（第33図）。

1 土器（第34図）

17点の内、本調査で15点（接合を経て14点）、確認調査で2点が出土している。出土状況は、遺構覆土が5点、包含層が11点、その他（表採）が1点である。

第15表 弥生時代～古墳時代初頭 土器出土状況

調査区分	本調査					確認調査		合計	
	出土場所	SD18-2	SD24	F-10	G-10	H-10	表採	TP07	SD17
出土層位	覆土	覆土	UK	UK	UK		NSC	覆土	
出土数	1	3	5	3	2	1	1	1	17

13は単純口縁壺の口縁部破片である。頸部から緩やかに外反する。頸部外面に不自然な平坦部があるが、乾燥中に倒れるなどして、変形したためと考えられる。外面は斜めハケを施した後、口縁部を丁寧にナデ調整している。内面はヘラ磨きを施すが、摩滅が著しい。

14は壺の底部破片である。底部から開きながら立ち上がっている。内面は平滑に調整され、外面には斜めハケが確認できる。底面には木葉痕が残されている。底部周辺は摩滅しており、外面は突出気味で粘土の盛り上がりが確認できる。

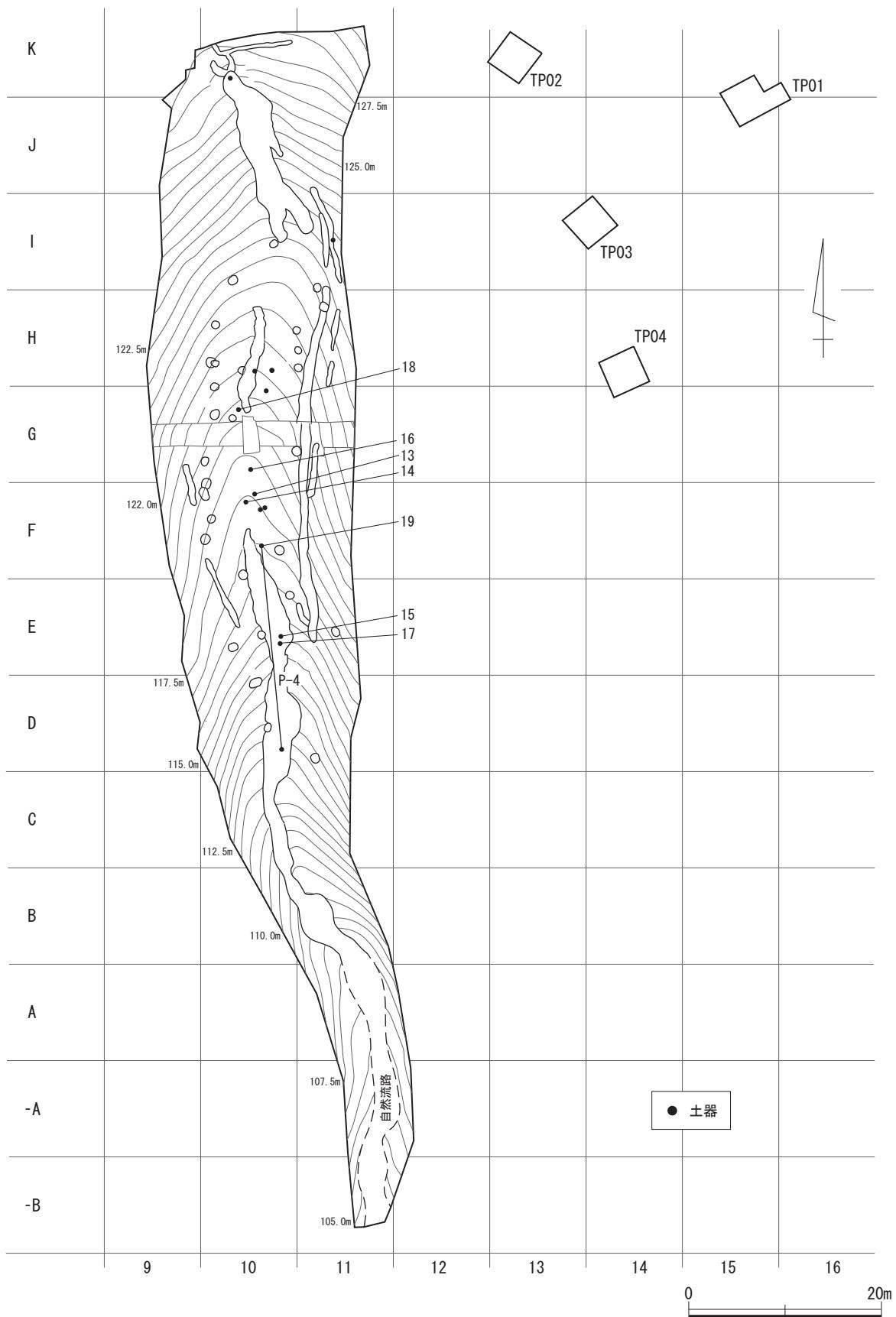
15は甕の口縁部破片である。緩やかに外反する単純口縁である。外面に斜めハケを、内面にヨコハケを施した後ナデ調整しているが、口唇部は無文である。薄手で焼成は良い。

16は甕の頸部破片である。外面に斜めハケ、内面にヨコハケを施している。表面に煤が付着している。

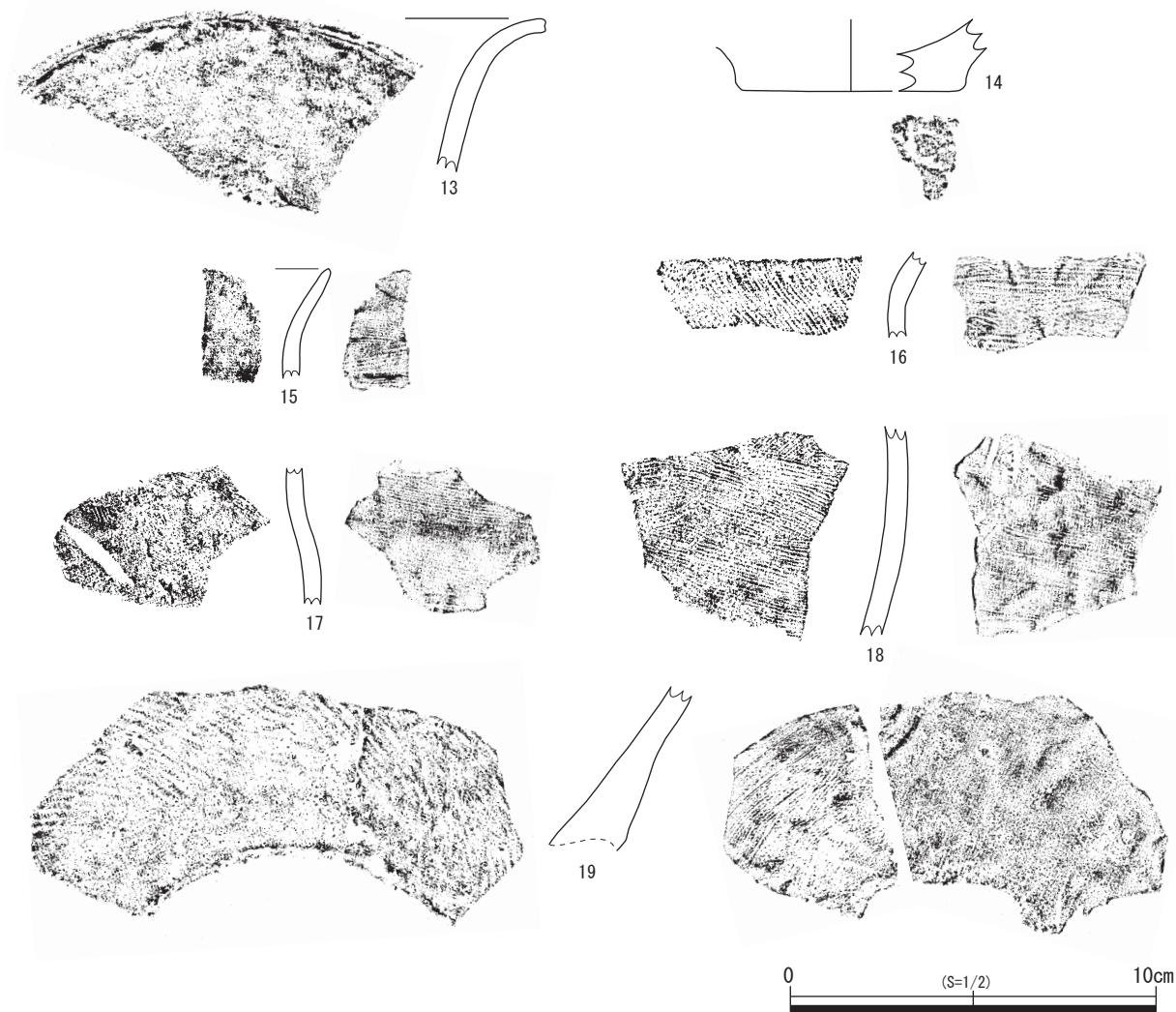
17は甕の頸部から胴部の破片である。外面は斜めハケを、内面はヨコハケを施しており、両面ともにその上から部分的にナデ調整している。外側に炭化物が付着している。

18は甕の胴部破片である。緩やかに内湾している。外面には斜めハケが、裏面にはヨコハケが施された後ナデ調整されている。ハケ後内面を中心に指頭圧痕が確認できる。

19は台付甕の底部破片である。緩く開きながら立ち上がっている。破片上端の割れ面は胴部中位との接合面であり、破片下端の割れ面は台部からの剥離痕である。外面・内面ともに斜めハケが施されているが、外面は粗く、内外面でハケの原体が違う。被熱により変色しているが、摩滅のため煤は確認できない。



第33図 弥生時代～古墳時代初頭 遺物分布



第34図 弥生時代～古墳時代初頭 土器

第16表 弥生時代～古墳時代初頭 土器観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	接合	層	グリッド	部位	胎土	色調	焼成
34図	13	50072		黒色土	F-10	口縁部	0.5mmの黒色粒子、白色粒子を含む。 含有物は少ない。	表:7.5YR6/6 橙色 裏:7.5YR7/6 橙色	良
34図	14	50069		黒色土	F-10	底部	1.0mm～3.0mmの砂礫を含む。 0.5mm以下の黒色粒子を含む。	表:10YR6/4 にぶい黄橙色 裏:2.5YR5/5 暗灰黄色	良
34図	15	50076	SD24 覆土	E-10		口縁部	0.5mm以下の黒色粒子、白色粒子、 石英を含む。	表:10YR6/4 にぶい黄橙色 裏:2.5YR5/2 暗灰黄色	良
34図	16	50071		黒色土	G-10	頸部	0.3～0.5mmの白色粒子をやや含む。 0.5mm以下の黒色粒子を含む。	表:10YR7/6 明黄褐色 裏:10YR7/3 にぶい黄橙色	良 炭化物付着
34図	17	50075	SD24 覆土	E-10		頸部	0.5mm以下の白色粒子、黒色粒子、 石英を多く含む。	表:5YR5/6 明赤褐色 裏:2.5YR5/4 暗灰黄色	良 炭化物付着
34図	18	50064		黒色土	G-10	胴部	0.5mmの黒色粒子、石英を含む。 含有物は少ない。	表:10YR6/4 にぶい黄橙色 裏:2.5YR5/2 暗灰黄色	良
34図	19	50056 50077	P-4	NSC	F-10 D-10	底部	0.5mm以下の黒色粒子、砂礫を含む。 1mm～2mmの白色粒子、スコリアを 含む。	表:10YR6/4 にぶい黄橙色 裏:2.5YR5/4 暗灰黄色	良

第6章 まとめ

第1節 今回の調査のまとめ

1 遺構について

(1) 栗色土層～休場層上面

栗色土層から富士黒色土層で縄文時代前期に比定される諸磯b式土器が出土しているので、縄文時代前期を含む時期に相当すると考えられる。

谷頭部から谷部で土坑が4基確認された。土坑3基は平面が隅丸方形で断面が逆台形状であり、その内の1基には2本の逆茂木痕がある。やや小規模な土坑1基は平面が楕円形を呈し1本の逆茂木痕を持つ。その断面は皿状であるが、掘り込み面はさらに上層と考えられるため、実際は逆台形状に近いものであった可能性がある（第8図）。谷頭部の土坑の検出深度は深く斜面部の土坑がやや浅いのは、後者が後世の浸食を受けているためと推測され、遺構本来の性格を示すものではないと考えられる。

(2) 暗褐色土層

出土遺物は少ないが、谷部と谷頭部で縄文土器（諸磯b式）と縄文時代の石器が出土している。谷部は浸食や二次堆積により標準的な層序を示さないところもあるが、おおむね縄文時代前期を含む時期以降に相当すると考えられる。

谷頭部で竪穴住居、焼土および小穴を検出した。竪穴住居の近くに柱穴の可能性のある小穴と竪穴住居と切り合い関係を持つ、より以前の焼土が確認されており、他にも竪穴住居が存在していた可能性がある。竪穴住居は削平により柱穴・焼土のみの検出であったが、石鏸や打製石斧、スクレイパーなどの石器が近くで出土している。

谷部には被熱痕のある礫を含む集石1基が検出された。一時的に調理場として利用されたと推測される。谷部は居住に不適であるので、必要に応じて利用する作業場として居住区と使い分けていた可能性がある。

(3) 新期スコリア層

いわゆる円形土坑と溝が多数検出され、中世以降の時代に相当すると考えられる。

確認された溝の内、同一の溝としてまとめられる4群と東西に渡って谷頭部に存在する1条は、本来5条の溝であったと考えられる。5条の溝は、谷頭部に谷筋と直交して掘削されるもの（SD16）、谷底に谷筋に沿って掘削されるもの（溝3）、谷を挟んだ両斜面に谷筋に並行して掘削されるもの（溝1・2・4）に大別することができる。

東側斜面の溝1と溝2には遺構の性格・機能に共通点があると認められる。切り合い関係から溝2の方が新しいが、ほぼ溝1に沿い一部は重複することから溝2は溝1の改修と推測される。

西側斜面の溝4は他の溝に比べ短いが、斜面の溝の谷側に円形土坑が位置する状況から判断して、本来は北側に延びていたと考えられる。溝が検出されないのは、後世の浸食により削平されたためと推測される。

さらに、溝1と溝4は谷底を挟んで東西の斜面に位置することから一対で同等の役割を持っていたと考えられる。前述のように溝2は溝1の改修と推測されるため、後には溝2と溝4が一対として存在したと考えられる。

谷筋に並行して掘削される溝（溝1・2・4）は、円形土坑と規則性・関連性を見出すことが可能である。すなわち、南北に走る谷を挟んだ東西の斜面に谷筋と並行する長い溝が確認され（溝1・2・4）、

その谷側2m以内に円形の土坑が一定間隔をもって並行している状況がうかがえる（第14図）。

溝3は谷頭部から谷底を流れており、自然や地形を活かした水路と考えられる。溝3の内、最も大規模であるSD24の中央部には土坑状の掘り込みが4基連なり規則性を感じさせるが、その機能は判然としない。

円形土坑にも規則性があり、3つの集合体が確認される。SF249・240・241は中央部東側斜面のSD19（溝2内）から約1m谷側に並列し、約2mの等間隔で直線状に並ぶ。中央部西側斜面のSF245・247・246は、約2.8mの等間隔で直線状に並ぶ。並列する斜面上側の溝は検出されていないが、前述のように本来は溝4が北側に延びていたと推測され、東側のSF249・240・241に相対すると捉えられる。また、SF253・255・251は、中央部西側斜面のSD27（溝4内）から約1m谷側に並列し、約3m間隔で同一線上に並ぶ（第21図）。

また、前述のようにSD16は唯一谷頭部に存在し、明らかに他の溝とは異なる方向に延びている。また断面も、斜面に延びる溝は皿状であるが、SD16はV字状かつ幅狭である。斜面の溝とは別の役割を持っていたと推測される。

以上の溝、土坑が検出面を同じくし、ほぼ同時期に掘削されたものであると仮定すると、谷部における土地利用の在り方を以下のように推測することが可能である。

すなわち、

- ① 谷筋に沿ってその両斜面にやや細い溝が掘削され、その谷側に円形土坑が等間隔で掘削される。
- ② 谷頭部ではこの溝・土坑の列に直行した細い溝が掘削される。
- ③ 谷底部には谷筋にやや幅のある溝が掘削される。この溝には溝中に土坑状の連続したくぼみを伴う箇所が認められる。

以上が谷部における遺構の概略であるが、共伴遺物に乏しく時期も不明のため、遺構の用途、性格は不明といわざるを得ない。

2 遺物について

(1) 旧石器時代

テスティピット内で礫の出土が確認されたが、点数は少なく礫群の認定には至らなかった。尾根部のTP01では休場層中位から1点、休場層下位から3点および第IV黒色帶から1点出土している。谷頭部のTP05'では休場層上位から3点、谷部のTP06では休場層中位から1点出土している。尾根部と谷頭部にやや集中が見られるものの、被熱の程度が異なり、まとまって使用されたとは考えにくい。石材は輝石安山岩が最も多用され、9点中5点である。礫の数は少ないが複数層から出土が確認され、長期に渡り人々が付近で活動していたことが推測される。

(2) 縄文時代

土器は尾根部TP01の搅乱層からの出土が大半を占め（24点中19点）、全て諸磯b式（縄文時代前期）に比定される。施文により半截竹管文、RLおよびLRの単節縄文、RとLの合い撲り文、および無文の4群にまとめられる。このうち半截竹管文は諸磯b式土器の特徴的な文様である。単節縄文の破片は比較的厚く、諸磯b式土器に多く見られる胴部下半に残された地文の一部と判断される。RとLの合い撲り文の土器片は口縁部が内湾する様子からキャリパー形の深鉢と推察され、諸磯b式土器に同様の形状が見られることから同種の土器と考えられる。また、穿孔を作出しようとしたが貫通に至らなかった孔が見られ、土器の補修を断念した様子がうかがえる（第28図4）。

石器は、谷頭部と谷部で検出された土坑周辺と、谷頭部で検出された堅穴住居周辺で主に出土している。谷頭部で出土した石器付近で確認された土器は諸磯b式であったので、石器は縄文時代前期を含む時期に相当すると考えられる。確認できる出土層位のうち最も多く出土しているのは暗褐色土層である。

器種は、石鏃が3点、スクレイパーが1点、打製石斧が6点であり、打製石斧を陥穴の掘削に利用したとすると、動物の狩猟および加工に関連する石器に集中している。石鏃は全て黒曜石で無茎凹基尖脚と見られ、出土層位は暗褐色土層・黒色土層・搅乱層である。スクレイパーの石材はホルンフェルスであり暗褐色土層から出土している。打製石斧は、暗褐色土層・黒色土層から出土しているものは頁岩を石材とし、栗色土層～富士黒色土層・搅乱層から出土しているものは粗粒砂岩を石材としている。

(3) 弥生時代～古墳時代初頭

土器は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭のもので中央谷底付近に集中するが、出土数は少なかった。溝の覆土から5点、黒色土層から10点、新期スコリア層から1点、表採から1点が出土している。このうち黒色土層出土のものは溝3が掘削されていた場所から確認されたと推測され、溝の覆土であった可能性もある（第33図）。弥生時代～古墳時代の遺構は確認されていない。

土器は壺と甕に大別される。壺の口縁部片と底部片は同一個体である可能性もあるが、部位が離れているため確認は難しい。甕の15と17は胎土や厚みが類似しており、同一個体と推測される。

なお、諸磯b式の土器よりこの時期までの遺物が出土していないのは、今回の調査範囲周辺では土地利用に空白期があったためと推測する。

第2節 過年度調査との関連性

1 旧石器時代

平成18年度までの調査（以下、過年度調査）では旧石器時代の遺構が数多く検出されている。今回の調査では遺構の認定には至らなかったものの、旧石器時代の第IV黒色帯と休場層から礫が出土したことから、この時代に相当する過年度調査の礫群との関連を検討する。

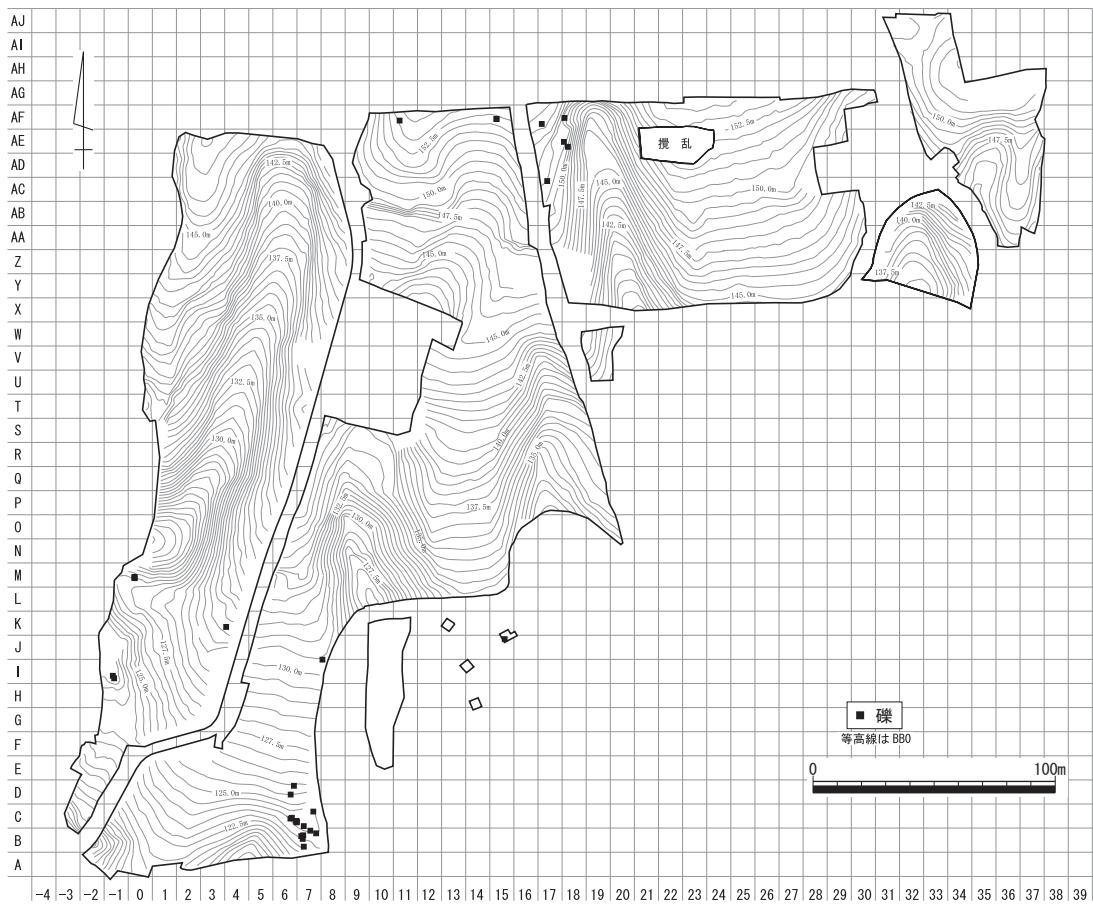
過年度調査では、第VI黒色帯から第IIIスコリア帯スコリア2には遺構・遺物がほとんど確認されないが、礫は散漫に分布している。今回の調査でも第IV黒色帯出土の礫は被熱痕のない1点のみであり、本遺跡第IV黒色帯における遺構・遺物の希薄な状況を追認することとなった（第35図）。

本遺跡西隣の的場遺跡では第V黒色帯のブロックから石器がまとまって出土し、上下層からは出土していない。また、未発表ではあるが、的場遺跡西側の渕ヶ沢遺跡では第IV黒色帯から石器2点・礫1点のみが出土し、第III黒色帯になると100点以上の石器が出土する。さらに、東側約1.5km離れた元野遺跡では第VII黒色帯から石器が出土するが、その後第III黒色帯の前まで遺構・遺物が出土していない。この傾向は、愛鷹山麓では第IV黒色帯から第IIIスコリア帯に包含される時期が遺跡分布の縮小期に当たるとする中村氏の考察（2011）を追認するものとなっている。

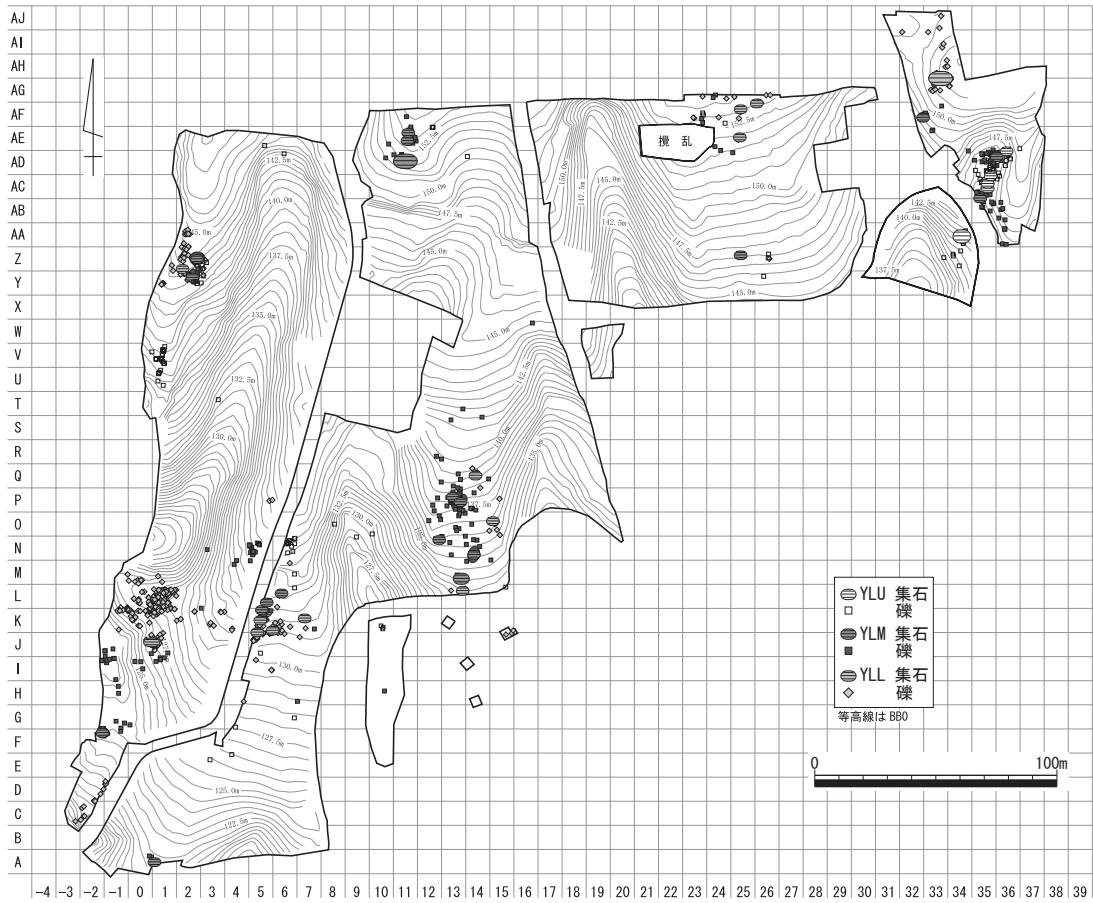
また、今回の調査では休場層から8点の礫が出土している。過年度調査では休場層上位で5基、休場層中位で19基、休場層下位で14基の礫群が検出されている。5つの尾根と4つの谷からなる本遺跡の中央尾根（西から3つ目）L～Q-12～15グリッド付近には休場層中位および下位で礫群および礫の分布が見られ、この尾根に位置するTP01はその一部に含まれると推測される（第36図）。なお、中央尾根西側の谷に位置するTP05' とTP06で出土した礫には、過年度調査で関連の見出せる礫群は存在しないが、谷を挟む東西の尾根に散漫な礫の分布は確認されるので、そうした礫が谷部に流れてきたものと考えられる。

2 縄文時代

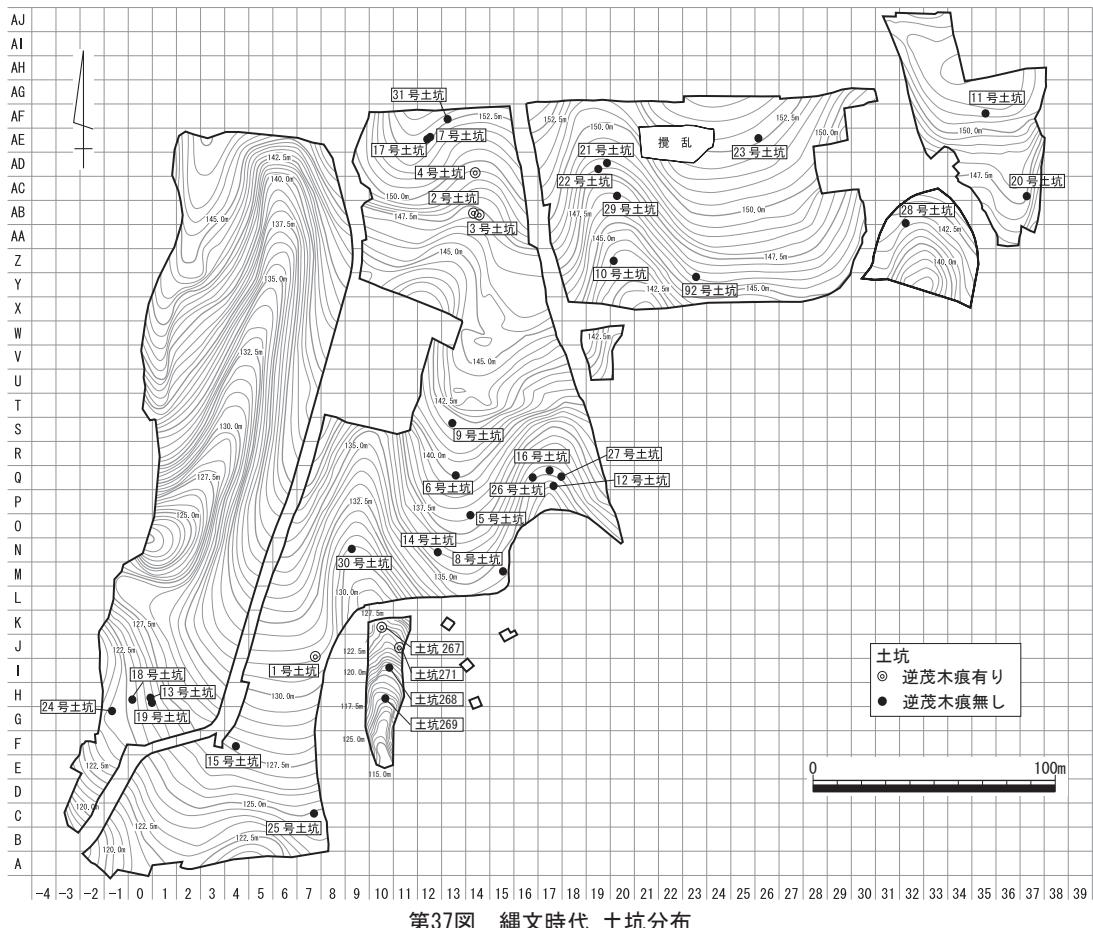
過年度調査で検出された遺構は、土坑、焼土跡、集石、石斧集中であった。早期中葉から後期までの土器が多数出土しているため、これらを含む時期に相当する遺構と考えられる。一方、今回の調査で検出された遺構は土坑、竪穴住居、小穴、焼土、および集石である。前期の土器（諸磯b式）が出土して



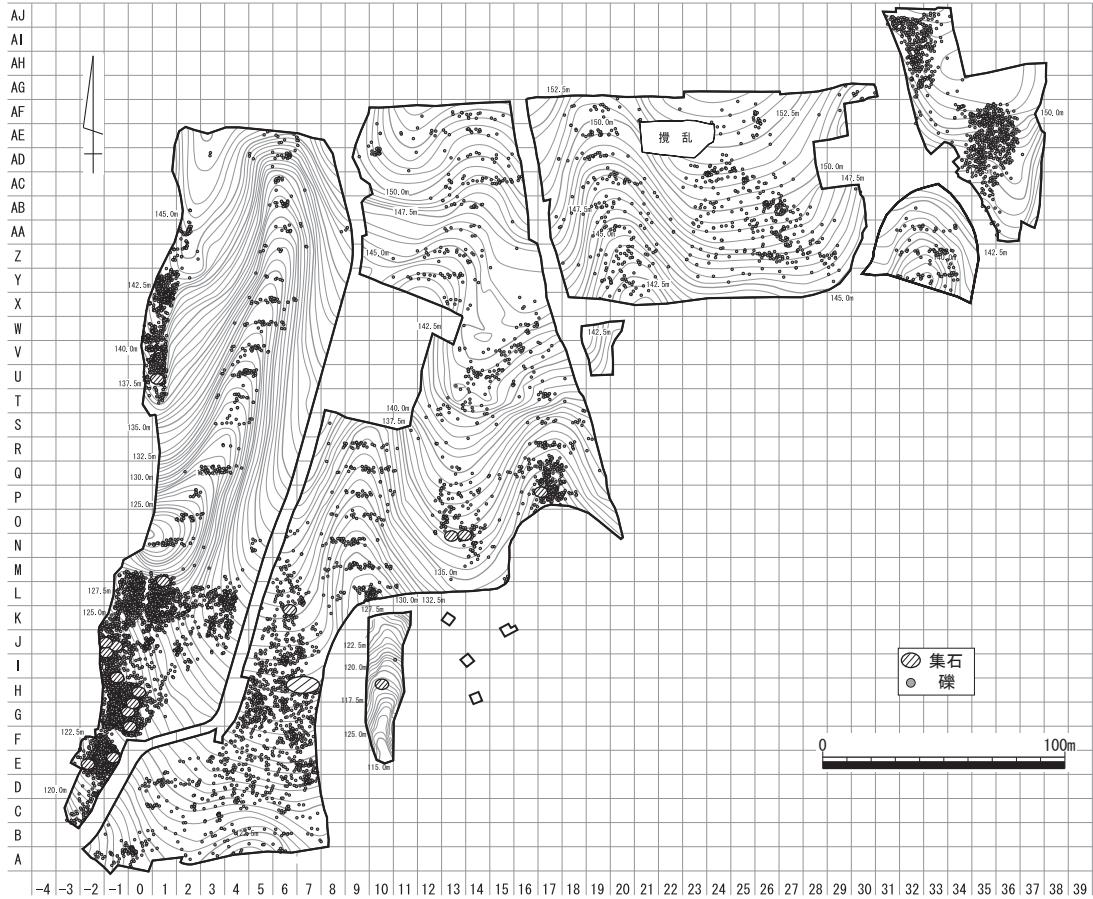
第35図 第VII黒色帯～第IIIスコリア帯スコリア2 矶分布



第36図 休場層 矶群・礫分布



第37図 繩文時代 土坑分布



第38図 繩文時代 集石・礫分布

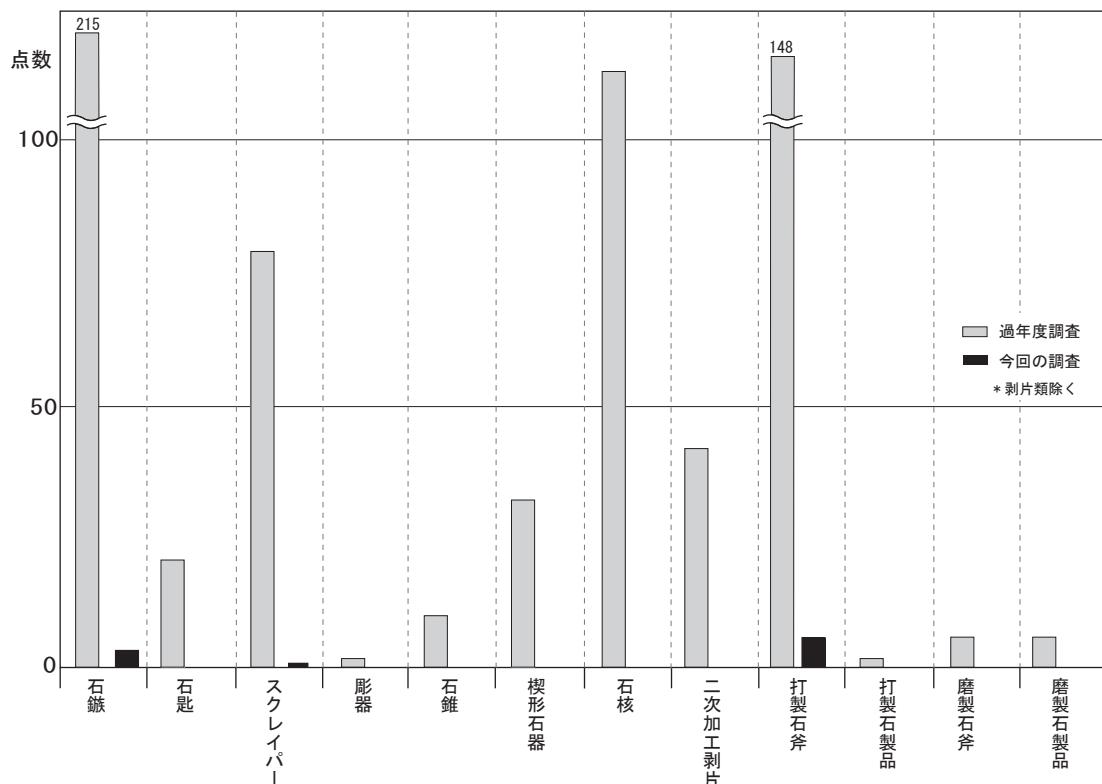
いることから、この時期を含む遺構と考えられる。その点から今回の調査で検出された遺構は、過年度調査の遺構の当該期遺構と関連するものと考えられる。

土坑は、過年度調査では31基検出されており（第37図）、平面形は楕円形・円形・隅丸長方形など7種類に分けられている。今回検出された土坑4基の平面形は隅丸方形と楕円形で、断面形は逆台形状3基、皿状1基であり、過年度調査の成果に同種のものが含まれる。逆茂木痕を持った土坑は、過年度調査で4基、今回の調査では2基が検出されている。土坑の立地は、過年度調査では尾根部にも谷部にも確認され、谷部では谷筋に沿う傾向が認められる。今回検出された土坑は谷筋に沿うものと判断される。

集石は、過年度調査では調査範囲南側の西半に18基検出されている（第38図）。尾根部では旧石器時代の礫分布と重なる傾向がある。覆土に炭化物や焼土を含むものが多く（掘込みのある全7基）、石器や土器を伴うものもある（11基）。集石の規模は様々で構成礫数は24～1118点である。一方、今回は1基で、構成礫は4点と極小である。また、掘込みを持たず、遺物も共伴していない。過年度調査では谷部にも集石及び礫分布が認められるので、それらと関連性のある遺構と考えることも可能である。

竪穴住居と小穴は、今回の調査では検出されたが、過年度調査では未確認である。検出面は暗褐色土層であり覆土の暗褐色土層と富士黒色土層との判別が難しいことが、遺構検出を困難にしていたと考えられる。

過年度調査では非常に多くの石器がなだらかな丘陵地と谷底付近を中心に出土し、4つの石器集中域と2つの石斧集中が確認されている。剥片石器の内最も多く出土した石器は、石鏃215点であり、次に打製石器148点、削器72点と続く。今回の調査では出土数は23点と少ないが、石鏃3点、打製石斧6点、スクレイパー1点が出土している（第39図）。また、今回出土の石鏃は全て無茎凹基尖脚であり、打製石斧は短冊形薄型で頁岩と粗粒砂岩を石材とするなど、過年度調査出土石器の組成・形態・石材に大きな違いはない。今回の出土石器は北側に続く谷部と西側の尾根と関連したものと考えられ、主に尾根部で活動し、時に狩場として谷部を利用した姿を想像することができる。



第39図 縄文時代 出土石器数

3 弥生時代～古墳時代

過年度調査では調査区の西南端で調査区外にのびる竪穴状遺構1基を検出している。遺構は弥生後期中葉の土器を伴っている。床面は検出されていないが、掘方底面にいくつかのピット状の掘り込みがあり、炉を埋めた跡と考えられている。これを住居と積極的に評価すれば、後期中葉には集落が存在した可能性がある。

今回の調査では弥生時代～古墳時代の遺構は検出されなかったが、弥生後期後半～古墳前期初頭の土器が出土している。土器は谷底の中世以降の溝に沿って出土しており、二次堆積したものである可能性が高い。弥生後期中葉～古墳前期初頭にかけて集落が存在していた可能性が考えられる。

4 その他の時代

今回の調査と過年度調査のどちらでも多くの溝と円形土坑が検出されている。

溝は、谷筋に沿って両斜面に延びるものと、谷筋に直交して延びるものとが両者に確認できる。過年度調査全体図に今回の調査結果を加えると、今回の調査域の溝は北側の過年度調査域へ谷筋に沿って続いている様子が見て取れる（第40図）。過年度調査では谷頭部または傾斜変換点から逆U字状に延びる溝が複数存在している。谷筋に沿って両斜面に延びる溝は、この逆U字状の溝から続くものと考えられる。また、谷筋に直交する溝は、傾斜が緩やかな地点で谷底を挟んで両斜面に延びている溝を繋いでいることがわかる。このことから、谷筋に沿って両斜面に延びる溝と谷筋に直交する溝を組み合わせた土地利用を考えることができる。

円形土坑は両斜面に延びる溝の谷側に間隔を持って並んでいる。また、円形土坑は谷の西側斜面に多い傾向をうかがうことができる。

その用途は判然としないが、溝と円形土坑の配置は一定の傾向を持ち、また両者には何らかの関連性があったと推測される。

5 まとめ

第二東名建設事業に係る秋葉林遺跡の発掘調査は約65,000m²に及び、旧石器時代から古墳時代にわたる数多くの遺構・遺物が検出された。

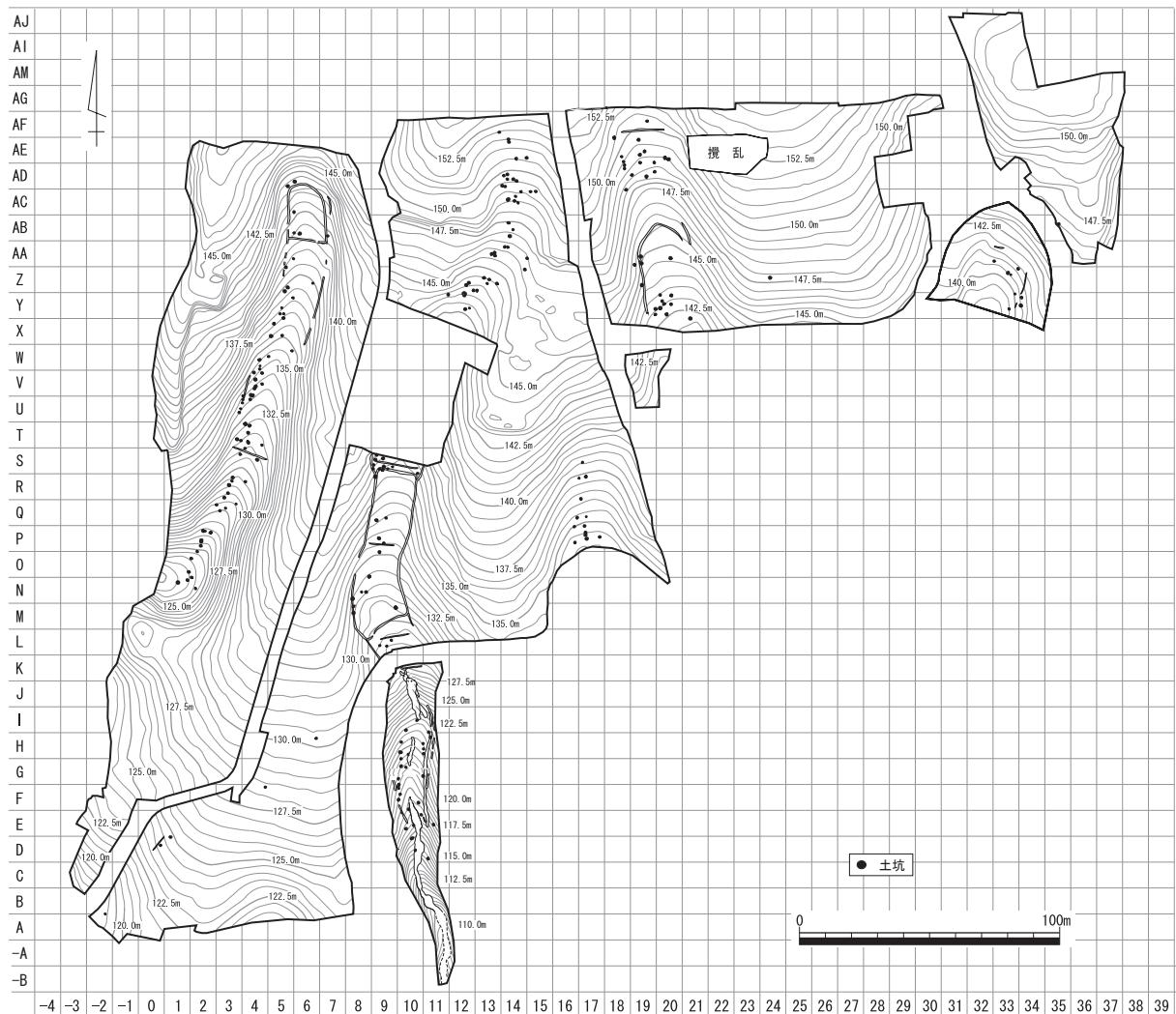
旧石器時代では第VII黒色帯から休場層に至る各土層において、10枚の文化層が検出された。第VI黒色帯から第IIIスコリア帯スコリア2にかけて遺構・遺物が希薄となるものの、ほぼ間断なく人々が活動していたことがうかがえた。特に第VII黒色帯からは国内最古級と考えられる石器群が検出され、休場層下位からは涙滴形を呈するナイフ形石器と柳葉形を呈するナイフ形石器が併存し、砂川期への移行段階と推定される石器群が検出され、さらに休場層上位～富士黒色土層から細石刃石器群が検出されるなど、後期旧石器時代初頭から終末までの重層的な石器製作及び人々の活動をみることができた。

縄文時代には草創期から後期の土器・石器が多数出土し、中でも早期中葉から後葉の時期のものが特筆される。集石遺構、土坑の多くは当該期のものと考えられ、狩場を主体とした土地利用を想定することができた。他方、今回の調査では竪穴住居と判断した遺構が1基検出されており、時期決定には不確定要素を含むものの、一部には居住域も形成されていたと推測される。

弥生時代から古墳時代初頭には竪穴状遺構1基と土器が検出されている程度で縄文時代に比べ遺跡内の土地利用は限られている様子がうかがえる。当該期は、遺跡の東約3.5kmに位置する足高尾上遺跡群で数百軒に及ぶ竪穴住居、掘立柱建物が検出されており、活動拠点は同遺跡群周辺にあったと推測される。

古墳時代後期では5基の古墳が検出されている。1号墳からは圭頭大刀などの副葬品がみられ、畿内王権との関係の深さをうかがわせる。

中世以降と考えられる谷をめぐる溝及び円形土坑は、利用目的は不明であるが、今回の調査でも一定量確認されており、これまでの調査成果と重ね合わせることで大規模に形成されていることを改めて確



第40図 新期スコリア層 溝と土坑

認できた。

以上のとおり、秋葉林遺跡では、旧石器時代から縄文時代早期にかけて活発な土地利用をみることができた。弥生時代以降は遺構・遺物の量は減少するものの、古墳時代の横穴式石室等、地域首長に関連する遺構も確認されており、副葬品の性質から愛鷹山周辺の地域集団の地位をうかがうことができる。第二東名建設事業に係る発掘調査については隣接遺跡の成果も調査報告書として一部公表されており、これら成果と総合的に考えあわせることで、地域の歴史をより明らかにすることができると考えられる。

参考文献

- 中村雄紀 2011 「静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷」『東京大学考古学研究室研究紀要』25
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『秋葉林遺跡 I』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『秋葉林遺跡 II』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『的場古墳群・的場遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『元野遺跡』

写 真 図 版

図版 1



秋葉林遺跡遠景



本調査区完掘状況

図版 2



テストピット01



テストピット01～04調査終了状況（南より）



テストピット05'



土坑267



土坑268



土坑269



土坑271

図版 3



土坑270



集石19



焼土 4・5 検出状況



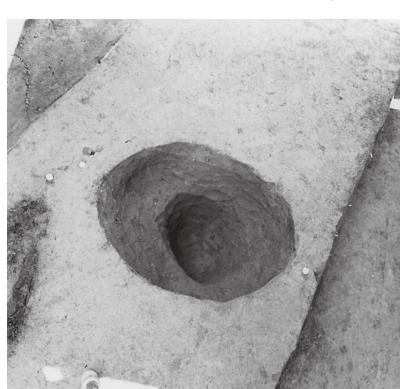
焼土 4・5 完掘状況



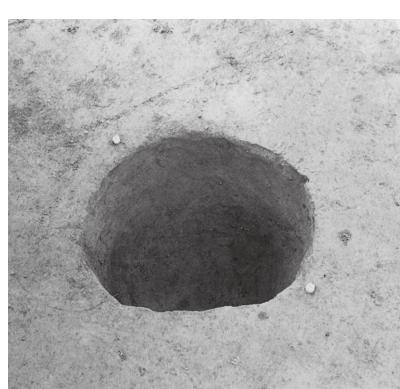
堅穴住居完掘状況



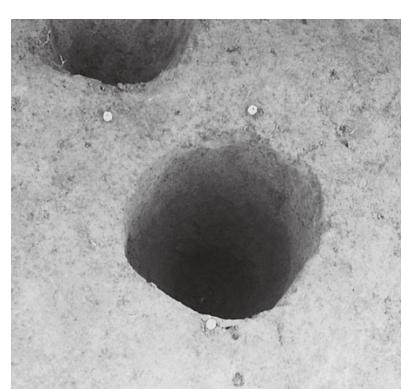
小穴 2・3 断面図



柱穴 1



柱穴 5



小穴 11

図版 4



新期スコリア層完掘状況（北より）



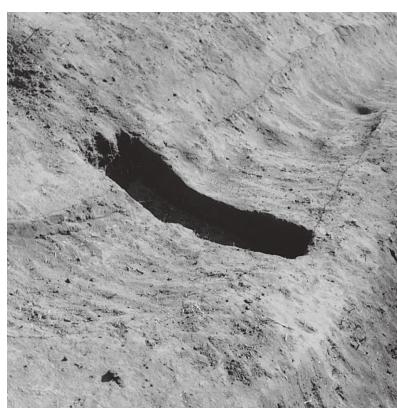
溝SD16



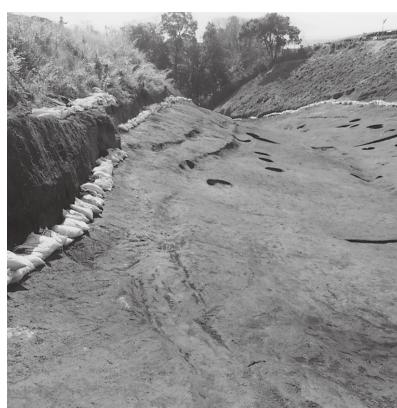
溝3（SD17）



溝3（SD24）



溝1（SD22）



溝2（SD19）



溝4（SD27）



土坑241

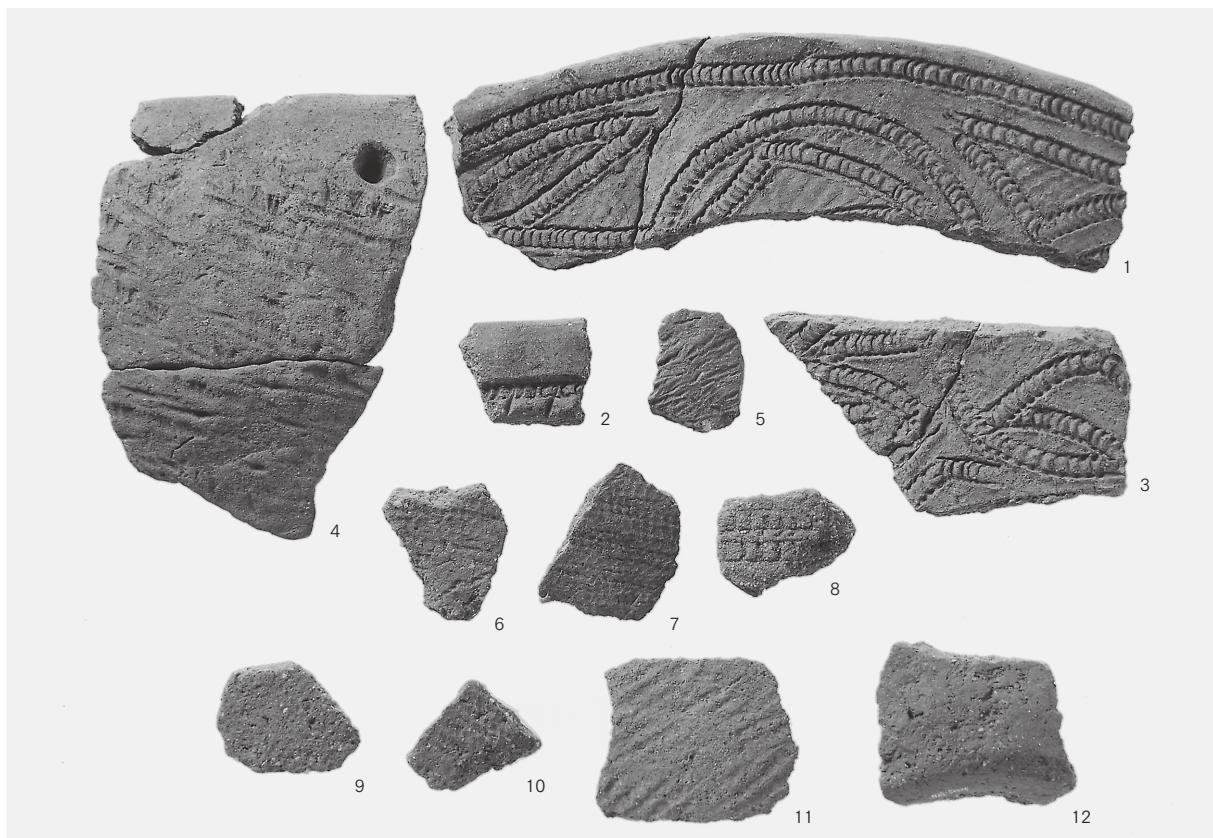


土坑246

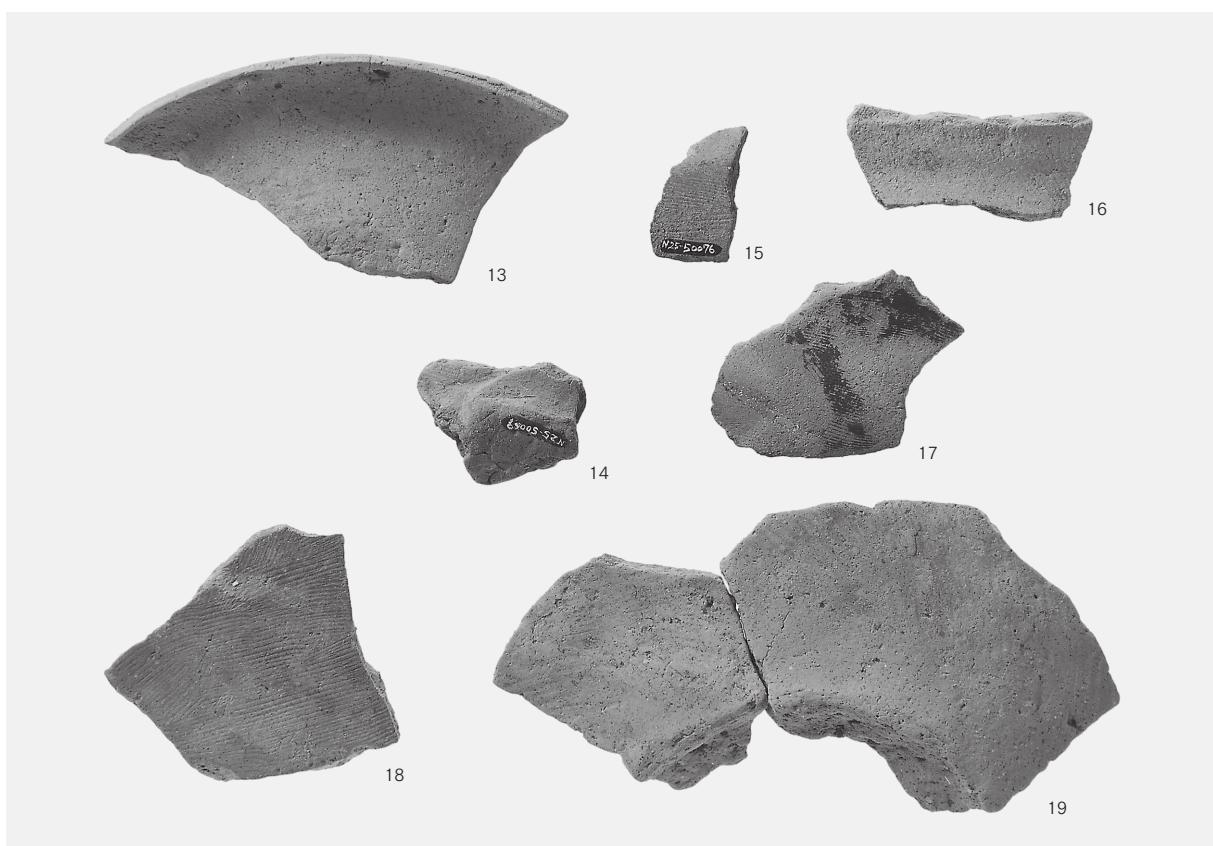


土坑251

図版 5

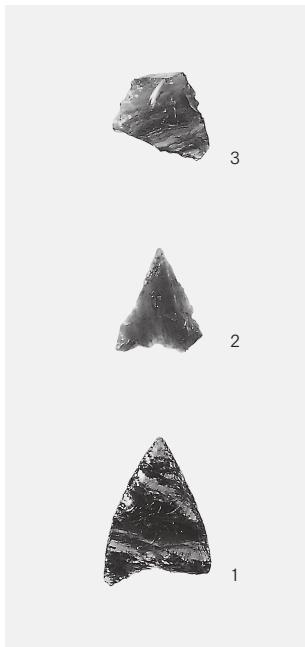


縄文土器



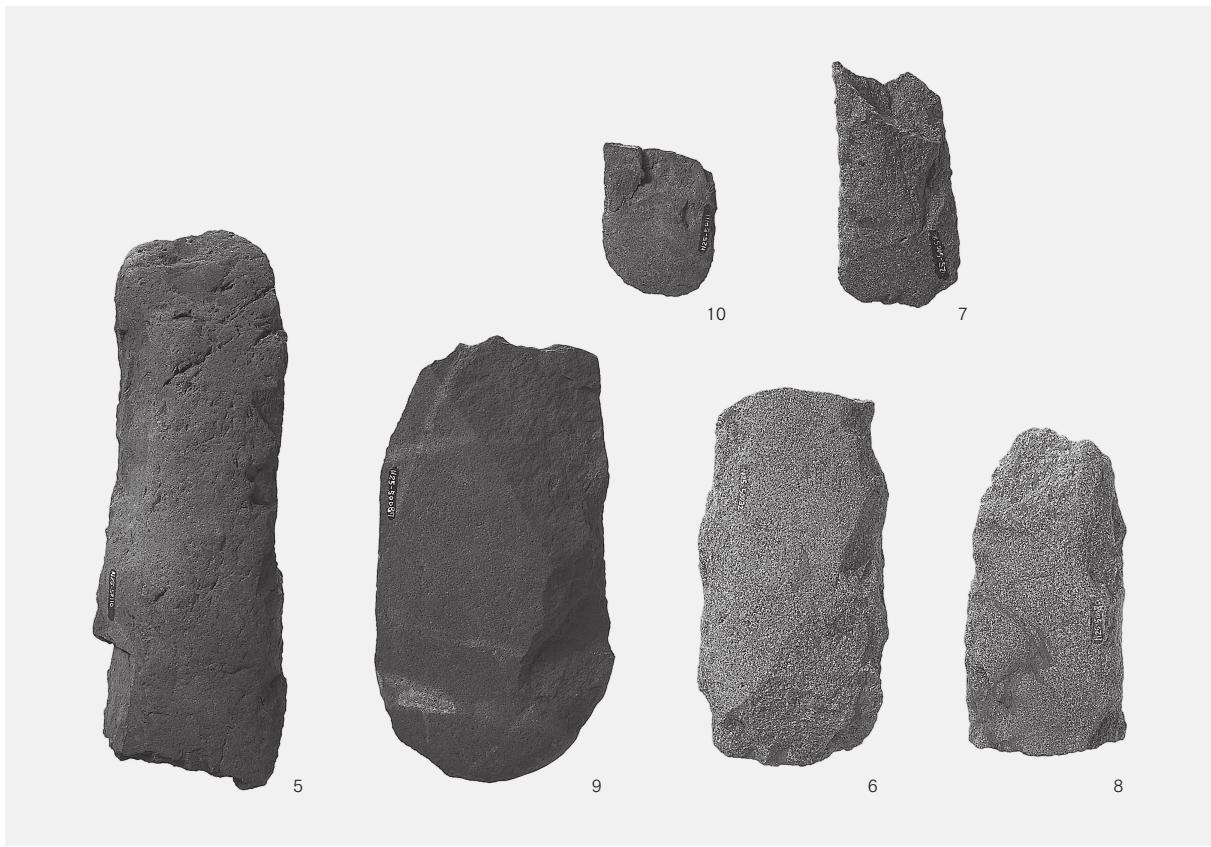
弥生後期～古墳前期土器

図版 6



縄文石器 石鏃

縄文石器 スクレイパー



縄文石器 打製石斧

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第9集

秋葉林遺跡Ⅲ

第二東名No.25地点

沼津市-9

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年2月29日 発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261(代)

FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839(代)

